



Cotton
Hearts

ミラクルズ!
MIRACLES!

NEVER GIVE UP, GO AHEAD, AND DO...

はがのうじゆくせき

Miracles! Episode 12

- Cotton Hearts -

日露ハーフの元フィギュア
スケーター。物語柔らか。
微笑みを絶やさない。
中盤の働き輝。 ニービー。

1
1ST

平野
エレナ
ELENA
8FM

ボーイッシュ元気一番。
ムードメーカー。
FW兼任の超反応GK。

吹田千里
CHEETAH
GK

天下無敵のオドケ倒せあせうさま。
敵も味方も大混乱。

鉄壁の右サイドブレイク。

「単純だけどそこが
カワイイ優れぬ坊。
ユース代表の達成。
エース・ストライカー。



見た目派手で
縁の下の力持ち。
分配り大好き
マネージャー。

一見ミコガーベイブ、
実は底の知れまい
オ少女。
ファンタジスタ。

ヒロイン
本日の主賓

登場人物
ご紹介

時にかうアル時へ武ト、
靈を見正目に編みかへては
ハトモ。不屈の守護神。

日系セラジリアン。
誰にも止められぬハグンジリサコハ嬪。
トリッキー・ウイグ。

宇忍
SHIBOU
銀

マキ・
ハラ・
キワダ
MAYUKI
HARA
KIWADA

3
RD



クーリー生徒どこのない、
どく時に何も考えてない
ネコ娘。
高慢戦闘爆撃
センターフォワード。

努力家の頑がね姉貴。
ガツリと勝手は
天下一品！
MF/DF 自備職人。

B3桁のダイナミクボディー。
ハイキングを荒ら回る食神。
フェアプレー・DFI-ダー。

神經質さううううう。
オヤシモカジイ委員長。
クレバーハスピードDF。

天真爛漫食いしん坊な
ナララルーガール。
超攻撃的ハフルリバロ。

無口ながら
存在感がありの
超絶美女。
実はお茶目。
フィジカル系
エナーフォワード。

2
ND

美原
MIZUHI
百合
HANAKO

天満蘭
AMANAMI
ラン
RUN

堺愛
SAIGAWA
LOVE
エフ



セニス坂群
切れ木坂群
なんだかんだがいいところ
ざいい奴。光速サイドアタッカー。

強く優しく頼もいすぎる。
我らが大黒柱。
ペーストボランチ、キャバレー。

空道サッカーチーム
美浪花主婦。
盛り上げ上手な
テクニカル司令塔。

●あらすじ？

「どきどき・サッカー・クラブ」略してDSCは
とある街の女子サッカークラブチーム。
11人きっかりですが、
ただいまは冬の日本一を決めるオープン大会
「クイーンズカップ」めざし、にぎやかに奮闘中。
春、待望の新入生がやってきます。
はてさて、どんな若人が門を叩き、
いや無理矢理引きずり込み、
どんな騒動が巻き起こりますことやら……

●もくじ！

- | | |
|-----------|--------------|
| ■わたし、住吉吉都 | ■エレーナ |
| ■おうち | ■お風呂 |
| ■おひる | ■楽しいぼくらの仲間たち |
| ■DSC | ■インターバル |
| ■エンド | ■勝負の前 |
| ■祖父待つ明日葉 | ■勝負前半 |
| ■取り巻き | ■勝負後半 |
| ■喧嘩 | ■カラオケ屋 |
| ■PK勝負 | |
| ■またエンド | |

■わたし、住吉古都

わたし、住吉古都。

この春、高校生になりました！

今日は入学式です。

高校生といえばもう大人も同然、自由があります、夢があります、義務があります、責任があります、そして……新しい愛が、きっと!!

……すみません、テンションがちょっとおかしいですね。

でも、本当に楽しみなんです。なんといつてもこの高校は自由な校風で人気が高くて、意外に難関だつたんですよ？ 特に私みたいな可愛い他になにも特技のない普通の女の子にとつては推薦も取れないし……

冗談ですよ？

思つてませんつてそんなこと。
思つても口に出しちゃ台無しじやないですかわははー。

「残念」つてたまに言われます。

「古都は口さえ開かなければね」とマイマザーにまで言われます。

やかましいつて感じですよね！

わたしがレシードに跳ばなくて誰が跳ぶっていうんですか。

……そんなことはいいんです。

新しい生活。そう、新しい日々！

ところでみなさん、「夢」つて、あります？

ありませんよねえ。
わたし、ありません。

なんか夢を希望を持て持てつて子供の頃から学校も社会も言うんですけど、持つも持たないも、そんなの運じやないです。

恋つて、するものじやないでしょ？
落ちるもの、ですよね？

でもまあ、持つてる人の輝きは素直に羨ましいです。

だから、わたし、できればこの高校生活で、その夢つていうわたしに無いものを、見つけたいんです！

そう！わたし、こう見えて人に頼まれるとイヤと言えない性格で、すぐおせつかい、焼いちやいます。中学では流れ流されて生徒会副会長とかやつてました。これがまた会長さんが日露戦争の大山巖かつてぐらい動かない人で……

いや！もう過去のことはいいんです。

わたし、住吉古都、今日から、いえ今から、自分のやりたいこと、打ち込めること、燃えること、つまり夢、見つけますっ！！

「……はあ、はあ、はあ、はあ……」

「あ、あの……だいじょうぶ？」

隣の女子に声を掛けられました。

あ、もう式が始まる。

「ご、ごめんなさい、つ、つい盛り上がりすぎて……はつ」

振り返るとそこに居たのは……

これはまた、とんでもない……

「……？」

美少女、なんて手垢の付いた単語では到底追いつかない、えー……姫様……妖精
……天使！ 天使！

とつても小柄でとても華奢、えつ制服にこんなレングスあるんですかというウルトラミニに、サイハイソックスいわゆるニーソックスでつまり絶対領域つていうのが眩しい。小顔で鼻口小さいのに瞳はあくまで大きくキラキラまるでアニメキャラ、髪はサラッサラで息吹けばなびきそう。大きめの制服の裾からちよつと出る手指、いやらしい！その「袖あまり」を使いこなすのは難しいのよいやらしい!!

……すみません前言撤回、わたし可愛いないです。「可愛い」っていうのはこういうスペシャルな女の子を使う単語ですよね……

「……な、なにか、私の顔、変ですか？」
「ハツ!! あ、ううん、かつ」

わいいな、と思って、なんて言うと変質者ですね、えー

「葛根湯の、飲み過ぎで、昨日。風邪引いてちやつて」「あらら、それは大変。大丈夫ですか？」
「あ、うん。わたし、葛根湯慣れてるから！」

「ふふつ……」

微笑むとホント天使。ああ、こういう人いや人じやないか、迎えに来たら、そりや現世のことなんか綺麗サツ。パリ忘れてサツサカ天国行つちゃうわ。

「あ、あの、わたし、住吉古都！ よろしく！」

「あつ、私、天王寺ありす、つて言います。よろしくおねがいします」

ありすちゃん。

そんな名前なかなか付けられませんよ怖くて。でもご両親賭けに勝つてる。少な
くとも今現在は「ありす」でも足りないぐらい。

「あれ、わたし『す』なのにこんな後ろでいいの？」

「あ、この学校はABC順なんだつて」

「あ、それで『S』で『T』なんだ」

「そうそう。ふふつ」

声もかーいらしーなーこれもう！

なにその「ふふつ」つて!!

そんな笑い方わたしできない！

なんだこれ本物、天然、やつぱり違うわわたしみたいな作り物養殖とは！　あー
はーはーはーはーはーはー！

ばしーん！

「ど、どうしたの住吉さん!?」

そりや初対面の子が突然ハンケチを床に叩きつけたらビックリしますよ・ねー。
素直に告白することにしました。

「わたし実は！　可愛いものが大好きなの！」

「えつ、あつ、そ、そうなの？」

そ、そういうえばそのリボンも、可愛いね！」

「ふつふつふ、高校生になつたらこれもうキツイかな、と思つたんだけどまだイケ

るよね！」

「うん、住吉さんすごく似合つてるよ！
他にそんな大きなリボンしてる人居ないし！」

……。

彼女は「輝くような」という形容詞がぴたりの微笑みでこちらを見ている。
ま、まあ「似合つてる」んだからそれでいいじゃない……

「と、ともかくこんな可愛い女の子といきなりお知り合いになれてわたしの高校生
活幸先いーい！！って感じで大興奮！」

「あつ、そういうことなんだ！」

私も、住吉さんみたいな素敵な人と知りあえて、幸先いいよ！」

あれつ、前半への謙虚とか謙遜とか無しですか！　こりや相当言われ慣れてます
ね！！

「あははは、またまた、ステキだなんてそんな見たままをー。わたしこう見えても

なんの取り柄も無いからー！」

「そう。私も！」

……んー……

これはひよつとして滅多に手に入らない大砲か。

あらためてマジマジ見ると、小さいけど幼い感じはなく、全体的に存在感がハツキリしてていやもう……天使としか。

はー……こんな人、いるんだ。ホントに。

「まーたまたー。天王寺さんにはその美貌があるじゃなーい！」

「……これは、私、なにもしてないから」

変わらずにこにこして、そう言う。

……ああ、大変なんだな、本物の美少女って。こんなこともう何百万回も言われてるんだろうな。
ごめんなさい。

「それから、『あります』でいいよ。てんのうじ、つて言いにくいくから」「じやあ遠慮なく、あります殿。わたしも『こと』で、ぜひ」

「うん！　いい名前だよね、楽器の方？」

「ううん、アンティオキアとか京都の方。

ということでこれから新入生美少女チエックを……」

「ふふふつ、本格的ですね」

「ええもう。どうですご一緒に。

……あつ、すごいブロンド！　あの子本物かなー？」

「あつ。うん、輝いてるから染めてるんじゃないんじやないかな」「後ろからだとわかんないなー。こっち向いてくれないかなー」

「……あのポニーの子はどう、ことちゃん」

「おおつ!?　いいとこ眼つけますねダンナ！　うん、あの子姿勢すごいいいね！」

きつとああいうタイプは美女だよー。こっち向けー！」

「ふふふつ」

——なんてことをやつてるうちに式は進み。
名前を呼ばれ、ひとりひとり返事をして起立します。

「……此花可憐！」

「ハイツ !!」

ポニーの子は講堂に響き渡るようなハツキリした声で。立ち背中もすぐ綺麗。なにかスポーツか武道かやつてるのかな？

「……平野エレーナ！」

「はいっ」

ブロンドの子はやつぱりハーフなのかな？ 大柄なのに、可愛い声。わ、ちょつ

とふくふくしてていいな〜。

「……吹田千里！」

「ハイイイツ !!」

会場から笑いが漏れた。

いかにも、さつきの子より大きな声を出してやろう的な。見てみると、あ、珍しい。制服の下がショートパンツ。

この学校の制服は、下とタイが選べて、ソックスと靴が自由。彼女はクリクリ大きな目に横房だけ長いショートカット、まるで半ズボンを履きこなす小学生の男の子のようで、ありすちゃんとは別のベクトルですごく可愛い。

「ボーグシユで可愛いね、あの子」

「元気いっぱい」

「ちょっとお調子者っぽいけど」

「……それでは、新入学生にこれから抱負を述べてもらいます。

新入生誓いの言葉！

代表、西九条明日葉！

「はい！」

新入学生代表つて、どうやつて決めるんだろう？ やっぱり入試の成績一番？ そ

れとも後援会かなにかのコネとか？

あつ、でも！

「最後に大物！」

「うん！　きれい……」

ちよつと古風なおかつぱ頭、でも細面にとてもとても端正な目鼻立ち。手足もスラリと長くて、まるで日本人形みたい。長めのスカート白いソックス、遠目からでも高そうとわかる上品な輝きの黒い靴。しづしづと進むその姿はまるで鈴蘭の花のような……

「…………わたくしたち新入学生は！　あたらしい日々にいま！　胸を踊らせています！　……」

「ああ、いい声。なにあれ、まさに天女じゃない！　キーッ！　神様不公平！」

「…………あれ？　ひよつとしてまさか、西九条つて、あの西九条財閥？」

「ほい？　はは、まさーかー……」

「ことちゃん見てない？ 黒ーい長ーいリムジンが校門前に停まつてたの」「あ。

え、えーつ！？ で、でも……

超神様つたら超不公平!!!」

そういうえば、どこから見ても凛とした立ち姿、声や所作から溢れる気品、名家のお嬢様としか言いようがない。

きょうなんかわたし、「言いようがない」としか言いようがないですね。

「……でも、しつかり者っぽいよねー」

「うん！ 賢そう……」

「きっと住む世界が違うんだよ……」

「許嫁とか居るんだよ、きっと。皇族とかの」

「三歳で親に決められたんだよね。政略結婚で」

と、庶民二人で、つてありすちゃんはそうなのかまだ知らないんだけど、やつかんなり。

「……でもひよつとしてお近づきになれるのかしら！」

「案外普通の友達が欲しいから、学習院とかじやなくてここに来たのかも」

「それだ！ 玉の輿う！」

「たま……えつ、ひよつとしてことちゃんつて」

「あ。ああ、ううん、恋愛対象は男性！ のはず！」

「そうだよね。じゃあ、美少年センサーも既に作動中なのかな？」

「へ？」

「あ、いや……男子は顔じやないでしよう！」

「あ。あはは、そうだね。」

「……女子も顔じやないんじや……」

「うーん」

「女は愛嬌」とよく言います。

「可愛い」っていう言葉にはいろんな意味があつて、愛嬌があると、顔の造作はそういうのでもなくともとても魅力的に見えます。

そして愛嬌というのは、つまり、他者へのサービス精神であり、そういうものを

持つてる子は、たいてい、友達になると、いいやつです。
だからわたしは、「可愛い」子が、好き。

「……じゃ、『魅力的な人センサー』で」

「ふふ、おめがねにかなつて光榮です」

「うむ、精進したまえ天王寺君」

「はい。ふふつ」

「ふふふふふふ……」

わたし絶対あんのできない、という惚れ惚れするような完璧な挨拶に、割れんばかりの拍手が響く。新入生もその保護者も先生方も、彼女の素性を薄々気づいているのだろう。

生徒の視線、特に男子なんかもうみんなポーッと席に戻る彼女を見つめっぱなし。憧れのマドンナ早くもけつてーい、つて感じ。

ああ、モノがまるで違うわ。彼女はそれこそ、コーラとか飲んだことないんじやないだろうか。

そんなこたあないか。この現代社会で！

「……あんな大物がいるなんて、これからおもしろくなりそう〜〜。ワクワクしてきました！」

「うん、なんだかちょっと見回しただけで、多忙済済つて感じだね！」

「ありすちゃんもいるし！」

「ことちゃんもね」

顔を見合させて、笑った。

やつぱり、天使のようだつた。

きつとわたしが男の子なら、壇上の天女とここにいる天使で、悩んだりすることだろう。

——いま思い返せば。

もしうちの高校がABC順でなくあいうえお順なら、ありすちゃんとあの瞬間にお友達になれたかどうかなんてわからないし、それぞれに友達の輪を作つて、卒業までただの同級生だつたかもしれない。

し、

もしそうだつたとしても、何かに導かれるよう同じ場所に居場所を見つけて、同じように親友になつたのかも、しれない。

人に役立つ「腐敗」のことを、「発酵」つて言うんだって。
だとするなら、あとから意味を見出す「偶然」のことをたぶん、「奇跡」つて言
うんだと、思う。

「奇跡」はいまこの瞬間にも、たくさん起きてる。
ただわたしたちはそれを、見つけられないだけ。

「……古都、なあに、そんなニヘニヘして。キモチワルイ」

いつもながら母の容赦無い言葉が、夕食前のテーブルに舞います。

「あ、ううん、ふふつ、もうすでに友だちができて」「
「相変わらずあなたのパツと見の人当たりの良さは天下一品ねー」
「高い社交性と言つてよう。」

だいたい実の母の癖におかあさんわたしに厳しいよ」

「あなた見ると若い頃の私を思い出して不安になるのよ。余計なことにクビ突っ
込んで青春を浪費して道に迷つた日々が」「
「あーたこのご時世にあの優しくてだらしないパパンの専業主婦できてこんな可愛
い娘が居るんだから、どこに不満があるの」
「ほつとけなかつたのよ……」

「ほつとけないよね……あの冬起きてきてガスストーブつけない癖、なんとかならないのかなー」

「ボタン押すのが面倒なんだからもうどうにもできないわ……エアコンのタイマー掛けとこうかしら」

「ふふ」

やつぱり少しさは、この母から世話を焼きの血を継いでいるんだろうな……

「……友達って、あの、式で隣に居たちつちやい子？」

「あ、うんそう」

「ああ、あの子可愛いわね〜」

「可愛いよ！ すっごく可愛い！ 名前もね、天王寺ありすって可愛い名前！」

「ありすちゃんかあ。ご両親思い切ったわねー」

「うん。でも負けてない」

「注目集めてたわよ、あなた達二人」

「えつ、ホントマジウソホントに!?」

「うーん、ありすちゃん遠目から見ても目立つてるとーん。あなたのリボンと」

「わたしやリボンかーい！」

「実の娘持つとわかるわよ、娘なんて木魚か炊飯器ぐらいにしか見えなくなるの」

「特にわたし、お母さんに似てるしね……」

「お父さんに似てたらもうちょっと愛せたんだろうけど……」

特にやなのは体型で、背がちょっと足りないのに胸とおしりが大きい変な体型がそつくり。わたしはリボンとかおさげするのでしようがないけど、母も幼く見えるらしくて、以前中学生と高校生で映画に行つた犯罪の経験も……ええもう姉妹に間違われるのはいつもです。ていうかこの人、いまはわたしの妹に見られるのが目標。

「あ。でもあの代表の西九条さんも。さすがお嬢様って感じね」

「あつ、やっぱり西九条さんつて、あの財閥のお嬢様なんだ」

「ええもう。ご両親忙しいからつて、父母説明会に執事の人来てたわ」

「執事！ そんな家ホントに日本にあるんだね！」

「お近づきになつて就職のコネとか今から確保しひときなさいな」

「またその生々しい話するでしょー。ママの良くない点だよそのどこでもぶつちや

け話ー」

「これで・パパを・捕まえたから・いいの！」

「まあ、変な仮面被るよりは、いいのか、なあ……」

「そうよう、人間素直が一番！」

「でも西九条さん綺麗だつたなあ……そゆこと別にして普通に友だちになりたい」

「ふふつ、なれたらいいわね」

「頭も良さそうだししつかりしてそうだし、完璧超人じやない。お母さんもあのぐらいにわたし生まなきや！」

「ビッグリボンの似あうビッグヘッドに産んであげただけでも感謝しなさい」

「あたまが大きいことは、言うなー！」

「事実だから」

「うう……おに」

「事実を述べて鬼呼ばわりされるならテレビ局は鬼ヶ島になるわ！」

「テレビなんか事実述べてないじやん」

「またそんな世の中を斜め見る。

良くない点よ古都の。

いい、世の中斜めに見てもいいことなんかひとつもないんだから！」

「真っ直ぐ見てても別にいいことないでしょ？」

「ああもう、若い頃の私そつくりでイライラする！ なんで女の子つて自分に似るのかしら!!」

「おかあさん今からなにか資格か何かの勉強して自分探しの旅に出たほうがいいんじゃないかな……暇だからそんなカリカリするの」

「そんな面倒なことできますか。人生は短いのに。馬鹿馬鹿しい」

「おかあさん、なんでもかんでもは無理だよ、しかも楽して……」

「たつた一度の人生なんだから、できること全部やんなきや損よ!! できるだけ楽

をしながら!!」

二〇年ぐらいするとわたしこうなつちゃうのかと思うと、不安です。
やつぱりなにか打ち込めるものを探したい、なあ……なんでもいいから。

「……おかあさんそんなこと言つて別に何も世の中に貢献してないじゃない……」
「してるわよ、この笑顔で」

につこお。

……まあ、適齢期の男性なら堕ちるんでしょうね、これで十分ね。パパはママのこと異常に大好きですから。

娘の前で「ぼくのラヴ」とか平気で呼びますからねあの人。

バカじやないかと思います。

この人はこの人で口ではこんなこと言つてますがパパにメロンメロンで、そう言われるたびに年甲斐もなく頬をポツと桜に染め「ミ・アモーレ」とか返すんです。

アホーレですよね。

そうわたしはバカとアホウのハイブリッド！

なんだか絶望してきたな……

まあ、そう考えると母は少なくともひとり、人間を救つてる、か。

「……わたしあかあさんほど笑顔に自信ないよ
「覚悟が足りないのよ。

自分可愛さが少しでもあつては、この笑顔は出せないわ」

「ははーつ

「辛い時悲しい時めんどくさい時眠い時おなか減ってる時、でも笑う無理に笑う誰かのために、笑う。

これが住吉観都の！ 乙女のポリシー！」

「経産婦が『乙女』は苦しいナ」

「女の子はいくつになつても、お・と・め！」

「はい。わかりました。はい」

そこは尊敬してます、母上。

「……と、高校生の頃、バーガーショップのバイトで知ったの。作り笑いで男の子が無理に注文増やすのが面白くて、ああなんだ世の中チヨロイもんなんだな、って……道を誤つた！」

「その話もう三〇〇回ぐらい聞いたよ……最後それ入れないほうがいい話でまとまるんじゃないかなー」

「だから古都、客商売のアルバイトだけはダメよ。あなたも絶対そういうの巧いから。他はなにしてもいいけど、そういうイケナイ味をしめちゃダメ」

「わたしママと違うよー」

「世の中は厳しいんだから！」

「なんの説得力も無いわ……」

「でも、友だちづくりが巧いのは古都のいいところね。羨ましいわ」

「まあ。わたし可愛い女の子が好きだから」

「私はどうしても可愛い子見ると対抗心燃やしちゃって……ナンバー・ワンじやな
きゃやなの！」

「わからなくもないけど……」

「あなたみたいにコバンザメ的に可愛い子にくつづいて、寄つてくる男子から適当
におこぼれを頂戴してた方がよかつたわね」

「わたしそんなこと一度もしたことないよ！」

「もつたいない」

「パパンに言いつけるよ」

「だから私はできなかつたんだつてば。あーあ、無駄な学生生活だつたわあ……」

「ほらほら、済んだことを悔やんでないで、前向いて歩きましょ？」

「そうね。もう一度高校からやり直そうかしら」

「止めてよもー、洒落にならないからー」

「パパも喜んでくれそう」

「もホントに素で喜ぶからダメ。もホント止めて。も絶対ダメだから」

「……制服、あとで貸してくれる？」

「や」
「め」
「て」
「！」

「二二六」

「東洋文庫」

「二の」
目録

この母に鍛えてもらつて多少社交性が磨かれたんじやないかなあ……

「……ところで古都なにか、部活とか入るの？」

「えつ、どうして？」

「ああ、部活入つたらお夕食の用意少なくて済むのかなー、つて

「んー……うん、あの、楽しそうなのがあつたら、やつてみてもいいかな、

「そうなさい。そうなさい。」

あれま、あなた美術部

「あー……、あ、あれは……。手、泥だらけになるから

「あれ私才能あると思うんだけど。いや素人考えだけどね？ 私から遺伝したツラ以外は取り立てて芸のない貴女には珍しく」

「……いや、あれは、いいの。

あ！ むしろ軽音楽部あるみたいだから、そこでヴォーカ

「駄目」

「えーっ、どうして、いま流行ってるんだよガールズバンドつてー。高校生がラスベガスでライヴしちゃつたりするんだよー！」

「バンドとか、ダメ」

「さつき好きなことしなさいって言つたじやーん！ あれおかあさんひよつとしてライブハウスは不良のたまり場とか古いこと考えてない？」

「とにかく、バンドは、ダメ。

「これ世のため人のためだから」

「意味わかんない……わたし、カラオケ、大好きなのに」

「……さ、そろそろ出ますか。アモーレに確認して出れるか訊いてみる
「あつ、ねえねえ、きょうどこ連れてつてくれるの!?」

「焼肉！」

「えーっ……も、もうちょっと娘の高校入学祝いっぽいところがいいなー……」

「焼肉大好きでしょ？」

「……うんまあ……脂っこいお肉白ご飯に載せて食べるの幸せだよね……」

「今日行くところはね、本格派よ。鞄や上着をビニール袋に入れて匂いつかなくするんだつて！ ハラミの一枚肉に擦りにくにくを山と載せて炭火でじっくり焼いて……」

「わたし明日も学校だつてば！」

アーリオ・オーリオってあだ名付いやうじやない！」

「じゃー塩タンとか大人しいの食べておきなさいな。おほーほーほーほーほーほーほーほーほー！」

「オニ!!

グレして軽音楽部入つてヴォーカルやるから!!」

「それだけは止めなさい」

どうしてこれだけ真顔で止めるんだろう。
ま、別に、どうしても入りたいってわけじやないんだけど。

うちはひとりっ子なので、家族が仲がいい。それでもおかあさんは、あんな風に

言つて友だちを作れ作れという。

まあ、母の愛です。

「にんにくを粒のままオイルで丸揚げするの！ これがまたたまんない !!

ホクホ

……ちよつと自信なし。

——次の日。

「……ところでありすちゃんは、部活、どつかに入るの？」

「部活？ んー……」

初めてのお昼休み。ありすちゃんの席押しかけてランチです。これがまた彼女の
お弁当が小さなバターロールのお洒落なオープンサンドふたつ、つてまつたくもう、
そんなことだからおつきくなれないと！
わたしは、ちゃんと、おにぎり、六個。

「……うん、ちょっと興味あるよ。だけどどこかは特に決めてないです」
「あ。わたしとおんなじだ。じゃあね、放課後のクラブ新歓イベント、一緒に回
る？」

「あ、うん！　いいね！　ぜひ！」

ことちゃんは、以前なにかやつてたりするの？」

「えーと……中学の時なりゆきで美術部に入つて」

「あら。いいじゃない」

「粘土、を捏ねていたのですが」

「陶芸？　渋いね」

「……はい。

えー……コンクールで入選しまして」

「ええつ!?　そ、それ凄いね！」

「ところが。

わたし的には、まつたく、失敗作と言いますか、どうやつてもちゃんとならなくて諦めたグネグネの茶碗でして」

「は」

「こんな歪み歪みの、もう。

これ顧問の先生焼く前から大喜びでああだのこうだの言われて焼いて卒倒するほど喜んで、普段からちよつと変わったおばさんの先生だったんだけど、きっと芸術家つてそうなんだろうつて思つてたら、出展してみるつていうから別に困ることは

なにもないので出してもらつた、ら、絶賛」

「わお。

じや、じやあやつぱり美術部入つて」

「いえ。

だから、わたくし的には、なんの感興も湧かなくて、ですね。えー……だから、なんか、世の中全員に『ドッキリ』仕掛けられてるみたいな気分になつて」

「は、はあ……」

「アフリカの奥地へ行つて百円ライターで火を点けたら、原住民に神様つて呼ばれたみたいな感じ」「……わ、わかるようなわからないような」「それで自然に足が遠のき。」

でも卒業の時まで先生、『いつでもいいのよ、じっくり構想を練つて、私のところへ持ってきてね！』って……

「見てみたいなあ、その作品！」

「いや、いや、もう。

いや、母校に飾つてあるんですけどね玄関に……」「ひやーつ、すごーい！」

手をちいさくぱぱちざれても。

「ま、ま、ま、あれ手、粘土の匂い、結構消えないので、やかな、っていうのもあって、うん、だから、美術部とかは、いいの。

それよりありすちゃんは？ 中学の時やつてたこととか！」

「うーん……帰宅部でした」

「ペロッと小さく舌を出す、なんて仕草がナチュラルにできる子、居るんだ……かわいいなあコンチクショウ！」

「私、寝るのいくらでも眠れるの。だから三時過ぎに帰つてすぐお昼寝して、晩ごはんまで」

「えつ。じや四時間近く寝ちゃわない？ そんなに寝たら夜眠れないでしょ」

「ところが夜は夜で九時になるともう怪しくて、一〇時にはダウンです」

「へーっ！ わたし昼寝なんかしたらまあ深夜二時コース。あ、朝思いつきり早いとか？」

「七時までぐつすり」

「すごいね……ね」

る子は育つ……はずなのに、ちつちやいなあ。

「コみたい」

「これでも今はだいぶ眼らなくなつたの。小さい頃はずーーーーと寝てたから、ずいぶん両親に心配掛けました」

「あ、あの、これ失礼かもしねないけど、そういう病気、あるじゃない、睡眠障害？」

「うん、実は調べてもらつたりしたけど、全然大丈夫。起きてれば眠くないし、突然寝たりはしないよ」
「ほつ。

「じやあ、お昼寝クラブとか、あればいいよね」

「ふふつ、そんなクラブがあつたら、いいなあ」

「いやいや、わからないよ。ほら、どんな枕がいいのかとか、お香を炊くとか、ラベンダーティーで落ち着きましょうとか、そういうのを研究するの」

「ふふふつ、じゃあ二人で作っちゃおうか、お昼寝同好会」

「……ま、許可降りないよね……」

「ふふふふふ……」

まあこの美形だ。ほおつておけば引く手あまたで、きつとどこかに無理矢理さら
われてしまふだろう。

せつかくできた友だちなんだから、できれば、同じクラブがいいけど……そう都
合よくは、いかないか。

——放課後。

そのブースは、ちょっとおかしなところに、あつた。

グラウンドにはテントが張られて、その中で各クラブと同好会が、それぞれの新歓ブースを構えていた。ところがそのブースは、グラウンド脇、校舎のトイレと出入り口に挟まれた、小さなスペースに無理矢理作られてて……

「よつ、そこ行く可愛いおねえちゃん二人！

ちよつと話聞いていつて、くれへんか〜〜〜!!!」

関西弁に引き止められて、わたしとありすちゃんは歩を止めた。
丸顔で陽気な先輩が、飛んできてビラを握らせる。

「はい！ これ！
ウチらサッカーやつてんねん！

どう？ いつしょにやらへん!?」

「は、はあ……」

その白黒の手作り感溢れるビラには、ヘッドラインにこんな文字が踊っていた。

「……『どきどき・サッカー・クラブ』？」

「そう！ 略してDSCや！」

こう見えてもウチら、全国大会に出てんねんで〜〜〜！」

「へーっ！ すごいですね！」

食いついたのはありすちゃんだつた。

確か……そう、サッカーツて、女子の日本代表ツて、すごく強かつた、よね？
それで全国大会とかつて……

「あつ、あの、わたし、全然、運動とか、苦手で」

「いやーいやーいやー！ こらまたビビらせてしもうたかな！ いや！ 何もムキムキに鍛えあげて一緒に世界を目指そう、なんてそんなことは言いません！ ウチ仲間が欲しいんやー。ウチらな、ここだけの話実は一一人しかおらんくてー。そらもう一人でも二人でも入ってくれたら、練習でもなんでもやりやすくなるんやー。せやからホンマ、ちょっと身体動かす、ちょっとフィットネス、ちょっとダイエット、それぐらいの気持ちでかるうくやつてみいへんかなあ！」

立て板に水とはこのことだろう。人懐っこい笑顔で滔々と語る先輩が着てる青いユニフォームは……これって確か、日本代表？ 違ったかな？ 鳥のエンブレムが、ついている。

胸の番号は、7。

「で、でも……ねえ、ありすちゃん」

「みなさん、創設一年で全国へ出られたんですか。すごいですね」

あら。彼女は興味津々だわ。

「イヤッハー！ そう褒めんといて～！ いやいや、実はこれにはカラクリがあつて、ウチはなんと！ 現役の、ユース代表なんですわー！ わはははははははははははは！」

「ユース、つて……日本代表なんですか！？」

「わあ！」

「せやで？ 難波鳴海といやあ、女子サッカー界ではちいーとは知られた名前でつせー」

「ちょっととちょっとナナ、逆に引かれちゃつてるよ。ふふ」

もう一人の先輩。

こちらは白いシャツに水色のパンツ、これがDSCのユニフォームなんだろう。一目、「おかあさん」と呼びたくなるような優しそうな微笑み。落ち着いた声。

「あのね、私達もこここのナナちゃんにゼロから教えてもらつて、大会に出られたの。だから、これから、少しづつやれば、全然未経験でも、全国へ行けたりするかも、しれないよ～？」

「そうなんですか」

「あつ、でも、わたし、やつぱり運動は」

「あかんでそんな食わづ嫌いしとつたら～！」

ぱーん！

お尻りを叩かれました。

「こんなエエケツしてんねんから、ちよいと鍛えたら日本代表かつて夢やない
で！」

「ふふつ、身体動かすのがお嫌いなら、マネージャーは、どうですか？」

「おつ。それもええね。うんうん、それでも助かるわ！　なーなー、先輩助けると
思うてー、入つてえなあー！」

「わわわ、わ」「きやつ」

ナナ、と呼ばれる難波先輩はわたしとありすちゃんの間に割り込んで、二人の肩
を抱え込んで頬ずりをする。

なんというか、厚かましいのも慣れ慣れしいのもここまでくると嫌味がない。

「二人共めちゃめちゃ可愛いし！」

蹴れるアイドル軍団・DSCにぴたりやね！ な、キヤブテン！」

「ふふつ、もーナナ何言つてんだか」

苦笑するキヤブテン。は、主将つてことは3年生なのかな？ 改めて見ると、麗だなあ。ホツとする感じの。きっと男の人にモテるタイプ。結婚とか早そう。

綺

「……キヤップー、ナナー、おまたせー」

「あれ、なにすでに二人ゲット？ 幸先いーねー」

「おうともよ！ もう捕まえたからには、離さへんで〜〜〜!!!」

「アハハッ、よろしくね！」

「ちよつと蘭、流乃、早いよ。この子たちパニクつてるじゃない」

「……（くすつ）」

「……わ。

なんて美形揃い。

現れたのは先輩方……ルノ、と呼ばれる軽い感じの人と、ツッコミを入れたメガネの先輩が制服で、ランと呼ばれた元気いい人と、その横で目を細め微笑んでる人が、キヤブテンと同じ白と水色のユニフォーム。

タイの色は、2年を表すブルーだつた。友だちっぽいから、ナナさんもキヤブテնも、2年生なんだろうか。

でもこの人たちつて当然……この、サッカー・チーム、なんだよね？

サッカーツて……美人じやなきややつちや駄目とかつて、法律でもあるの？

「……ごめんなさいね、押し付けがましくて。ゆっくりいろんなとこ見てからでいいから。でも、私たちのことも、覚えておいてくれたら」

「はな、なに後輩の前だからつてカツコつけてんのよ。クラブなんて勢いで入るもんじやん。あたしだつてあんただつてそーだつたでしょ。ナナとみーに騙されて

「「騙すとは人聞きの悪い」」

「あはは、騙されたよ、ねー、愛ちゃん」

「……（こくこく）」

……なんか抜群のチームワーク、つて感じ。すくなくともこの六人はすごく仲がいい、みたい。

ちょっと斜に構えて斜め下見下すような喋り方の、でもそのツンとしたところが妙にキマつてるルノ先輩は、髪がすごく赤くて——ドイツあたりの童話から抜けだしてきたような——タイト・スカートから覗く脚が果てしなく長い。吊り目の瞳と、おなじく吊り上げるように唇の端を歪めて笑うのがなんとも日本人離れして……カツコイイ。

ハナ先輩はもう絵に描いたような優等生。ピシッと着こなした制服に、おとなしい色だけど素敵な形のメガネ、ショートカットも寸分隙なく決まつて。すごく洒落な人。

誰よりもニコニコしてるラン先輩は大柄で、わ、ナイスバディ！ バスト大きくて腰回りも迫力あつて、ちょっといやかなり濃い顔立ちに、バサバサの髪を後ろでくるワイルドな髪型がとても似合つてる。

その横にまるで「美女と野獣」的に佇む無口なアイ先輩。二人並ぶとまさに宝塚の主役カップル。これがまた外見だけならぶつちぎりの美人で、昨日見た西九条さ

んだつて彼女の前では色褪せるかもしれない。腰までの超ロングヘアも栗色に輝いてる。

決めた。
はいろ。

いやあもう、こんな可愛い人に囲まれる毎日なんて……しあわせ以外の
なものでも、ないっしょ!!

……いやいや待つて待つて、そんな不純な動機じゃ……そもそもわたし、サツカ
ーなんて今までこれっぽっちも興味なかつたし……

あでもなんか楽しそうなのは間違いないんだよ・ねえ……

「……あ、あの、マ、マネージャーなら、ちょっとと考えなくもないかもあるかも…

「マジで!? よおおおおおっしゃああああああ決まりやあああああああ！」

「いや、いやあの、まだ本決まりにはしないでください！」

「いやあもうあかん決まりや決まり！」

「YOU！ お名前は!!」

「あ……す、住吉、古都、です」

「ことことこつとんやな！」

ええ名前やあ！

そちらの天使のようなガールはなんと！」

「あつ、て、天王寺ありますです！」

「アリス!! アリスアリスアリス！ 不思議の国から来たんやな！ よつしやほん
だらウチと組んでバリバリ魔法のパスを送つたろかー！」

「あつ、あの、私も、ぜんぜん、サツカーは、学校の授業でやつたぐらいで……」

「そんでええねんそんでもええねん、変な指導者に変な癖つけられてるよりよつほど
ええつて。まかせまかせ、1年でどこへ出しても恥ずかしくない選手に育てあげち
やるわ！」

「だからナナつてば」

「そんなこと言つたら逆効果だつて！」

「へつ？ なんで？ 腕、ちゅーか脚上がんねんで？」

「誰もがみんなサッカー選手目指して生きてるわけじゃないんだから」「心配しないで。基本的に楽しくやつてるクラブ活動だから」

「あつ……そういういえば先輩、どうしてここがブースなんですか？」

気になつたので、聞いてみた。

すると、ナナさん達はちょっと顔を見合わせて、

「……んー、実はな、ウチら、正規の学校のクラブちやうんや」

「えつ、そうなんですか？　じやあ……同好会？」

「んー、でもない。実はオープンな地域クラブ・チームを目指してて、誰でも入れるような。ちつちやい子から、大人まで！」

「それで、学校には場所と部室をお借りしてるの」

「まあ、実績出しちゃつたから学校としても満更じやないみたいで、こうして新歓も規格外というか黙認というか」

「そもそも、いまんところはこの学校の生徒しか居ないから、実質クラブ活動みたいなもので、ね」

「そうだつたんですかあ」

「ということで部費とか無くて、貧乏所帯なんやけどまあ、そのへんの苦労もまた青春の一ページやと思うていただけたら嬉しいです」

ますますおもしろそうじやない！

新聞で読んだけど、いまや高校スポーツの強豪といえば、日本中から優秀な素材を掻き集めて全寮制で……なんてことがあたりまえのはず。それをこんな、ひとつひとつ手作りで。

あ、でもありますちゃんと悪いかな……と思つてみたら、しつかりビラを読んでいた。
彼女が、顔をあげる。

「……あの、私、体力ほんとうに無いんですけど……」「そういう人にこそ！ サッカーです！」

自信たっぷり、腕組みドヤ顔の代表選手が、言い切った。

「トップ選手は九〇分で一四キロ走ります、しかもいわゆるインターバル走、ダツ

シユとジョグが混じつてますから心肺が鍛えられることこの上なし！ 当たりに強くなるために各部の筋肉も鍛えますし、ボールを取り扱うためには柔軟性も大事。

つまり、身体のいろんな要素がバランスよく鍛えられます！」

「うん。ほんとに、フィットネスがわりでもいいよね」

「ああもう全然いい。ジム行つたら高こつきまつせー？ 一月一万二万はあたりまあでんがな。それに比べたらあんた、タダ同然でむちやくちや鍛えられる！」

「ありすたん！」

「ひやつ」

「ぱーん！とわたしの時よりは幾分手加減してまたナナさんはおしりをひっぱたいて、

「ユーはちつちやくて可愛いけど、さすがにもーちいーとお肉つけなあきませんぜ。見なはれあのキヤプテンの安産型を！ サツカー・チームが簡単に作れそうでっしゃろ？」

キヤプテンが不思議なポーズを取つた。

あれはまさか……ボッティエリの『ヴィーナス誕生』……かな……なんてわか
りにくい……

「さすがに一一人はしんどいよ。うち四人でも結構バタバタしてるので」
「お昼ごはんはしつかり食べた？ サッカーやのうてもええけど、ちょっと動いて
お腹空かせてしつかり食べなー」
「は、はい……」

遠慮会釈無くありすちゃんのお腹を撫でさするナナ先輩。と、ラン先輩がありす
ちゃんを抱き寄せて、その頭を撫でる。

「いーじやないナナ、ありすちゃん、このままでいいよ、ぜんぜん」
「そうそう、あたしだつて流乃だつて、スレンダーなままですから・ねー」
「ネー。」

ナナはね、ぽつちやり女子を増やしたいからムチャクチヤ言つてるだけだから、
氣にしちゃダメ」

ハナ先輩とルノ先輩が同じように頭を撫でまくる。ありすちゃんは撫で地蔵みた
いになつちやつてる。

「いやあすまんすまん新入社員につい興奮してー！ 堪忍してなー」

「は、はい、いえ、ぜんぜん、へいき、です……」

ぐわんぐわんぐわん……

アイ先輩も加わって、八本の手がありすちゃんのちいさな頭を襲う。
ちよつ、先輩方、そのへんにしてあげてください……

「いやーでもお人形さんみたいでホント可愛いー」

「このまま部室に拉致だね」

「よし！ さつそくユニの発注や！ 番号は何番がいい？ あのな、いま空いてん
のは……」
「ナナさん！」

よく澄んだ声が飛んだ。

振り返ると、あ。あのボニーの……たしか、此花さん。

「おー来たかバカレン!!」

「ちよつ、いきなりバカレンは無いつしょー！」

「……來ましたよ、約束どおり」

「別に約束なんかしとらんわい。」

「……アホが、辛い道やぞ。フツーに聖愛行つときやえーもんを」

「聖愛の方が辛いツスよ、たぶん」

「……わはは、ま、せやね。」

「どんな道選んでも、楽な道なんか無いわ！」

「しゃーない、よろしゅー頼むで!!」

「ハイツ!!」

二人は顔馴染みらしい。中学でも、先輩後輩だつたのかな？

「……ナナ、彼女が噂の？」

「おおう、そうそう、これが将来代表の9番を背負う逸材中の逸材、炎のエース・

ストライカー此花可憐先生です!!」

「「おおーーーつ!!」」

「エへへ、イヤイヤ」

わっ、そんな有名人なんだ。

「超名門校から特待生のお誘いを蹴つて我がDSCにやつてくるような、要するに
アホです」

「バカアホ言わないでくださいよー。事実なんだからーー!!」

「わははははは」

「みなさん、よろしくおねがいします!!」

ああ、体育会系。大きな声の挨拶に慣れてて。

「こちらこそ」「よろしくね」「ん」「よろしく!!」「……(ペコリ)」

ああ先輩方はバラバラ。

「えーあとで根掘り葉掘り紹介するけど、とりあえずこれがミー、あつちから順に

ルー、おはな、蘭吉、愛左衛門、この子が新入社員のことこつとんで、あの囚

われの宇宙人が不思議の国のアリス」

「えつ、もう新入部員取つたんですか!? さすがですね!」

「あつ、あの、まだ、本決まりじや」

「いーじやん、入つてよ!」

サッカー、楽しいよ!!」

此花さんに両手を掴まれる。改めて近くで見るとこれがまた……細めのつり目に全般的にシャープな造りの顔立ち、笑うと左の犬歯がキラッと光つて、大きなポニーテールを縛る三角形の細いリボンもあって、なんとなくキツネっぽい。ソックス黒スニーカー黒だし。

なによりやっぱり運動選手だからか全体から湧いてくるオーラが活動的でつまり……美人。

「えーと、コトコト?」

「あつ、こつとん。あ、いや、住吉古都です、1年生」

「あー、そゆことなんだ。あたしもさすがに1年独りじや寂しいよ、人助けだと思つて、さ！」

「わはは、何言うとんねんこれからもつといつぱい入つてもらいまつせー！
とりあえず可憐、運動能力高そうなヤツ片つ端から連れてコーカーイ！」

「ガッテン承知!!」

アハハハハハハ！」

「よし、こつとんとありすは一癖二癖ありそうなおもしろそうなヤツを連れてくる
こと。あんたらみたいなな！」

「え、ええーーつ！？」

「あははははは……」

「わ、わたしそんな、おもしろそうですか？」

「高1になつてそんなでつかいりボン着けてそれが似合う女なんて日本中探しても
あと二人ぐらいしかおらんで!? あんたも逸材や逸材！」

「こ、これは頭が大きくて毛量が豊富すぎるのをごまかすために……つてなに言わ
せるですか」

「こつちはこつちでこれおにんぎょさんみたいやからユニ着せて突つ立たせておき

やマスコットキャラになるし！

ウンもう最高ッ !!

「さつき運動すると健康になるって言つたじやないですかー！」

「るー、この子意外にツツコミ体质っぽい」

「助かるわあ。ナナのマシンガンボケにツツコミ足りなかつたところなのよ」

「まあまあ、みんな。そのぐらいで。二人も他のクラブ見たいだらうし」

キヤプテン、が声を出すと、場が落ちついた。さすが主将。先輩たちの中で一番地味だけど、たぶん一番信頼されているんだろう。

「住吉さん、天王寺さん、引き止めちゃつてごめんなさい。どうぞいろんなところ見て回つてください。でも……」

「ウチらが一番、オモロイで !!」

「そりやそーだわ」 「フフツ」 「アハハ」 「(にこにこ)」

「……代表選手みたいな凄い人もいるけど、私達基本的に素人ですから。楽しく遊
びましょ」

「「は、はい」」

ようやくナデナデ地獄から解放されたありすちゃんと共に、ブースを後にした。六人の先輩と此花さんは、大きく手を振ってくれた。

……その後、いろんなブースを見て回った。二人で。文化系クラブは去年の文化祭の写真やビデオを、運動系クラブはユニフォーム姿でそのスポーツの楽しさのアピールを。

さすがに、学校の決めた枠組みに黙つて従う感じのする中学のクラブと違つて、なんだか自主的で、自由で、みなさん、楽しそう。

特に校風もあるんだろう、上下関係があまり厳しくなさそうなクラブが多かつた。そういえば……DSCのみなさんも、すごく気さくに接してくれた。

「……これで、全部回つたのかな？」

「みたいだね。ふふ、こんなにパンフレット、たくさん」「みんな気合い入つてるよねー」

花形の男子野球部やサッカー部からももちろんマネージャーとして誘われて、力

ラー印刷写真豊富な出版物みたいなパンフを貰つた。

それに比べて、DSCのガリ版刷りみたいな貧相なモノクロビラはどうだ。写真もないし。今時PCとインクジェットプリンターでなんでも刷れるじゃない。しかもなんかデキの悪い漫談みたいなのが手書きの汚い字で大きく書いてあつて、読む氣も起きなければサッカー・チームだとぜんぜんわかんない。こんな感じや……

「……ふふつ、こつとん、クラブもう決まつた？」

「えつ!
!?」

「さつきからDSCのパンフばかり見てるよ」

「あつ、違うのこれ、これずば抜けて酷いデキだな、と思つて、わたしだつたらどうするかな、つて考えてて……」

なんでそんなこと、考える必要があるの?

「それよりわたしもう『こつとん』なの?」

「うん、いいじやない、呼びやすいし可愛いし」

「……」

こつとん……こつとん、ねえ。

「じゃ『シルク』がいい?」

「いや、それは、いや、いい」

「『ナイロン』」

「ありすちゃんも意外とおもしろいね。じゃあ『コットン&ポリエステル』で舞台
を目指そうか」

「私も天然素材がいいなあ……」

「じゃ『シルク』」

「すみませんでした。ふふふつ」

ありすちゃん見た目よりノリがいいんだよね。

「……あ、そうだ、時間ある?」

「えつ? うん、別になにも用はないけど……」

「なんかありすちゃんだと門限決められてて五時には帰らなきや、とかそんなイメ

「ジ

「あつ、うちそんなことぜんぜんないよ。パパもママも超放任です」

「そうなんだ、へー。あ、ウチもそうなんだけど。よかつたら、どこかファースト
フードか喫茶店で作戦会議を……」

「あ、いいねー。行こう行こう」

「どこか心当たりある?」

「うーん……あ、地下鉄の駅のそばに『エンゼル・ドーナツ』があつたね」
「あ、あつたあつた。あそこ行こつか」

「うん!」

——夕暮れ迫る校門を出ようとすると、口論を目にした。

目の前の大通りに停まつたりムジンと、その前に立つ黒服の大男、が、うちの生徒と……あ、西九条さんだ、と、言い合いを……というか、西九条さんが一方的に、何か言つてて、男性が困つてる。

そそそ、と見ないふりして通り過ぎつつ、

「……ねねね、きっとお嬢様のなにか逆鱗に触れることしちゃったのかな、あの
人」

「お家帰つたら執事長みたいな人に怒られるんだよ、きっと」

「ふふふふふつ」

まるでもう何年も通つた道かのようにペラペラとおしゃべりしながら、駅前に向
かつた。

——『エンゼル・ドーナツ』で、私はフレンチクルーラーとチョコファッショングミルクティ、ありすちゃんはホットミルク、だけ。

「お腹へつてない？」

「へつてるけど、食べちゃうと晩ごはん食べられなくなっちゃうよ」

「あきませんでそんな少食やつたらー」

「ふふふふふつ、なにか伝染つてる」

「甘いものは別腹くない？」

「それよく言うけど私はそんなことないなー」

「わたし昨日焼肉さんざん食べた後に杏仁豆腐つるつと入つたよ?」

「こつとんつて、なんでも美味しく食べそうだよねー」

「ええもう。食事は人生の楽しみの……んー……三割ぐらいは」

「ふふつ」

パンフというかビラを机の上に並べて。でも一人の手は、そこで止まつた。

「……」

どちらからともなく、顔を上げた。

「……ま、どこか入るとするなら」

「D S C、だよね」

「うん。ぶつちぎりでおもしろかつた」「だよねー！」

思わず笑顔がこぼれた。

なんだろう、よくわかんないけど……あの個性豊かな先輩たちが、同じ方向向いて走つてるのがすごく伝わってきて……

なんかきっと一緒に列車に乗つたら、知らない景色へ連れて行つてくれそう。

「……でも、私、体力に自信ないから、入るとするならこつとんと同じマネージャーさんかな」

「そうなの？ 別に、体格はサッカーだとあんまり関係無いような気がするよ？」

「球技だし」

「うん……実はね」

ちょつ、と間を置いて、ミルクのカップを両手でくるんで、それを見つめて。

「……私、生まれた時から身体がちいさくて。『生きてるだけでもうけもの』だつたんだつて」

「あら」

「……成長も遅くて、幼稚園でもいちばん小さくて、給食の時間が苦手で……」「そういえばいたね、少食だつたり食べるのがゆっくりの子とか……」「そうなの。」

それでね、心配したお父さんとお母さんが小学校にあがる時に、体操クラブに入

れたの」

「体操……つていうのはアレ？ 着地成功10・00、金メダルです！」

「それそれ。地元に幼年教育で有名なスクールがあつて。体力つくかなー、つて」

「ふんふん」

「そこで……ふふつ、そうだ、こつとんと同じ」

「？」

「身体が小さくて軽かつたからか、結構課題をこなせて、呑み込みが早いってコトチが一生懸命になつてくださつて……」

「おお」

「私も褒められると嬉しいものだから、がんばっちゃつて……
で、ある日バッタリ倒れて」

「……あちゃー……」

「单なるガンバリすぎだつたので一週間寝込んで元気になつたんだけど、それ以来父も母も、それから友達も先生も氣を遣つてくれて……中学でも、こんな見た目でしよう、だからみんな腫れ物に触るようになつて」

「うーん……」

確かに今でも、ガラス細工のよう。

「ありがたいんだけど、そういう気遣いが重くて。だから、クラブ活動だつたら、そういうの無いかな、って思つてて。

……ふふつ、そしたらナナさんが

「あ……あはは

「この人達なら、私も変な特別扱いされないのかな、と思つて……」

微笑んでいた彼女の顔が、でも曇つた。

「……でも、あんなに本気のチームだつたら、私なんか足手まといになるよね。みんななんだから、元気に溢れていたし……」

寝込んだことが、そして周りの気遣いが、一種のトラウマになつてゐるんだろう。
でも、わたしの見たところ、今の彼女は、確かに小柄だけど、普通の人だと思う。
記憶の糸を、つむぐ。

「……あのね、ありすちゃん。

わたしの小学校の時の同級生の男の子に「……うん

「1年生の時にお漏らしをしちやつた子が、いたのね」「う、うん」

「でその子その後、休み時間ごとにトイレに行くのを、6年までずっとやつてた
えつ、ええうつ!
！」

1
?
[

「よっぽどショックだつたんだと思う。たぶんそんなこと覚えてるの学年に一人も居ないのに、彼的にはもうなにがなんでも絶対にお漏らしはしない、そんな決意だつたんだと思うのね。つまり何が言いたいのかと云うと……」

〔二〕

「だいじょうぶだよ、先つと」

—

•••••

ありすちゃんは、噴いた。

「こつとんつて、おもしろい人だね」

「ん？ そう？」

それ時々言われるんだよね。

「ふふつ……でも、全国大会へ行くようなチームつて……」

「だあいじょうぶだよおお！」

大きな声を出した。

こういう人を見ると、ほおつておけない。

だつて、きつとその体操塾みたいなどこでも、名門のコーチが惚れ込むつてことはきつと筋がよかつたんだ。きつといまなら、また違う世界が開けるかもしねりない。

「みんないいひとつぽかつたし、ナナ先輩だつて言つてたじやない、きつとなんといふか、体力とかに合わせて練習とか組んでくれるよ！ やつてみたかつたら、やろうよ、ありすちゃん！」

「あ……

う、うん……」

「わたしからも言つてあげる！ ダメだつたら辞めちゃえればいいし！」

「……こつとん……」

ふふつ、こつとんは、マネージャーさんに、ぴつたりの人だね
「へつ？」

「……そう？」

「うん。そんなに人のことに一生懸命になれる人は、なかなか居ないよ？」

「そう、かな？ 一緒にやつてくれそうな子を、逃したくないだけだよ」

「あはは」

ありすちゃんはまた、天使のように笑つた。

「……心強いね、ふたりだと」

「うん！ あ、そうだ！ 此花さんもいるじゃない！」

「そうだ、あの子すごい選手なんだね、なんかスカウト来るみたいな」

「『将来のエース』とか凄いこと言つてたよね。美人でスタイルいいのにサッカー
も巧いなんて、なーんか神様また不公平つて感じ！」

「あつ、でも、……ぶつ。

「……バカレンとか言われてた」

「あ一つ、そうだそだ、いわゆる脳筋つてヤツかなー！」

「えつ、それはなに？」

「『脳まで筋肉』つて罵倒語だよ？ 知らない？」

「そこまで言つちや失礼だよー！」

「うふふふ、ごめんごめん。

本気のサッカーは此花さんにまかせて、わたし達はエンジョイ！で！

「ふふふつ、そんなの許してもらえるのかなー」

「だいじょうぶだよきつと。

キヤプテン、優しそうだつたし！」

「そうだねー。きっとナナさんが一番お上手なのに、キヤプテン任せてる、つてこ

とは、すごい人格者なのかもしれないねー」

「そうそう」

えー。

わたし達は、

とんでもない誤解をしていました。

でもそれは、

またあとのはなし。

「……キヤプテンってお名前なんて言うんだろ。……このビラなんにも書いてないんだよね」

「ふふつ、いいかげんだよね。そのへんちょつとひかれる」

「うん。なんかちよつとこう、わたしたちでもなにか手伝えるんじやないか感が、あるんだよね」

「そうそう。そんな感じ」

ということは、いちばん勧誘に成功してる気もする。

でも、他の子は、トイレの前で声張り上げる変な人達に、近寄ろうとはしない。

ここになにか、人生の秘訣みたいなものが、隠れてる気がする。

あたりまえの道をあたりまえに行くと、安全で快適だけど、想像のつく結果しか

生まれない。

さりとて、道なき道を突き進むのは、危険で効率が悪い上、途中で行き倒れる場合すらある。

そのあいだに、細いけどちょっと変な道があつて、ちょっとだけ勇気を出し好奇心を持つと、その道が見えてくる。

リスクも、リターンも、わからない、つて道が。
たぶんいちばん、おもしろい道が。

「……あつ、あれ。西九条さん」
「お？」

ありすちゃんの指摘に、ショーケースの方を振り返った。そこには、例の清楚なお姿がある。あ、さつきの黒い大男さんも真後ろに。S P付きでドーナツショップつて……なんてお姫さま。

でもまだなんか険悪な雰囲気、というか西九条さんが一方的にふんふんしてて、黒服さんは嫌な汗かいてる、つて感じ。摔倒すように勧められて、渋々ながら才

ーダーを黒服さんにまかせて、彼女は……わたし達の隣のテーブルに、着いた。

こういう小さな空き時間ができるとすぐケータイなんかを弄っちゃうわたし達庶民と違つて、西九条さんはその楚々とした微笑のまま、背筋を伸ばして淡々と待つている。

ちら、とありますちゃんとの方を見ると、彼女も彼女をじーっと見つめていた。

やがて黒服さんが、山盛りの……誇張抜きで何十個かの色とりどりのドーナツと飲み物の載る、トレイを置いた。

「……漆原、もうさがつていいです」

「い、いえ、そうは参りません。お嬢様はいつどこで」

「う・る・し・は・ら。

ここまで付いて来ていいというのも譲歩だと、言いませんでしたか？」

「は、し、しかし、一瞬でもお側離れますと、わたしのクビが胴体を離れます」

「「ぷつ」」

ありすちゃんと一緒に、噴いた。
わたしはこういう人も、ほおつておけない。ありすちゃんを見ると、彼女もうな
づく。

「……あ、あのー」

「は。なんでございましょう」

「あの、わたし達西九条さんと同じ学校のものなんですけど、わたし達がお嬢様の
お相手いたしますから、どこかで休まれてきてはいかがですか?」

「おおなんとご学友の方々ですか。」

し、しかしあたくしはお嬢様の身辺警護の大命を戴いており

「じゃあこうしましよう、お店の外のドアのところで。あそこからなら店内よく見
えますよ?」

「し、しかし……」

ありすちゃんの提案に、漆原さんは汗だくなつてキヨトキヨトした。

「漆原。わたくしは今、こちらの方々とお話をしたいのです。さがりなさい」「は、は……で、ではお嬢様、なにかありましたらすぐお呼びくださいませ」

「わかりました」

「すぐにですよ!!」

「わかりました!!」

漆原さんがこつち向ぎにあとずさりでお店を出ていったのを確認して、西九条さんが。

「……お一人様、とつても助かりましたー」

さつきまでの低い威圧感ある声じやなくて、高く澄んだ、可愛い声だつた。代表挨拶の時とも違う、そう、幼い少女のような。

「ありがとうございますー」

「あ、いえいえ」

「ふふつ、わたくし、こちらのお店にやつてくるのが楽しみだったのですー。それ

なのに漆原が駄目だ駄目だと申しますのですからー」

「あつ。やつぱり西九条さんだと、ひよつとして『エンド』初めてですか？」
「えんど？」

「ああつ、ひよつとして『エンゼル・ドーナツ』の略なのですか？」
「はい！ もちろん、初めてです！」

「ああつと、百合の花が咲いたような笑顔だつた。

なんとまあ、「本物」つていうのがまだまだ世間には、隠れている。

「……あつ、ごめんなさい、お二人様の、お名前は……」

「あつ、申し遅れました。

わたしは住吉古都。こちらは」

「天王寺あります。よろしくおねがいします」

「こちらこそ。

西九条明日葉と申します。

どうぞ、よろしくお願ひいたします」

ぺこり、と頭を下してくれる。

つやつやのおかっぱが、目に痛いぐらい。

「よかつたら、机くつつけて一緒にお話しませんか？」

「はい。ぜひ」

「でもお嬢様、それは大人買い過ぎませんか」

「ええ、わたくし、どれをどう頼めばいいのかわからなくて……漆原にまかせましたら、こんなことに。

それよりお二人様とも。敬語はお止めください。同級生なのですから」

「「……ふふつ」」

また二人、顔を見合わせて笑う。

「西九条さんがまず止めてください。

天下の大お嬢様にそんな丁寧なお言葉使われましたら、わたし達庶民は使い慣れ
ない敬語を使つてしまします」

「じやあ……そうします。まずはファースト・ネームでの呼び合いからですね」

「おつ、アメリカンな感じ！」

「いいね、明日葉ちゃん！」

「ふふつ。

では、吉都さん。ありますよ。

いただいても、よろしいですか？」

「「ふふつ」」

浮世離れつぱりが、すばらしい。

「どうぞどうぞ」

「あ、よろしければ、お二人も」

「ありがとうございます。でもわたしもうふたつも食べちゃってー」

「私も今食べるとお夕食食べられ無くなりそうだから……って、ひょつとしてそれ

全部、食べちゃいます？」

「……オーダーいたしましたからには、すべていただかないと、パティシエに失礼
ですから」

「「ふつ」」

もうお嬢様、ネタやつてる芸人さんとしか思えないよ。

「お持ち帰りできるよ。箱ももらえるし」

「そ、そういうなんですか？」

「不案内なもので……素晴らしいサービスですね」

「明日葉ちゃんが行く高級料亭だつて、手を付けないお料理、折に詰めてくれるでしょ？」

「……おお。

「そうですね、そうでした！　では……」

ひとかけらちぎつて、ちんまりとそのちいきなお口に運ぶ。

「……んー……」

「どう？　油っこくて甘つたるいでしょ」

「こつとんつたら」

「……とつても、美味しいですー」

ニッコリ。

ま、揚げたてだとこの結構イケるんだよね。時間経つと油浮いてきて怪しくなるんだけど。

「……特にこの、色とりどりのカケラの散った、イチゴ味の部分が」

「あー、お嬢様なんかこんなジャンクなもの食べたことなさそうだもんね！」

「こつちも美味しそうだよ、桜色の。春の新作、だつて」

「はい、こちらをいだきましてから……」

「別にふたつ同時に食べてもいいじゃない！ 堅いこと言いつこなし！」

「そ、そうですか？」
では……」

またひとつかけら、ちぎつて食べた。

「……美味しいですねー」

「「ふふつ」」

目を細めるお姫様。意味なく誇らしい気持ちになる。

「それでは、こちらのチヨコレートも少し……」

「おつ、調子出できたね」

「……そういえば、お二人は、なんのお話をされていたのですかー？」

「あ、えつと」

集めたパンフを、見せた。

「クラブ選び！ 明日葉ちゃんは、どこかクラブ入る？」

「わたくしですか？」

「俱楽部活動……考えたことも、ありませんでした」

「おや」

「そうだよ、学校終わつたらすぐ帰つて来なさい、つて感じだよね。今もほら、ウルシハラさんが気が気でなさそう」

ありすちゃんの指摘に振り返ると、ガラスに貼り付くようにして漆原さんがこつちを見る。鼻の穴広がつて、お嬢様に失礼でもあつたら小娘共手打ちにいたす、てな感じ。

「……うーん……

「俱楽部活動……そうですね、学校生活の大事な一部分ですね。まして高校生ともなればひとつふたつの俱楽部活動も……」

どうやら本気で考えたこともなかつたらしく、小首を傾げて考えこむ。ふと、顔を上げて。

「……おふたりは、どちらの俱楽部に入られるのですか？」

「あ、えとまだ本決まりじゃないんだけど」

「この、D S Cっていうのが、サッカーのチームで、正確にはクラブじゃないんですけど、クラブみたいなものなので、ここにちょっと一度見学に行つてみようかなー、つて」

「サッカーですか」

「あ、でも、お嬢様にはサッカーはお似合いじゃないかも、だね。もつと文化的な……華道部とか、書道部とか」

「なんの。

「わたくし、スポーツは、多少」

「おつ、なにかやつてるの？」

「日本舞踊を、すこし」

「「にほん……」」

まあ、スポ……いや、身体動かすのはすぐ動か……動かしたかな……でも芸の道はどこも厳しいし……

「おふたりは、サッカーが、お好きなんですかー？」

「実はわたしは、マネージャー志望で」

「私なんか、ちょっと体力ついたらいなーってぐらいで……実はサッカーのこと、ほとんど何も知らないの」

「そりなんですかー。」

俱楽部活動というのは、初心者でもよろしいのですかー？」

だんだん固さがとれてきたのか、明日葉ちゃんはなんとなく語尾を伸ばす。
と、甘える少女のようで、とても可愛い。

きつと厳しいお家だと、家族にもそういう態度は許されないんだろう。それが出
ちやつてるのかもしれない。

「うん。 そのね、先輩方も、そんなことをおっしゃつてて。初心者ウエルカムつ
て」

「なにより、その先輩たちがすつごく魅力的な人ばつかりだつたから
「ねー！ みんなびつくりするぐらい美人だし！」

「私達にも優しくて。仲もよさそудаし」

「そうなんですか……」

「どう？ 明日葉ちゃん、一緒に入らない？」

「うん！ そうしようよ！」

「……」

と、さつきまで輝いてた顔が、ふいに曇つた。

「……ですが、わたくしはやはり、当主の許可を取らねばなりません」

「当主……お父さん？」

「祖父です。」

父母は仕事の関係ですこし、離れた場所におりますので」

可愛くてしようがないのかな。

確かにあんな人ベツタリ付けてるぐらいだもんね。

……振り返るの、怖い。

でも。

「きっと許してくれるよ！　だってほら、欧米のセレブとかみんなそういう活動するじやない！　乗馬とか、クリケットとか！　なんかそういう！」

「ふふふ、そうだね！　社交ダンスとか？」

「そうそう！　お爺様もきっと、そういう経験が無ければ社交界で恥を搔きます、とかなんとか言えば許してくれるつてー！」

「……ふふつ」

明日葉ちゃんは一瞬曇らせた顔を明るくして、

「……おふたりは、優しい方々ですね」

「もひとり仲間が欲しいだけだよ」

「明日葉ちゃん。やつてみたいことは、やつてみた方がいいよ。
私もさつき、こつとんにそう怒られちゃつた。ふふつ」

「怒つてないよう。ははつ」

「そうですね……今晚、お爺様に話してみます」

「やつた！ 待つてるからね！」

「よかつた！」

「ふふつ。

正直なところを言いますと……」

明日葉ちゃんはドーナツを、取つた。

「……」
「そういう自由な時間が、すこし欲しいのです。中学まではずっと授業が終わ

つたらすぐ帰宅、ばかりで、寄り道をして帰る友人達が羨ましくて……今日も漆原に無理を言いました

「そうだったの」

「じゃあ、なおさらどこか入つた方がいいよね。サッカーじゃなくとも
「ありすちゃんそれじや勧誘にならないじやない」

「いまは明日葉ちゃんのしあわせの方がたいせつだよ。セレブなんだから……でも
日舞部はさすがに無いよね……」

「んー……弓道とか？ 似合いそう」

「サッカーでも、いいと思います」

「おつ」

「わたくし、お正月に蹴鞠会に参加させていただいたことが、何度か」

「けま……」

本物だー。

「これはなかなか楽しいものだと

「あれほどつちかというと足でやるバドミントンって感じなんだけど

「やつぱり、十二単着てやるの？」

「それはさすがに無理なので、男装です。狩衣を纏い鳥帽子を被り」
「「はー」」

本物、だ。

「サッカー……はい、サッカー。

今宵、百科事典で調べてみます」

「「ふつ」」

久しぶりに聞いた単語に、吹き出した。

「……お嬢様、ウェブって知つてます？ インターネット」

「もちろん知つてますよ。軍事技術ですよね」

「ふつ……くくつ……」

「もーありすちやん笑いたい時は笑いなさいよー。健康に悪いよー？」
「だつて……笑つちや悪くて……」

「いまは！　じゃーん！　

この小さなケータイデンワで、なんでもわかっちゃうの・でーす！」

「携帯電話は持つてますともー！」

「馬鹿にしないでくださいー！」

あつ。さすがにそうか。

むしろこういう御方こそ普段から連絡の付くようにな……

つて「おこさまケータイ」だー!!

ヒモ引くと警報鳴るやつ。メール宛先三つしか登録できないやつ。
どんだけ過保護ですか。

「最先端でしょ。

古い家ほど世の流れに敏感なのです」

「……」

「ありすちゃん、死にそう？」

「……だつ、だいじょうぶ……」

「ゲラだね。わたしもなんだけど近くにゲラの人居ると多少冷めてられる。

酔っぱ

らいの原理」

「？」

なにかおかしなことを言いましたですか？ わたくし

「いえつ。

どうぞブリタニカでもロングマンでも引いてサッカーについてお学びください。

……あ、いや、それより漆原さんに聞いたほうが早いかも

「あつ、そうだね。体鍛えてそuddash;だしきそう……つて」

ありすちゃんが指差した。振り返ると……

「……もう限界みたい」

「……ガマの油売りのガマみたいになつてるね」

「はあ……

しようがありませんね……では、わたくしは、お先に失礼させていただきます……

……

「じゃあ、また。

このDSCのパンフ、持つてつて」

「えつ、でも」

「私達もう一枚あるから」

「……ありがとうございます。」

「あ、失礼でなければ、おふたりで、どうかこちらを」

「えつ、いーの!?」

「こつとんつてば。明日葉ちゃんこそ夜食にすれば……って量じゃないね」

「三等分でいいじゃない!」

「ふふつ……どうぞどうぞ」

……三人並んで、ドーナツ・ショッピングを出た。

ペコペコと漆原さんになぜか、お礼をたくさん言われた。その巨体でまとわりつくように周囲を飛び跳ねるように、リムジンへ向かうお嬢様とその下僕。

きつとあれが……西九条家式の愛情表現なのだろう。あれだ、平安時代から当主と家来の家柄だつたりして。

さすがにそなことないか。

いやわからないよ、蹴鞠とか言つてたし。

「……楽しい、人だね。……意外に」

「もつと四角四面の眞面目ガールかと思つてたよ。でもすごいね、正真正銘箱入り娘」

「『ローマの休日』やつてるみたいだつたね」

「ふふふつ。

じや次はフライドチキンかな」

ふと振り返つた。なんの変哲もない全国チエーンの見慣れた看板が、もう暗い空に光つてる。きつとこの看板を、わたしはこれから何十年も見る。

でもきつとこの、明日葉ちゃんとお友達になつたここでの出来事を、長く忘れないのだろう。それこそ、何十年も。

ふと、思いつく。

「……あと一人、欲しいね」

「えつ？ どういうこと？」

「ほら、戦隊物つてだいたい五人じやない！」

「あ……あははつ」

ありすちゃんは、笑つた。

「もう明日葉ちゃんが入ることになつちやつてるし」

「ナナさんにも言われたし、ちょっとおもしろそな子をもう一人探さない？」

「探さない？ つて言われても……こつとんにおまかせするよ。こつとんそういうの、

すごく得意そう

「……ん。嫌いじやない」

「さつきだつて、私一人だつたら西九条さんに絶対声掛けでない。こつとん凄いな、
つて思つた」

「ううん、別に明日葉ちゃんに声掛けたわけじやなくて……困つてる人は、助けた
くならない？」

「そこが凄い、の」

「どうかね？」

昨日おかあさんに言われたことを思い出す。

血だね、こりや。

「……しかしおもしろくなつて来やがつたぜ」「ふふふふふ……まだなにも始まつてないのに」

「ありすちゃん冷静だよね、意外にね」

「そうかな。

こつとんが盛り上がり上手なんだと思う」

「そうかね？」

「盛り上げ上手だし」

「ん。まあ、それはいつも意識してますう」

「いいこと、だね」

駅で別れた。

そういえばありすちゃんとだつて、まだ出会つて一日半だ。

電車に揺られながら、周りで大きな大きな歯車が、ゆっくり動いているような気

が
し
た。
。

「……おや、明日葉ちゃん。

それは……ドーナツ？」

「はい。お祖母様」

「まあ、たくさんなのね。

「どうしたの、貴女がお夜食とは珍しいですね」「……ちよつと、お祖父様を待っています」

「おや。

お祖父様今日はまた遅いかもしませんよ。あの寄り合いに行きますと、なかなか帰つて来ませんから……」

「幼馴染みの皆さんとの夕食会ですか。

ふふ、お祖父様にはお友達がたくさん居て、いいですね

「みなさんもうリタイアして、お暇ばかりがありますから、ことあるごとに集まるんです。年寄りは暇を潰すのが仕事でね。

ま、わたくしもその方が気が休まるのですが。ほほほほほ

「ふふふ。

「お祖母様、ドーナツはいかがですか？」

「おやおや。わたくしは……」

「そうね、久しぶりにひとつ、いただきましょうか」

「漆原に無理を言つて、ドーナツ・ショッップに連れて行つてもらいました」

「まあまあ。

あの子も仕事に忠実なのはいいんですけど、融通が利かないところがありますからねえ。そのぐらいいいと思うんですけど……」

「お紅茶を淹れましょうね」

「はい。ありがとうございます」

「……お祖父様に、なにかお願ひごと？」

「……わかりますか？」

「貴女はなにか希望があると、いつもじつとこうしてあの人を待つてゐるから。

わたくしでよければ、口添えしますよ」

「実は……いえ。お祖父様に、直接お許しをいただこうと思ひます」

「おやおや。

大決心なのかしら」

「……そんな、たいしたことではないのですが……」

きつと普通のお家なら、こんなことは一言二言の事後報告で済むことなのだろう。だが跡取りの私の身体を、何よりも心配する当主ならば、激しいスポーツなど「まかりならん」と言うかもしねれない。

そうなればもちろん、それに従うしかない。

そうやつて生きてきたし、これからもそうするつもりだ。

『やつてみたいことは、やつてみた方がいいよ』

でもほんの少しぐらいは。

そうやつて生きることのご褒美を、いただいてもいいのではないかでしようか。

お屋敷でぬくぬくと真綿にくるんで育ててもらつて、恩知らずなことだと思う。でも。

天王寺さんや住吉さんの、楽しそうな笑顔が、目に焼き付いて離れない。

なんでもよかつた。

サッカージやなくとも、なんでも。

ただ、あの二人のように笑いたい。

そう思つた。

祖母の淹れてくれた温かい紅色に口をつけながら、明日葉は一一個目のドーナツを手を取つた。祖母はただ黙つて、微笑んでいた。

■ 取り巻き

——翌日始業前、わたしは明日葉ちゃんの様子を伺いに行つた。こういうのは熱いうちにバンバン打たないとダメ。「考えとくよ」で考えてる人見たことないもん。

……えーっと、確か明日葉ちゃんはC組で……

……あー……

「取り巻き」って単語がこれほど似合う御姿もあるまい。教室一番後ろ、座る明日葉ちゃんの周りに立つ、女子・女子・女子、すこし男子。周囲に飛び交う幾分テンションの高い会話をニコニコ受け流すお嬢様。ダメダコリヤ。

あまり人居ないタイミングを見計らう……

「……あつ、こつとんさん！」

「あの、ちょっと失礼しますね」

「えーっ」「あ、西九条さん！」

「明日葉様……」

「あ……ど、ども～」

取り巻きの突き刺すような視線に超低姿勢でお辞儀する。すみませんねえ、ホントに。

「……おはようございます、こつとんさん」

「おはようさまです。」

あの、『こつとん』は愛称なので、さん要らないよ」

「そうなんですか？」はい、わかりました、こつとんさん」

「古典だなー……」

それはそうと、どうでした入部希望。お許しいただけました？」

「それが……お祖父様が帰つて来られるまで起きていることができず……もうしづけありませんー」

「いやいや、わたしに謝らなくても！」

「また、ゆつくりしつかりご家族のお許しもらつてください。明日葉ちゃんがサッカーやつてみたい気持ち、あるだけで十分ですかから！」

「そうですね。ぜひやつてみたいと思います。なんでも、日本は、世界に冠たるサッカー大国なんですって？」

「え、えーっと……じょ、女子は最強に近い、です。男子も、まあ、トップ一〇を狙える位置、かなー……？」

「それに、サッカーは世界の共通言語とか。世界のどんな街角でも、サッカーさえやれば子供たちと友だちになれると言うではありませんか！」

「え、は、はい、まあ、えー、それはその人のコミュニケーション能力がまず……あいや、たぶん、そうです！」

「素敵です。

「英会話を学ぶように、テーブルマナーを学ぶように、舞踏会でのダンスを習うようには、サッカーを嗜みたい、とこう思つております」

「は、はあ。

「はい、あの、素敵、です……」

「一生懸命頑張れば、宮中の大会にも出場させていただけるのでしょうか……」

「きゅうちゅう!?」

「い、いやあ、それはどうでしようか……」

「その名も『天皇杯』という大きな大会があるというではありませんか！　ぜひ、
出てみたいと思います！」

「え、えーっと……」

わたしもよく知らないのでシドロモドロなんだけど、お嬢様の仕入れた知識はな
んかだいぶ違う……気がする。

「……と、とりあえずにつ、日本代表でも、目指しましようか！」

「日本……代表……？」

「こ、このわたくしが、日本の、代表、ですかー!?」

「は、はい、道は遠いと思いますけど！」

「……日本……代表……」

うつとり。

もうなつてる。頭の中でもうなつてるよ！

「それは、國の代表、國民の代表として世界に飛び立つ、世界と渡り合う、ということですね!?」

「そうですそうです。政治家なら総理大臣、クラシックならマエストロ、バレエならプリマドンナ！」

「なんと……」

こつとんさん、そういう大切なことを早く言つてください。お祖父様を説得できる自信が、もりもり湧いて来ました！」

「よかつたです！」

「あ……あ、あの、皆さん、お待ちかねみたいなので、わたしは、これで……」

「こつとんさん」

「はい？」

「……がんばります！」

「がんばつてください!!」

お嬢様はお見送りでお手をお振りくださった、お。

……だいじょうぶかあの人。

「……あつ、おはよう、こつとん。どこ行つてたの？」

「あおはよーありすちゃん。ちよつと明日葉様のご機嫌を伺いに」「あつ、どうだつた？」

「いやもー取り巻き十重二十重。視線が痛いのなんのつて」

「わあ、大変だね本物のお嬢様つて……」

……明日葉ちゃん、そういうところからも、ちよつとエスケイプ、したいのか

な

「あー……そうかも、ね」

わたしを見かけた瞬間、彈けるように立ち上がった姿を思い出した。

「昨日はお祖父様帰つて来なかつたんだつて」

「そう。おゆるし、いただけるといいね」

「うん。

なんかいろんな意味で……おもしろい、人」

「ふふつ。だね」

——放課後、ありすちゃんと一緒にDSCの部室を訪ねてみようか、と教室を出た瞬間、鋭い声が飛んできた。

「……シツツコイよ！」

廊下の生徒たちが振り返る。わたしもそちらを見た。

「行かないつつてるだろ！」

「まーそう言わないでさー。

見るだけ。見るだけでもいーからさー」

片方は聞き覚えのある声だつた。声の聞こえる方へ慌てて行つてみると、もみ合つてるのは……やっぱり、此花さんと、あ、あのボーカルシユな彼女だ。

今日も半ズボ……ショートパンツで、その腕にまとわりつく此花さんを振り払おうとしている。名前は確か……

「あたし特に運動部入る予定ないんだつて！」

「それはもつたいないつしょ、あんた運動神経バツツグンじやんかー！」

「そんなのカンケー無いつて！」

上下関係とか人間関係とかめんどくさいだろ!? 每日同じ練習繰り返すとか、気が狂つちまうつて！」

「そーんなの決まってないよ！

ウチはみんな楽しい人たちだし、練習だつて絶対飽きないように組んでるから

ーー！」

此花さんが少々強引にチームに誘っているようだ。どうやら今日の体育の授業で、
目を付けたみたい。

ちょっとべらんめえ口調が、ホントに男の子っぽい。

「いや、そういうのだけじゃなくてさあ！

……んー、とにかくいいんだよ！」

「あ、わかつた。

あれでしょ、中学までみたいに助つ人で美味しいとこつまみ食いしようとか思つ

てない？

11

「あー、
四星ー！」

「ちかう！」

「けど無理だね、んなの。高校になつたらフルタイムでちゃんとやつてなきや、そんちゅーとはんぱな人間、どこだつてお断りだから」

「そんなこと考えてないつづつてるだろ！」

「そうなつたらあれだよ、一人寂しくグラウンドの隅で小石蹴る羽目になるんだ

無理に肩組んだり腕組んだりするのが鬱陶しいらしい。彼女は腕を振り回して、

「……部活入ることにしたつて、あんたんとこだけは絶対行かないから！」 第一サ

ツカーなんかあたし、ぜんぜん興味ないんだ！」

「じゃなに興味あるの。野球？ カーリング？ 砲丸投げ？ アーチェリー？」

「コンドー？」

「ぐつ」

うまい。

「ほら！ 別になにもないんだつたら、サツカーしよーーーうよーーーう！」

「だつ、だからくつづくな!!」

「サツカーいいよサツカー。世界一に、なれるかもしないんだよー？」

「ねえん、吹田ちやーーーん！」

「氣色悪い呼び方すんな！ 第一あんなの、たまつたまじやないか！」

「……たま、たま……？」

あつ。

吹田さん、そこ触っちゃダメ。

砲丸投げ？ アーチェリー？

テ

「女の子がサッカーやつてメシ食える国がちょっとしか無いから、少ない競争の中で運に恵まれて世界一になつたんだろ!?」

見ろよ男子なんか三〇位とか四〇位とか、ベスト一六程度で大喜びして、一人二人外国で活躍したらみんなで大騒ぎして、馬鹿じやないの!?」

「サッカーを、バカにするなあ!!!」

ガラスビリビリ破るような大声が、響いた。

今までふざけてた相手の変わりつぱりに、吹田さんもすこし引く。

「なつ、なんだよ……とにかく！」

「真剣にやつたこともないくせに人が人生かけてやつてることをバカにするなんて、あんたの方がバカだよ！」

こんな、バカは、要らないよ！

こつちから願い下げだ！

バカ！

この……バカやろ――――――ツ！！

「なつ……」

んだとおおお!? てめーからむりくり誘つてきてその態度なんだよこの野郎、拳
句にバカ呼ばわりだあ!? てめーもう許せねえ!!

「バカにバカつて言つて、なにが悪い!

許せないなら何するつてんだ、喧嘩か!? 殴りあいか!?

やつてやろーじやんか、あんたみたいにテキトーに生きてる人間のパンチなんか、
痛くもかゆくもねーツ!!

「テキ、トー……んだとごらああああああああああああ!!」

「ヤメテくだサイ!!」

激突寸前の二人の間に、何者かが飛び込んだ。

あの金髪あの大柄、あの……平野さん。

「ケンカは、よくない、デス!」

両の手で一人の胸を抑えると、さすがに無関係の人を巻き込めない。二人は拳げ
た拳を下ろす。わたしも慌てて此花さんの腕を取つた。ありすちゃんも吹田さんを
手を抑える。

「此花さん、此花さん、落ち着いて」

「だつて！ コイツが！ バカで！」

「バカつつーなつつつてるだろ!!」

「（不祥事とか起こすと、代表取り消しになつたりするかも、しれないよー？）」

「……ぐ」

「ほらほら、謝つて」

「バツ、バカなこと言わないでよこつとん！ あいつが悪いの！ ひとのこと、サ

ッカーのこと馬鹿にして！」

「バカになんかしてねーよ、事実述べただけだろ」

「……こんの!!」

「わかつた、わかつたから！」

「離せこつとん、やつぱあたしコイツと、決着つけつから！」

「おう望むところだかかつきやがれい!!」

「じやつ、じやあ！」

ありすちゃんが、割つて入る。

「サッカーで、勝負したらどうかな！」

「喧嘩じゃなくて！」

「……」

「あつ、それ名案かも!!

「すくなくとも殴り合いよりずつといいよ！ ね、此花さん!!」

「……や。ダメだ。

「こんなド素人相手にサッカーの勝負なんて、そんなズルイことできないよ」

「フン、あたしはなんでもいいよ。

確かにコイツの思い上がった鼻つ柱叩き折るには、あなたの得意なサッカーの方
が、いいかもねー」

「なあにいー!?」

「じや、じやああれ！ PK戦で！ PK戦で！ あれだつたら、蹴るだけだ

し！」

「だから言つてんじやん、そんなのだつたらあたし絶対有利なんだつて。勝負にも

なんにもなんないよ」

「じやあ、此花さん蹴つて、吹田さんが1本でも止めたら勝ち、はどう？」

「……む……」

「そりやあ、……なんだ、誰だつけ

「あ、わたし、住吉古都」

「住吉、そりやあんまりバカにしそぎじやない？ あんなの右か左か二択つしょ
ー？」 フツーにやつたつて2本半止まるじやん

「あ、コイツやつぱバカだ」

「んだとー!?」

「此花さん煽つちやダメだつてば」

「事実だし。

いーかバカよく聞け、PKつてのは心理戦なの、今じゃプロでも成功率8割切つ
てんだよ。だから5本に1本でもキーパー有利なんだけど、あんたド素人だからそ
ーだねえ……

指一本！

指一本触れたら、ゴール・インしてもあんたの勝ちでいいよ。そんくらいで、ち

よーど

「アハハハハハハハハハ……

コイツやつぱバカだ」

「あんだつてー!?」

「吹田さん、吹田さん」

「事実だし。

指一本触れる？ あんなでつかいボールをあんたがヘナヘナ蹴つて？ そんなの
1本目で勝負決まっちゃうじやん！」

「……ま、決めれるもんなら決めていいんじやないの？」

「ケツ、根拠のない自信持ちやがつて。こーゆー体育会系の、ちょっと鍛えただけ
で勘違いしてる人間があたしやいつちばんだいつキレーなんだよ！」

ようしそんでやつたろーじやん。さつさと決着つけて泣いて土下座させてやる

よ

「ああ、あたし負けたら土下座でいーよ。

そのかわり」

「ああ、ああ、あたしが負けたら全裸で校庭ダッショウでもホームルームで腹踊りで
もなんでもやるさ。そんな条件で負けるわけねー」

「絶対だな。

よーし。

こつとん、部室からボール持ってきて。たぶん部室にGKグローブも転がつてゐる

と思うから、それも」

「うん！ わかつた！ 此花さんのスパイクは？」

「こんなド素人相手に要らないよ。向こうも持つてないし」

「ふん、スパイク履いてユニフォーム着たほうがいーんじやないの。それで負けるとすんげーカッコ悪いけどな！」

「あんたこそジャージかなんかに着替えたら？ 制服じやGKは無理っしょ」

「条件同じでいいつづーの。ナメンな」

「ふん」

わたしは部室へ走った。

微妙な距離を置いて決戦の地グラウンドに向か廊下を歩く二人の後ろで、
「……あ。あなたも、勝負、見に行きませんか？」

「えつ。ワタシ……ですか？」

「はい。あ、私、天王寺あります。此花さんが所属してる、サッカー・チームに……
入れてもらおうかな、と思つてるんです」

「そだつたんデスか。

私は、平野エレーナと、言いマス

「助かりました。平野さんが居なかつたら、殴り合いだつたところです」

「いいえ！」

ケガなんかしちやつたら、よくないデスからね」

やわらかく笑う少女の瞳は春の空のようなスカイブルーで、真っ白な肌と金髪に
あまりに似合う。

それに、我が身を顧みず喧嘩に割つて入るのはきつと、根っからいひとの証拠、
だろう。

私には到底できない。

「じやあ、なにかの、縁ですから。お忙しいですか？」

「……いいえ。それじやあ……ご一緒します」

「はい！」

sの音がちょっとthやshになるのが、可愛い。名前からしてハーフみたいだ

けど……それ以外の日本語は、普通だつた。

……コン・ココココン！

「失礼しまあああす！」

「……お。こつとんやんかー！ やつぱりウチ、入つてくれんのーん!?」

「あつ、はい、あの、その話はあとで、あの、此花さんが、PK勝負をするので、ボールと、それからGKグローブを持つて来いつて……」

「なにー？ PK勝負ー！？」

あつ。

そんな、他流野外試合みたいなことは禁止なのかな。此花さんに悪いことを……

「オモロそやないかい！

忍様、行こか！」

「もちろん！」

そこで、部室に居たもう一人の先輩に気がつく。タイの色からして3年生、「じのぶさま」と呼ばれたその人はとてもスマートで長い髪、でもそれより珍しいのはその髪がすごく明るい……薄い、色で、瞳の色も薄い茶色で、肌も抜けるような色で、なんとも……神秘的。

三人で小走りで向かう、グラウンド隅のサッカー・ゴール。道中簡単になりゆきを説明した。

「……で、この子がナナちゃん言つてたこつとんちゃん？ 可愛いねー」

「いえいえそれほどでも……でゅへへ」

「な、お調子やろ？ うちにぴつたりやで」

「フフツ、そだね。私は3年の守口忍。GKやつてまあす。よろしく・ねつ！」

「はい！ よろしくお願ひします！」

「みんな忍様つて呼んでくれるんだけどリスペクトしきれないならしのぶちゃんでいいから。無理に様つけて呼ばなくていいからね」

「は、はい、忍様」

「半分強制してまんがな」

ミステリアスな外見に似合わずカジュアルな人だつた。

しかし姿形はすごい美人。

やつぱりこのチームは美人しか取らないというオーディションかなにかが……

■PK勝負

——ゴール前にはすでに此花さん、吹田さんが揃っていた。ありすちゃんと、平野さんもそばで見守っている。

「……あつ、先輩」

「審判を務めさせてもらいまっせー。笛も持つてきた！」

「はい……すいません」

「立場上あんただけ応援するわけにいかんけど、まあガンバリ。
そつちの彼女も、正々堂々と！」

「ハイ!!」

忍様が渡したGKグローブを、はめてパンパンやる吹田さん。

「よし来おい !!」

低く構えると、すぐそれっぽい。ゴールのどこにでも跳べそうで、隙がない。

「……ん、やるね」

「……」

一目見て素質を見抜いたのか、ナナさんが一声。忍様は、鋭い目線を向けたまま黙っている。

「……ほなやるでー……

……」

ピッ！

鋭くホイッスルが鳴った。一拍の間を置いて、此花さんが……

えつ？

ピーッ！

コロコロコロ……

成功を告げる笛が鳴つて、ボールが、ゴールの中を転がつている。

えつ、えつ？

駆けた、脚を振り上げた振り抜いた、ボールが飛んだ、ゴールに入つた、が、一瞬過ぎて、わけがわからない。

もちろん吹田さんも、ぴたり、止まつたまま、微動だにできてない。

「……な、凄おまっしやろ」

「……本物だな……素晴らしい」

脳裏の残像を再生すると、ボールは、ゴール右下隅いっぱいに向かつて、地を這うように……たぶん転がつてはいなくて、地面すれすれを飛ぶかのように……進ん

で、サイドネットに突き刺さった。まさに「突き刺さる」という表現がぴったりだつた。

果然、な吹田さんに代わってありすちゃんがボールを手で運んで、スポットに戻した。あ、あれわたしがやらなきや。

——ピッ！

2本目。

今度はなにも見逃すまい、と目を見開いて集中する。

シュツ——

ドーン……

見開いてても、こんな程度。

ボールはまた、ゴール右上隅に、キレイに突き刺さった。

「……チツ」

だけどさつきと違うのは、吹田さんも、飛んだ。しかも方向は合つてて、右上。だけど、その指先はボールに遙か全く届かない。

「んッ!?」

「……やるな、あの子」

「かなり飛びましたね」

「いや、相当やるぞ、あの子」

PK戦を見つめる忍様の目は鷹のように鋭く、声質まで変わっている。さつきまでのタレ目氣味でニコニコしてた優しい先輩の面影はない。まるで……武人かなにかのようだ。

でもこれで、此花さんが「指一本」と言つた意味がわかつた。これじゃあ、まともにやつたら、読みが当たつても、まったく届かない。

「先読みで重心掛けてたら、いける?」

「重心はどうかな。可憐なら読むんじやないか。それより心理戦でミスキックでも誘うほうが合理的だ」

「それこそ可能性低いように思いますけどねえ」

腕組みのナナさんがそれを解いて、ホイッスルを持った。

「……ほな3本目、いくで！」

「ちょっと、タイムください！」

吹田さんはそう言うと、GKグローブを外して、上着を脱いだ。ゴールの外に投げ捨てる。腕まくりをして、グローブを着け直す。

制服を拾つてあげるありすちゃん……つてあー！　わたしあれやらなきやー！
ボールも戻してないしー！

……もういいやいまは観客で。

パンパン頬を叩いて、気合を入れる吹田さん。此花さんは、一本目から全く変わらない、無表情というか、集中しきつたクールな顔。

——。ピツ。

ほう、とひとつため息をついて、

ダダツ……シュツ——

「んならああああああああああああああああああ!!」

絶叫と共に吹田さんが、走って、飛んだ。

「「おおつ!!」

左上決め打ち、ゴールポストの角を掴むほどの大ジャンプ、しかしショートは、その手の、時間も空間もわずか先、だつた。

ドサツ、と落ちた吹田さんはすぐ跳ね起きて、

「があつしやあああ!!」

両頬を激しく叩いて、気合を入れた。

「勝ち目」が見えたのだろう。確かに、あれなら読みが当たれば、もうすこし。

「うつひよー、ええ勝負ー」

「センスあるな……やつてることは無茶苦茶だが」

「なんでもえーんですつて。止めりや勝ち止めりや勝ち！」

「ま、そうだガ」

次はどうするんだろう？此花さん。右下、右上、左上……左下だろうか。でも、
読まれると、止める……まではいかなくても、触れられそう。けど、プロなら、読
みの逆を読んで……あー！ わからないー！

「……」

と、今度は此花さんが無言で上着を脱いだ。そのまま放り投げる。慌ててキャッチした。セーフ。

彼女はそのまま、ゴールかキーパーか、を睨みつける。足は肩幅より少し開いて、軽く上下してリズムを取る。吹田さんが、また低く低く構えた。お相撲さんの立ち合いか、アメフトの選手か。

なんだか西部劇の、決闘みたい。

「4本目！」
——ピッ！

シユツ——

左だ！

「だああっしやああああああああああ！！」

氣合と共に吹田さんはやはり、左下隅に跳んだ。

けど違う！

ボールは、右下隅めがけて飛んでいった。1本目と同じコース同じスピード。もちろんゴール。

蹴った瞬間は左だと思ったのに……顔の向き身体の向き、脚の振りぬき方、どう見ても1本目より3本目に似てた。なのに全く逆に飛んだ。

見れば、吹田さんの手はゴールポストを超えている。ということはもしそつちら……

吹田さんが、跳ね起きて、

「卑怯だぞ!!」

と、吠えた。

でも、卑怯も何もこれも技術……

「心理戦使こうて来ましたぜ」

「次を左下に誘導してるので？　まさか、それに乗る可憐ではあるまい」

「いや可憐には相手素人つて頭がありますからね。これが五輪予選やつたら、あんなん気にもせーへんでしょうけど」

「勝つことだけが目的ではない、ということか」

「そそ。もし左下以外で負けても、相手にダメージ残りますやん。可憐は熱い女なんで、売られた喧嘩は買いまつせー」

「いや、どうかな。歴戦の戦士ならむしろ、もう一発右下に叩きこんでおのれの優位を思い知らせるのではないか」

「賭けましょか。うち左下」

「ふむ。右下だ」

わたしは、どつちでもない、と思つた。

この勝負は、いわば此花さんがプライドを賭けたものだ。相手に、サッカーツテ素晴らしいんだ、鍛え上げた選手は凄いんだ、つてことを、理解させなければいけない。

それには、右下で単に勝つたり、左下で単にギリギリをすり抜けたりとか、そんなのでは足りない、気がする。

じやあどうするのか、までは、わからんんだけど……

「……ほないくでラスト————！」

——ピッ！

数歩の助走から、此花さんが大きく脚を振りかぶつて……吹田さんが飛んだ。やっぱり左下だつた。さつきより早く遠く。

あつ。

降りてこない!!

タイミングが、外れた！

此花さんが振りかぶつた脚がゆーつくりと降りてきて、ぽーん、と蹴つた。

ボールが、やわらかい軌道をまるく描いて、ゴールど真ん中に、吸い込まれてい

く。

勝負あり……

「……んがああああつ!!!」

目を、見張つた。

吹田さんは、地面に這いつくばつたその姿勢から、腕と背筋と太腿と膝と、とにかく全身のバネを使つて、跳んだ。カエルのようにひつくり返りながら。

「なんだ!?」 「おおつ!!」

その頭が髪が、ゆるい弧を描くボールに触れるか触れないか——

ボールはネットに吸い込まれ、吹田さんはそのまま、背中から落ちた。

一瞬の間の後。

ぺたん、と此花さんが女の子座りで座り込んだ。背中を打つた吹田さんは、肘をついて起き上がるこうとする。

此花さんは、ゆっくりと脚を正して、グラウンドに正座した。

「……負けました!!

すみませんでした!!」

大声が、響き渡つた。

頭を下げる、額が地面に着いた。

「此花さん……」

「……忍様、どうでした?」

「触れた……ようく感じたが、確信は持てぬ」

「ウチも触つてるようく見えたんですけど……おおーい! そこの二人ー! いま

のどうー!? 触つたあー!? 触つてないー!?

「よ、よくわからないんですけど触つたような……髪がぱつ、つてなつた氣も

「触つている、と思いまス」

平野さんが、意外に断言した。

「部外者のあの子が言うんやから公平やろ。ほな決まりやね。

この勝負、えーとなにさんやつけ? まええわ、此花可憐の、負けーーーーー

!!

「違います !!」

立ち上がりつた吹田さんが、ズンズン、という感じでこっちへ来た。ダメージは全く無さそうだつた。受け身が巧いのかも。

「ほら、んなこと止めろよ、あんたの勝ちじやねーか !!」

腕を取つて、引き上げようとする。
此花さんが、目を赤くして怒鳴る。

「情けなんかかけるな！」

「あんたが一番わかつてるだろ、触つたじやん髪！　あたしの負けだよ !!」

「バッカだねえホントあんたは。

約束は『指一本』だろ？　指触れてねーんだからあんたの勝ちじやねーか

「……」

「なんだあんた、さつき自分で言つたばかりのルールも忘れたのかい？　本格的な

「バカだな」

「バツ、バカバカ言うなバカ！」

「まあまあ、そのへんでそのへんで」

ナナさんが、二人の腕を取つた。

「確かにこの子の……えーと誰やつけ

「千里です。吹田千里」

「ちーちゃんの言うとおりや。文字通り解釈したなら。せやけど、ルールの本質から言うたら、可憐の負けやな。

まさに可憐は試合に勝つて勝負に負けた、ちーちゃんは試合に負けて勝負に勝つた、と、こういうことや」「話がややこしくなつただけだよ」

忍様が元に戻つて、軽いツッコミを入れた。

「つまり要するに……

喧嘩両成敗 !!

「は、はあ？」

「可憐が負けたら土下座して謝る、やつたらしいね。じゃちーちゃんが負けたら、どうなつたの？」

「そ、それはコイツが決めることです」

「ほな、可憐は今こうして地面に頭つけて謝つたんで、あんたも」

「あ……ああ、いいッスよ、ま、ちょっと、言い過ぎたのは、確かだし」

「いや。

土下座なんか、いい」

「なんだよ、もつとやなことさせる気かよ。意地悪だな。土下座で勘弁しろよ」

「もつとやなことだよ。

……あんた、ウチのチーム、入れ

「はつ、はあ！」

ナナさんと忍様が、目配せして噴いた。

「や、やなこつたよ、な、なんでそんな、バ、バッカじやねえの！？」

「約束したのに……あんた口だけだな、ホントに」

「だつ、だつて勝負は……いや、勝負……いや、そ、そりやねえんじやないの!?」

「土下座と、入部とか、ぜんぜん釣り合つてねえだろ!?」

「古来、武士が人に頭を下げる、これは命賭けの行為だ。しかも乙女が顔に傷までつけて……とても入部などでは、確かに釣り合わん」

「いや、それは、だつてこいつが勝手に！」

「なんか別のクラブもう入つてんのん？ 全国狙えるような」

先輩二人が助け舟というか、泥船を出している。

「いや、別に、そういうのは何も……」

「ウチ来たらー、全国行けまっせ！？ どうよキーパー！ あんた才能ある見込みある、これユース代表のレギュラーたるこのわたくし難波鳴海が断言するんだから間違いない!!」

「エツ、エエーッ！？」

「せ、先輩、ユ、ユースの代表選手、なんですかあ！？」

「そうようう。キッズから各年代でずっとスタメン、頼れる日本の司令塔かつこ予

定かつことじ、難波鳴海背番号7といえば、この、ウチのことやで！」

「……す、すごい、チーム……なんですね」

「ちなみにこの人が、ユースのほぼエースで、ゆくゆくは代表の9番間違いなしと言われる日本が待ちに待つてた天才ストライカー・此花可憐選手」

「……」

「可憐PKめっちゃ巧いねん。その可憐を心理戦込み言うてもあんだけ追い詰めたのはもうあんたユース代表級いや！代表行つても不思議やない！ 忍様！ うかうかしてたらスタメン取られてまうで！」

「ああ。素直に感服した。身体能力ならすでに私より上かもしけん」

「……あ、あのー……

「あ、あん……いや、此花さん？」

「なに」

「代表とかユースとかつて、そのー……この、八咫烏つけてワールドカップで優勝した、あの、サッカー女子日本代表、のこと……だよね？」

「そーだよ。それ以外になにあんの」

「いや、あたしが知らないだけで六人制サッカーとかマイナーな競技があつて、日本で三〇〇人ぐらいしかやってない……

あ―――――――っ!!!」

吹田さんは、這いつくばつた。

「そ、そ、うとは知らず、ご、ご、ご、ご、ご無礼をば!!」

「なにやつてんの気持ち悪い。

やめなよそんなの」

「そ、そ、んな、そ、んな凄い選手の前で、そ、の、し、失、失礼な、たいへん失礼なことを
……す、す、いませんっ!!」

「事実だし。全部」

「いや、あの、そ、の、いや、いや」

「ナ、ナ、き、ん、コ、イ、ツ、ね、」

「あ――――――――ツ!!　ああああああああああああ――――ツ!!」

吹田さんが飛んで此花さんの口を塞いだ。
わ。やつぱり凄い反射神経。

「……ふは、酷いんですよ、あのね、」

わかつたわかつた、入る！
入るから！

あなたのチーム入るから!!

「ホントに？」

卷之三

たて『たまたま』……

いやもうだからそんな古いことはもう言うなあ！」

「ちょっと鍛えただけで勘違い……」

「サッカー最高！　あたし、一度本格的にやつてみたかつたんスよ!!!!

でも世界一狙える競技ですもんね！
先輩!!

三〇立四〇立

三〇位四〇位

「うるさいよ！ ハカのくせに細かいことだけよく覚えてやがんな！」ヤロウ！

たしらハカ『うなつて』つてゐたがこのハカリ!!!!

なにおう、やるかあテメー！？」

やーたらあああ！

「待つて、待つて二人ともー!!

ナナさんも忍様も見てないで止めてください！」

「いやあ……今年はなにこれ見てこれ、運氣来ましたぜチーム的モテ期が」「黙つて座つてるだけでユース代表とそれに匹敵するような野生のGKが転がり込んできただもんね。流れつて、あるよねー」

「これは今年行けまつせ優勝！」

「いやさすがにそれはどうかな」

「ナナさーん、忍さーん。

やめてやめて、殴り合いはやめてー」

「ふん、殴り合いなんかしたらあんたに勝ち目なきそーだからな。どうよ、サッカーゲームとか。『ワールドイレブン』」

「あたし眼悪くしたくないからゲームやんないんだ。素人はこれだからお気楽でいいね」

「あれ世界中の名選手がやつてんだぜ？ アッズーリなんか合宿中大会開いてんだ。戦術のシミュレーションにもなるぐらいなのに。おつくれてるー」

「あんた自分をイタリア代表だと思つてんの？ ほんと身の程知らないね。あたし達まだまだヒヨツコだから、できるだけのことすんじやん」

「そういう余裕の無いこつたから超ヒヨツコのあたしにユースのエース様がPK止

められちゃうんじゃないですかねー。サッカーには遊び心必要なんじやないですかねー

「止めてないじやん!!

なにあのカエルジヤンプ!!

カツコ悪いーーーー!!

「かつこ悪くても止めたらいいんですー。チヨーオシャレ止められチップキックよ

り一〇〇倍マシですー」

「だから！ 止められて！ ないつつーのお!!」

小学生だ……

運命の出会いいつて、あるんだよね。

出会いいつていうか、引き合うのかも。

なんかこの二人、三つぐらいからずつと友だちつて感じ。

ちーちゃん……吹田さんは、どうもすつごくスボーツ好きっぽくて、なんだか私の知らない言葉がポンポン出てくる。

「ちょっとこつとん！ なに笑つてんの！ 悪いのコイツだよね！ 性格悪い

の
！
』

「住吉？」

「住吉？ バカはコイツだよね。バカは」「だからバカにバカつて言うな！」 言わわ

「だからバカにバカつて言うな！」
言わわ

んだつてば！」

「認めてるし……」

「……あんだと——！！

やれやれ。

「……とつても、楽しそうな、クラブデスね」

「うん。私もまだ本格的に参加してないんだけど、先輩方も面白そうな人ばかりで。あ。平野さんは、どこか部活決めました?」

「いえ。」

私は、すこし、休もうかな、と思つていマス」「やすむ？」

「ハイ。

……スゴイ勝負を見せてもらつて、楽しかつたデス。ありがとうございます、天王寺さん

「あ、私にお礼なんか言わないで」

「……ありすちやーーん！ 助けてーーー！」

「あ、はーい！」

「では、これで失礼しマス。みなさんにも、よろしくお伝えくだサイ。
さようなら」

「あつ、はい、さようなら……」

微笑みを残して、平野さんは背を向けた。

勝負に夢中でせんぜんお話できなかつたけど、優しそうな人。

身体の厚みとか私の二倍ぐらいありそうで、脚なんか私の三本分ぐらいありそ
うで……いいなあ。きつとご飯もいーっぱい、食べられるんだろうなあ……：

私は吹田さんの制服を持つて、こつとんを挟んで喚き合つてる二人の仲裁に向か
つた。

まつたく、これじや勝負の意味ないじやない。
先輩お二人が、すごくニコニコとそれを見つめていた。

■ またエンド

——わたし達はまた、『エンゼル・ドーナツ』へ向かつた。仲直りを兼ねて……

「ハラ減つたなあ……やっぱ『エンド』止めない?」

「なに、ラーメン屋でも行きたいの?」

「いやあ、ドーナツ大好きだけどさあ、いま行つたら二〇個ぐらいカツ喰つちまい
そうでさー」

「食え食え。胃もたれ起こして夜中苦しめ

「ヘツ、オイラの鉄の胃袋をナメんなよ」

……というよりも、二人親友じやん。
と。……あれは。

「漆原さん!」

「！」

店舗の自動ドアの側で所在なげに佇んでいたのはかの大男さんだつた。ありすちやんが声を掛けると、ペコペコとお辞儀をしてくれた。ということは……：

ガーッ……

「……やつぱり。明日葉ちゃん！」

「あつ。こつとんさん、ありますさん。

みなさん」

「およつ、なに、住吉つて西九条さんとお友達なの!?」

「あ、彼女があのユーメーな。へえ、顔広いね、こつとん」

「ご一緒していい?」

「「もちろん」」

「「もちろんです!」」

四人用のテーブルに無理矢理五人。そして目の前には、今日も山と積まれたドー

ナツ山。

「うつひよ、それ一人で食べちゃうの？」

「あつ、よろしければ、どうぞ」

「えつ、マジで!? さつすがお嬢様懐深けえー！」

「あんたちょつと遠慮つてもんを考えなよ。てか飲み物買つてこい」「あんであたしがあんたのパシリやんなきやなんないのさ。むしろあんた行つてきてよあたしクリームソーダ」

「そんなおこちやまメニュー頼むの恥ずかしいわ」

「あにー」

「まあまあ、わたし行つてくるから。此花さん、ありすちゃん、ご注文は？」

「ホラ！ さつすが住吉ちゃんはマネージャーの鑑！ 気が効くう！」

「あんたウチ入つたら最初補欠まちがいなしなんだから、こういうことから貢献しなよ」

「だからオレはそーゆーの変な上下関係が嫌いだつつてんだろー」

「まあまあ」

「あたしブラック」

「私は、ホットミルクお願いします」

「はーい」

「キツネ無理して大人びなくていいぞー。油揚げ注文していーんだぞー」

「はいはい、おこちやまらんちがメニューに無くて残念でちたねー」

「ふふふ……」

「ありすさん、こちらの楽しい方々は」

「あつ！ そう、あのね、こちらが此花可憐さん。こつちが吹田千里さん。おふたりとも、DSCのメンバーなんだよ」

「おお。そうでしたかー」

「で、こちらが……って、もう言わなくてもわかってるよね」

「ウン。

「ウチのクラスでも噂で持ちきりだよ。此花可憐です、よろしく、西九条さん」「あたしは吹田千里。千里でも、ちーちゃんとでも好きに呼んでください、お嬢様

様」

「あつ、なに媚売つてんの。

じやあたしも可憐でオーケー！」

「ふふつ。わたしもどうぞ、明日葉とお呼びください」

「ね、明日葉ちゃん、凄かつたんだよさつきね、この一人がすーつごい決闘をし
てー！」

「「いやあ……」」

「ほんとほんと。ムービー撮つとけばよかつたねー」

トレイの上には、黒い珈琲、緑と白のクリームソーダ、白いミルク、紅い紅茶が
並ぶ。明日葉ちゃんも、紅茶。

「あつ、そうだよ！ でもそんな雰囲気じやなかつたしねー」

「マネージャー一生の不覚。あれは記念になつたのになー」

「なんかあんなのに真剣になつて、はずかしいよ」

「なんでも真剣なことはいいじゃないー」

千里ちゃんはどうも、汗だくになつて一生懸命、みたいのが苦手みたいだ。

「そーそー。そーゆー中途半端なことだから、勝負に負けるんだよ」
「負け、負けてねーだろ!? みんな勝ったのあたしつて言つてたじやん！」

「……」

しつれつ、とオールドファッショングラムをハムハムする可憐ちゃん。

彼女はこれまた特級の負けず嫌いで、こうして事実をねじ曲げた言葉を繰り返して、負けた記憶を脳から追い出そうとしてるみたい。

「まあまあまあふたりともー」

「……ま、まあでもスゲーな、とは思つたよ。一発目食らつた時は到底ムリだこりや、と思つた」

「つたりまあじやん。

……でも、ま、あんたもなかなかだよ。身体能力だけならいまユース来ても多分通用する

「……ホ、ホント？」

「もちろん、ユースにや藤枝大師匠が居るんで、試合にや出れないだろーけどね」「此花さんは、ユースの代表選手なんですよ、明日葉ちゃん」

「ゆーす……といいますと？」

「明日葉ちゃんはサッカーのことほとんど知らないの。教えてあげて、此花さん」

「あ、こつとんも可憐でいーよ。

あのね、代表つてのは、年代別になつてまして」

「はい」

「ワールドカップとか女子の場合オリンピックにも出るのがフル代表、これがホントの日本代表です。

で、その下に、高校生以下の若手で構成されるユース代表があります。あたしはいまんとここそこに呼んでもらつてます」

「はい」

「その下に中学生以下のジュニアユース、その下に小学生以下のジュニア、があります。

ちなみにナナさん、難波先輩はジュニアの頃からの有名人

「へえ一つ……つて、いうことはあんたも？」

「まああたしもジュニアから呼んでもらつてる

「ひや一つ……スゲエんだな、あんた」

「いやいや。まだまだツスよ。

だもんで、ナナさんはもうなんだろ、五年ぐらいの付き合い、になるのかな？」

「「はーつ……」」

なんだかすごい、遠い世界だ。

「エッ、ちょっと待って、そんな有名人がさ、どしてウチの学校来て、なんだ、そ
の、同好会みたいなのやつてんの？ 男子だとそれこそクラブのユースか下手した
らトップチームで公式試合に出たりするつしょ、高校ぐらいだと
「ん。それがね。」

……つて、つまんない話してません？ あたし」

「「ぜんぜん」」

「大変興味深いですー！」

「よかつた。中学じやこんな話すつとみんな興味なきそうでさー」

「続けろよ先を！」

「あいあい。

「いまのユースには一大勢力があつて、それが聖愛勢……聖愛学園に所属する人々
なのね。国見キヤブテン、藤枝師匠、葦崎の姐御、それから……宇宙人・清水リ
カ」

「う、宇宙人とはただならない」

「他に表現のしようがないの。ホント人類じやない。男子なら間違いなく『怪物』つて呼ばれてる。さすがに女子にそれは失礼だかんね」

「そんなに……すごいの？」

「やーもースゴイなんてもんじやないよ。垂直跳びで三m飛んで、幅跳びで一五m跳んで、ダンプカーミたいに周り次々に釐ぎ払つて、センターサークルから直接シユートを叩きこむ！」

「嘘だろお！」

「嘘じやないつて。

「間違いなく日本で一番巧くて、一番強くて、一番速い」

「牛丼屋かよ……」

千里ちゃんが深刻な顔でそんなおかしなことを言うので、噴いた。やつぱりいいコンビ。

「けど……そんな怪物なら、フル代表に行くもんじやないの？」

「いま協会の方針でき、一〇年先に無敵のチームを築きあげるために、若年層でき

るだけ人を変えずに同じチームで連携練る方針なんだよ。

その中心。

もちろん上へ行つても間違いなくレギュラーだと思うけど。いや、もし世界選抜なんてもんがあつても、スタメンじやないの？」

「はー……」

「ずっと着けてる背番号が13番でき。

海外メディアに『死神サークル』って紹介されてんの。ほら、向こう13嫌うじやない

「うわあ……」

宇宙人とか死神とか……なんかもうお伽話。

「それでね。

ナナさんも、あの人お父さんがJリーガーでき

「サラブレッドじやん！」

「そ。お兄ちゃん二人もいまJ2で修行中、だつたかな？　とにかくサッカー・エリートで、すぐに分かること思うけど子供の頃からめちゃくちや足元巧くてさー」

「ふむふむ」

「とにかくドリブルがうまいし、視野広いから長いパス出せるし、ああ見えて努力家だし気配りうまいから上下から人望あるし、普通ならユースでも間違いないわゆる10番、司令塔、の、はず、なんだよね」

「あつ、そか、そんな宇宙人が居るから！」

「そう。

小学生からずーっと頭抑えられてきて、あ、もちろん一人ピッチ離れると仲いいんだけどね、まあ、攻撃的MFのファーストチョイスはいつもいつもリカさんで、ナナさんはその相方、つて寸法さ

「世の中つて……うまくいかない、ものだね」

「ナナさん見るとホントそう思うよ。

それで。

女子の高校で強豪校、つていえばまず誰に聞いても名前が挙がるのがさつき言つた聖愛学園さ。まあスカウト網がすぐくつて、有望な選手片づ端からさらつてくるの。だって、ユースやジュニアユースの関係者がさ、聖愛に相談に行くぐらい。普通逆だつづーの」

「あ、当然その清水さんも聖愛学園へ行つて……」

「そう。もちろんナナさんにもお誘い、あつたらしいんだけど」「行つたら……その、代表と同じ事がずっと続く……」

「そそそ。

さすがにそりや辛いでしょ。あとね、システム的にも……つてまあ、細かいことはおいといて、つまり高校でも同じようにリカさん支える脇役、みたいなのやらざれるの目に見えてるのね』

「ヤだなあ。あたしでもヤだなあ」

「もちろん他にも強豪校あるんだけど、ナナさんはそういうとこ行つて対決する道じやなくて、自分で切り拓く、道を選んだ、つてわけ」

「……すごいんだな、あのひと」

「すごいっていうか……無謀だと思つたよ。あたしも無茶だと思つた。あたしたちまだまだヒヨツコだから、ちゃんとした指導者につかないとすぐ腐ると思つてた。実際、ジュニアユースのスタッフもそんな陰口叩いてたし」

「ヤだねえ」

「ところがナナさんはそんな予想を覆して、自分の作つたチーム、DSCを率いて『クイーンズカップ』地区予選で大躍進。ついには全国大会へ出てきた。それ見てさ、あ、これは素晴らしいなあ、と思つてー」

「で、あんたも来たの？」

「うん。

あたしも昔からあの聖愛のサッカーあんま好きじやないんだ。なんていうかこう……一人がマシーンみたいに正確に動いてさ。マスゲーム見てるみたいで、なんかモヤモやすんの」

「向いてなさそーだな、そんなサッカーにな」

「うん。

それ見てて、ある程度伸ばしてもらえるのは確実だけど、聖愛で三年間堅苦しくやるのと、ナナさんと一緒に思いつきりチャレンジするのと、同じ困難ならどうち取ろうかな、つて思つて。

で、来てみた

「あんたも無謀だよ」

「まあ、ここで潰れるぐらいの選手だつたら、それでいいし。どのみち女子はまだ……サッカーで億万長者とか夢のまた夢だから、潰れて普通の仕事就く勉強でもした方が、しあわせかもしれない」

「ヨヨヨ……哀しいなあ」

「可憐ちゃんに、そんな覚悟があつたとは……」

「わたくし、感動いたしましたー!!」

「「わつ」」

お嬢様、立ち上がる。

周りのお客さんも、何事ぞと視線を注ぐ。

「チャレンジ!

そう、人生はチャレンジですー!

可憐さん、わたくしも、チャレンジしたいと思いますー!!」

「は、はい」

「お、お嬢、と、とりあえず座ろつか」

「これが座つていられますでしようかー!」

そうです……わたくしの人生に足りなかつたものは、可憐さんやそのナナさんが立ち向かつたような、チャレンジ、挑戦、これでしたー!!

「な、なんかすごい感動してんだけど、この人座らせるにはどうしたらいいの?」

「本人が気分よかつたら、私達は我慢すればいいんじやないかな」

「天王寺さんつて変にクールだね!?」

「あ、私もありすでいいよ、ちーちゃん」

「そうです……そう！　はい！　まつたく！」

「チャレンジ……そう！　それこそが！　まさに！　『生きる』ということです

ー！」

「と、とりあえず座つていただけませんか、お嬢様。座るだけでも。オネッシャス！」

「あんたさ、キップいいから『ちー太』のがよくない？」

「なんだよそれオレ中学でも言われてたんだよ！　せつかく解放されて女の子らしい可愛い愛称付くかな、つて期待してたのに！」

「それってどんなのよ」

「ち……『ちいちい』とか、『ちさぴょん』とか」

「どう考えても『ちーた』のがいいって」

「だよな……あああたいも『コットン』みたいな可愛いあだ名、欲しかつたなあ……

〔…〕
「可愛いじやん、地上最速の生き物だし」「ふふつ。

あつ、そうだ明日葉ちゃん！」

チヤレンジならまさに！ 今晚、お祖父様の説得が！」

「おおおおお、そう、そうでしたー！」

「だから立ち上がりなくていいって！」

「えつ、なに、結婚かなんかすんの？」

どこの馬の骨ともわからない輩と」

「あんた基本的に野次馬だね」

「そうなんだよ対岸の火事とか大好き。イベントお祭り人ごみ行列ぜんぶ好き」

「言い忘れてました、明日葉お嬢様は、DSCに入つてみようかな、とかお思いで

す」

「おおつ!?」

「それは大歓迎！ ゼひゼひ！」

「はい！」

でも、わたくしは、本当に初学者なので、宇宙人や死神ではありませんけども…

…

「いやいやー、人多い方が絶対いい！ だつて、一一人じや紅白戦だつてフットサルになつちゃうもん。一人でも多い方がいいッス！」

「サッカー、楽しいよ。お嬢様、ゼひ」

「はい……がんばつてみます！」

「お嬢様たいへんだね、クラブ決めるのにもおうちの許可が居るなんて。

あたしなんか今日家帰つてかーちゃんに『サツカーやるー』って言やあ終わりだもんなあ」

「ふふ、庶民には庶民のいいところが、あるよねー」

「そだよなあ。

「あ、ドーナツもいつこいいッスか」

「はい、どうぞ、おいくつでもー」

「チータつて雑なフリしてると意外に小心者だよね」

「……ギクッ。なぜそれがわかる貴様」

「気がちっちゃいからペラペラ余計なことしやべるんでしょ。『弱い犬ほどよく吠

える』つて言うじやん」

「……うわーん！ こつとんー、バカレンがいじめるー」

「……あたしはここでも『バカレン』つて呼ばれるのか……」

「ふたりともよしよし」

距離を探り合うような時間を何ヶ月も過ごすより、たった数分でも本気の勝負をした方が、理解が進むのかもしれない。

拳を交える男の子、つて感じでちょっと、羨ましい。

「ちーちゃん、可憐ちゃん、明日葉ちゃんは昨日はじめてここ入ったんだよ」「へー！」

「やつぱりリムジンで通学するお嬢様は違いますねー。どつすかここ。甘つたるくて油っこいしょ」

「ぶつ。それわたし昨日言つた」

「だよなー！　じやまさかクリームソーダ飲んだことないとか」

「さすがにそのお飲み物は拝見したことはありますよ？」

「飲んだことはない？」

「……はい」

「じゃどーぞ。あたしの飲みきしでよければ」

「よろしいんですか？」

「あつ、ストロー取つてくる」

「いーじやん女同士なんだから。あたし気にしないし」

「あんたじやなくてお嬢様になにか伝染ると大変だろ!?」

「なにも伝染んねーよ！　あたしや歯にだつて一匹のミュータンスもいねー！」

「見たのか」

「自信と気合だよ」

お嬢様はおそるおそるクリームを避けてソーダをちゅーっと……と、パツと口を離して両手を頬に。

「ホラ見ろなんかあんたのよくないもの吸い込んでムンクじやんか」「だから人を病原体扱いするな、おまえ小学生か！」

「……おいしい、ですー！」

古典だなあ。

「おうち古いとやつぱり古典・古典で一生終わっちゃうぐらい蓄積があるんだろうなあ。

「そりやよかつた。じゃ今度コーラに挑戦してみよつか。チャレンジ」

「コーラ !!」

「だから立ち上がらなくつていいつてば！」

きつと骨を溶かす危険で野蛮な飲み物なんだろう。マリファナぐらい。

「……お嬢様結構おもしろい人だね。あたしやもつとピシッとクソ真面目な人なんかと思つてた」

「私も」

「わたしもだよー」

「あれだ。許嫁とか居るんじゃないの。親同士の決めたー」

「わたしもそれ思つてたの！まさかそんな人いるの、明日葉ちゃん!?」
「いえ、残念ながら……みなさんには、いらっしゃるんですか？」

「「いるわけないじやん」」

「……えつ、あれ、誰もいないの彼氏とか。超可愛いじやんみんな」

「うわあ千里ちゃんこういう話好きそー。
でももちろん逆襲ー。」

「ちーちゃんこそ居ないので、一緒にスポーツ観に行つたりするような彼氏ー」

「バツ、バカいえ、あたしそんなのキヨーミ無いもーん」

「嘘」

「はい、嘘です、すいません。高校入つたらちよつとなんかそういうのも、つて期待してたんスけど、部活で忙しくなりそうだからもうやだーーーーー！」
「そりゃ聞いてなかつたけどありすちゃんも？」

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる……

両手を顔の前で激しく振りながら頭も激しく横に振る。

「ウツソだあ、あんたなら言い寄られまくりつしょー。あたしが男の子だつたら間違ひなく自爆覚悟でコクつてる」

「……あの、そういうお話は、無いわけじやないんですけど、」

「ほら！」

「みなさん、なんか遠く見てるの」

「……は？」

「私じゃなくて、なにか違うものを見てるの。それでいつも、すみません、つて」

ありすちゃんはすごくしょっぱい顔をした。

なんとなく、わかる気がする。

外見天使そのもの、男の子は勝手に彼女に「理想の少女」かなにかを見て、その幻影に告白するのだろう。

「……つまり美少女もたいへんってことだよ、ちーちゃん

「ハー。よくわかんないけどわかつたよ。

そう言うこつとんちゃんはどうしさ。あんたも人気ありそーじやん

「ふつふん、いただきますわよラブ・レターとかすこしはね！」

「ホラ来た！ なにに、過去付き合った人の話でもいーわよ!?」

「……わたしにそゆのくれる人ね……みんな一癖二癖あるの。だから『んつ!? ん

ー……ごめん!』って感じ」

「「わかる」」

わかられたー！

「だつてあんたさ、なんていうのこのー……作つてんじやん」

「そーだよ悪い!?」

「いやいや、悪かない、悪かないよ。けどさ、あたしも入学式で『なんだあのリボンおさげおばけ!』とか思つてドン引きだよ」

「……やつぱり……」

「いや、リボンやおさげはいーんだよ。いつちばんヤベエのがそれが似合つてる、つてことなんだ。こんな作り込みの激しい女あたし人生で初めて見たからさ、こりや関わり合いにならないほうがいい、と思つた」

「……ふつ……くくつ……」

「もーありすちやんその笑いガマンするの逆に失礼だよ。

わたしは、これで今まで生きてきたから、これでいくの！」

「しゃべつてみると意外に常識人でよかつた。あんた損してるよそれで

「落としてから引き上げる。これ基本でしょ？」

「落としてないつてば!!」

「いやマジでマジで。普通のセミロングにしてたらモテンじやないの？」 男の子ウ

ケしそうな丸いツラ構えだし

「丸いの気にしてるの……」

「パイオツもカイデーだしツーケーもデーケーだし」

「はい、脂肪多めですすいません……やっぱりわたしも頑張つて選手やろうかな…」

「ありますと並んでると男子共が『やつぱりありますちやんだよな！』とか言いつつ腹の中で『……こつちで妥協しとつか』て思うタイプだよ。セールスマン的に『売りやすい商品』だ」

「妥協……売りやすい……」

「でまた本人も『本当の恋』とかそういうのが怖いんだな。意外に奥手で臆病なこつとんちゃん」

「うるさいなもー自分だつてそんなこと言いながら愛や恋から逃げるよう半ズボン履いてるくせに！」

「えつ!? これ一択つしょ！ なんでみんなスカートなんてつまんないもん履くの!? スースーするし気い遣うし地べた座れないしー」

「スラックスだつてあるじやない」

「美脚自慢なんだよ！ 言わせるなよ恥ずかしい」

「まあまあ。

「ほら、明日葉ちゃん目が点だよ」

「あつ、しいーませんね下世話な話で」

「いえ……

おつしやつてることが半分も意味がわかりませんでした」。高校生活つて、難し

いですね』

「いやいや、まつたくもう、難しいです』

なんか嫌な汗搔いちゃつた。

「なんだカレ、おとなしいな。あんただつて黙つてりやそこそこキレイなんだから
そんな話のひとつふたつあんじやないの？」

「無い。

あたしはサッカー一筋』

「ひやーっ、カツコイイっすねー！

つて、待てよ、代表とかで男子と交流ないの？』
「ん？

……あー……あ、あるといえはあるね』

「おっ、それそれ、そーゆーのだよ。サッカー選手みんなカツコイイじゃん！
人二人友達になつたりしてないの？」

一

「ああ、仲いい人いるよ。

大正太陽つて、知つてる？」

「おおう!? マジで!? 噂の超イケメン高校生Jリーガーじゃん!!」

「ちーちゃん、興奮して立ち上がらない」

「同じFW（フォワード）でタイプ似てたから合宿でスゲー話合つてさ、わいわい話したりいろいろ教わつたりしてるうちに、なんかいつの間にか兄貴とか呼ばせてもらつてるー」

「ま、まーじーでー!?

す、すげえ、やつぱ別の世界の住人だ……」

「そんなカッコイイ人なの?」

「そりやあもう。変なアイドルやタレントより全然カッケー。チヤラくないし」

「……あつ、この人だね。ああホントだ」

わたしは買つてもらつたばかりのスマートフォンでweb百科事典をひいた。そこには、旦元が涼しくとつてもスマートな「いかにも」美男子が。

「どれどれ……ホントだね、カッコイイね」

「別の世界もなにも、兄貴うちの学校だよ」

「え？ ……えー、そうだっけ!? クラブの人だから高校どこかとか気にしてなかつた！」

「サッカー忙しいからあんま来れないみたいだけどー。

「ああ、なんだつたら紹介したげるよ」

「マママママーボーイ!?

く、くうーーーーー男運向いてキター！ やっぱ持つべきものは友だなあ才

イ!

「兄貴、超女嫌いなんだ。

だからあんたぐらいだと大丈夫だと思う」

「ああオレ女の子らしくないからな！

新しい弟分として……

ちえい!!!』

物理チョップが飛んだ。

「なんだよそれひよつとしてホモかよゲイかよ」

「違う違う。なんかね、もううるさいんだつて。キーキーキャーキヤー言うでしょ
練習とか観に行つて。出待ちでサインねだつて。もう鬱陶しくつてしまふがないん
だつて」

「あらら……そりや大変だな」

「うん。海外合宿とか行く時いつもすつごい嬉しそう」

「へー……そつかー……」

「特にね、ジュニアユース代表時代にはもう一人超美少年がいたらしくて」

「ほう！」

やつぱりホモか！」

「違うつて。その人の方が人気あつて、まだマシだつたんだつて。ところがその人
が引退しちやつて」

「なんと。ケガかなにか？」

「わかんない。兄貴もボカして言つてたから、なにか家庭の事情とかじやないかな
あ。」

とにかくその人超イケメンの超ウマイ人で、なんでもエヴェントスとかバルセロ
ナとかアーセナルとか、とにかくありつたけの強豪からスカウト來たらしいよ」
「ひえーーーつ……」

ああそうだ思い出した！ 太陽さんつて、あれだよね、ワールド・ジュニアユースの準優勝メンバー！！

「そうそう。

その時のキャプテンがその人。名前なんだつけかな……まことにかく、その人居なくなつてミーハーファンがぜーんぶ兄貴とこ来るようになつてもう大変、だつて」「美男子も大変だなあ……」

「あもちろんナナさんも兄貴知つてるし、つてかあんたも頑張つてユース呼ばれるぐらいになれば自然と知り合いになるよ」

「ムリムリそんなの。

んな簡単になれつかよ」

「もーあんたそのなんでもかんでもまず無理無理言うのまず止めなよー。やつてみなきやわかんないでしょなんでもー」

「まーそりやそーだけどさー」

「ふふつ。

「そうだよね、ナナさんだつて一から全国へ行くチームを作り上げたんだし」

「そうそう。

先輩たちがそこまでしてくれたんだから、あたしたちはもう優勝させるぐらいで

ないと、貢献になんないよ！」

「あんたホント異常に前向きだなあ！ 感心するよ」

「優勝、つて、なにか大会が、あるのですか？」

明日葉ちゃんが聞いた。

「あ、えーっとね、女子には、年に一回、オープン大会……どんなクラブでも、プロでも実業団でも大学でも高校でももちろんDSCでも……出られる『クイーンズカップ』っていうのがあるの。これ。

ナナさん達が去年地区予選を勝ち抜いて全国に出た大会は。だから当然今年は、
目標は優勝！」

「「はー」」

「つてそれつてつまり……日本一、つてこつたよな」

「そーだよー。そして今や日本の女子は世界屈指の強豪国だからね、つまりそこで優勝する、つてことは、世界最強クラブと言つても過言じやない。つまり……世界一!!」

「「はー……」」

そんなの、自分とはまったく縁のない称号だと思っていた。
でも……
世界一。

「全国大会が三二チームトーナメントだから五勝で優勝だよね。地区予選がこの地区だと一〇も勝てばいいんじやないかなあ。つまり、一五勝もすれば世界一、つてこと。

カンタンでしょ？」

「簡単じゃねーよ!!」

「だつてそれって、その、プロのチームとかもあるわけでしょう？」
「もちろん。代表選手ゴロゴロ居るようなチームもね」

「ムリじゃん」

「だーかーらー、そーこーはー、

……がんばるの！」

「いや、ムリっしょ」

「やる前から諦めるなー!!

優勝だーーーーー!!」

「いやいや、お気持ちはわかりますけど、デキッコナイス」

「でも実際去年、全国までは行つたわけだし。

現実的な目標としては、今年も地区予選突破だよね。で、全国でひとつでも取れれば万歳、と

「……ん、ま、まあ、そうなんだけ、ど

「ありすつて……意外にクールだよね」

「トーナメントだつたら、くじ運に恵まれればベスト8ぐらいまではなんとかなるかもしねないよ！」

「そうそう。

こないだチャンピオンズ・リーグでもキプロスのちっちゃいチームがフランスの強豪倒してベスト8に残つた。

なせばなる。なきねばならぬなにごとも」

「……そういう言われ方するとまあ希望もあるかな、と皮算用しなくもないわけよ。あんたみたいに優勝だ優勝だじや全然イメージ湧かねえよ」

「それはあんたのイメージが貧困なの」

「へえへえすんませんねえ。

あ、イメージで思い出したんだけどさ、名前、覚えない？」

「は？ なんの？」

「チーム名に決まつてんじやん。

『D S C』じやなんだかわつかんねーよ。クラブオリエンテーションの時だつてあたし、素通りしちゃつたし」

「あつ、それはわたしも、ちょっと思つた！」

思わず手を挙げた。

「そう？」

『どきどき・サッカー・クラブ』つていの名前じやん

「んー、まあ、それはネタ的に『無しではない』ぐらいの感じなんだけどさ、それ縮めて『D S C』の方はあんまり良くないなあ」

「そう？」

イングランドに『Q P R』つてチームあるよ。クイーズ・パーク・レンジャース。
あとウェスト・ブロムウイッチ・アルビオンも『W B A』つて略す。カッコイイじ

やん。あとね、ショーン・ライト・フィリップスって選手を『SWP』って呼んだりする。イイつしょ?」

可憐ちゃんは、ホントにサッカーが好きなんだな。

「やー……そう言わると……んー、いやなんか違うなあ。だって、他のチームつて可愛い愛称あるつしょ。えーっとなんだつけ、食品会社の」

「ああ、『ヴァルキリーズ』ね。『フレズエンタープライゼス・ヴァルキリー

ズ』」

「そそ。それそれ。あとプロ最強チームがあれだつけ、NTV……」

「アマテラス」

「日本で一番えらい女神様の名前だね」

「そういうや聖愛学園も『エンジエルス』つて愛称あるんだよね。ここにさ、ハートに羽根と天使の輪がついたエンブレムつけて、あれが可愛いんだ……憧れたねー」

「ほらほらほらほらほら。そういうの。そーゆーのだよ」

「ふうむ……」

といつても、パツと思いつくものでもない。

し、先輩方にはチームを築きあげてきた思い入れもあるう。

「ま名前も含めてだね、もーちょっとわかりやすくアピールしてかなきやダメだよ。あたしやそんなすごい人やすごいチームがうちの高校にあるなんて、ついさつきまでぜーんぜん知らなかつたぜ？ あたしわりとスポーツ好きでさ、暇な時に本屋でスポーツ関連の雑誌片っ端から立ち読みするぐらいだけど」

「買いなよ」

「金ねーんだよ。

じゅーぶん立派なストーリーあんのに、もつたいないよ。あんた居てナナさんが、居てこんな野心があつて実績もあつて、なんだから、もうちょいいうまく宣伝したら、新入部員なんて搔き集めなくとも向こうからワンサカ入つてくれんじやないの？」
「ふうむ……ま、それはきつとこつとんがやつてくれる！」

「え、ええーつ！ わ、わたし!?」

「またムチャぶりだなおい」

「そう！ きつとそういうのもマネージャーの役目だから！」

「いやつ、いや、否定……はしないけど、なんかちょっと違う気がする」

「そうだな、なんだつけ、G Mとか？ 違うな、それは編成とかチーム作りの方だよね、えー……プロデューサーとか、そんな人か？」

「だつてそんなこと言つたつて選手だつて足りないぐらいなんだから、みんなでやんなきやダメつしょ、みんなで」

「……ま、そりやそーなんだけど。
頼むぜ、こつとん」

「えーっ」

「あんたもムチャぶりじやん」

「確かに人欲しいよな、とりあえずもう何人か1年ねじ込もうぜ。せめてあと一人」

「どうして？」

「戦隊か!? 五人で戦隊組むのか!?’

「可憐ちゃんわたしもそれ思つた！」

「あんたら割とバカだな。

違うつつーの！」

M F攻撃系、F W。こつとんは選手じゃないから、お嬢様入れてもいま一五人。だ
サッカーはベンチ選手せめて五人は欲しいんだよ。G K、D F系、M F守備系、

から、もひとり

「なるほどな！」

「てかこんなことはおめーが言え」

「あたしベンチのことなんか気にしたことないから」

「ヒヤーッ！ エース様来たよコレ。ヤだねえエリート様はー」

「でもあんた意外に頭いーなあ。二桁の足し算引き算すぐできるんだねえ」

「それギヤグなのか素なのかであたしのあんたに対する目が厳しくなるか優しくなるか一八〇度変わるよ？」

千里ちゃんは確かに、こういう小知恵は回りそうなタイプ……とか言うと怒られちやいそุดけど。

「それなら。

平野さんが、いいと思う

「あつ！ いいと思う！」

ありすちゃんの提案に、またわたし、大賛成。

「誰それ」

「ほら、さつき二人の間に割つて入つてくれた、金髪の」

「ああー！」

「私、さつきの見てこの人勇氣あるなあ、つて思つて。PK勝負も二人で横で観てたんだけど、いわば他人事なのすごく真剣に観てたし。きつと、いい人だよ」「そういや……あたし頭に血が昇つてたけどさ、ドン！つて胸押されてフラン、つてなつたよ。思い出すとパワーある」

「あー、オレもギュツ、てやられて思わず止まつたからな。迫力あるな」

「そう！」

あの子もきつとなにかやつてたんじやないかな、だつて脚がね！　こーんな太いの！」

「あつ、そう、身体とかもこう分厚くて……つて、それはハーフだからかな？」
「ハーフなの？」

「直接聞いてないけど、名前が『エレーナ』だつたからたぶん……」

「あんたも『アリス』じゃん……」

「うん、まあ……」

「脚が太い……自転車とかだろーか。ほら、ヨーロッパつて自転車すごいっしょ、ツールとかジロとかさ」

「ヨーロッパなの？」

「名前が『エレーナ』だからたぶん……」

「あんたも『チーター』じゃん……」

「うん、まあ……」

「ネタやつてる場合じゃないよ」

「じやあ、わたしまたちよつと声掛けてみる！」

「おつ、頼むぜこつとん」

「お願ひしとくー。あたしがやるとこんなひつかけちまうから口クなこと無い」

「PK勝負で負けちまうしな！」

「だから！ 負けて！ ないつつー！ の！」

「ケヒヒヒヒ」

「……」

ありすは、「少し休む」という彼女の言葉が気になつたけど、黙つていた。
こつとんなら、なにか障害があつても、突破してくれるかもしれない。

「……まあとにかく、明日から頑張ろつか」

「うん！」

「えつ、もう明日から本格始動なの？」

「世界一を目指すんだから、一日だつて休んでる暇ないつてば。明日は多分みんな来るから、自己紹介考えとくといしよ」

「「はーい」」

「ああなんかユーワッになつてきた。キビシ一人とかいない？」

「ああ、それは大丈夫。2年も3年もうるさい人は居ない感じ」

「そか。じゃちょっとホツとしたな。

そーいや今日のナナさんもかんなり可愛い人だけど、横に居た人もキレイだつた
なー」

「忍様。GK。あんたのライバルにして練習相手だね。あの人も一癖あるよ、なん
たつてお父さんが古武術の研究家らしくて、自分も剣道から柔術から合気道から、
いろいろやつてる」

「ウッヒー！ マアジでえ？

「古武術つてアレだろ、ナンバ走りとか、平蜘蛛返しとか、なんとかかんとか」

「そそそれそれ。家で手裏剣とか投げるつて
まああああじいいいでええええ!?」

なんだよそれ怖ええよ。

あーなんか別のポジションやろつかなあたしー。FWとか興味あるー
「んー……まあ、そのへんはチーム事情とも揃めて、だからあたしからはなんとも
言えなきけど、ちー、あんたGK向いてると思うよ」

「そおかなあ」

「PKん時さ、反応もなんだけど、最後頭つてか顔面で触りに行つたつしょ、ボー

ルに」

「身体が勝手に動いたんだよ」

「あれなかなかできなきよ。

人間やつぱ頭守るもんなんだ。

ボールに顔面出せる勇気、つてかなんだ、バカ加減？つてGK向き

「ふうん、そんなもんかねえ。

まあ、サッカーはあんたのがはるかにベテランだから、そーなんだろーけど。

しつかし古武術かあ……すごそー」

「そいえば、3年生の方はわたし達まだ見たこと無いよ」

「うん」

「ああ。みんなね、えー……」

可憐ちゃんはちょっと目を上にむけて、

「……ま、明日見ればわかるよ。ふひひ」

「な、なんだか怖いな」

「大丈夫、取つて食われるわけじや……えー……」

「取つて食われるの!?」

「……ま、それもお楽しみで」

なんかニッタリ笑つてる。

不安だなあ。

「明日葉も、慌てなくていいんで、じっくりお家の人の説得して、ま、遊びでいいんで、ホントに。遊びに来てください」「いえいえ、そんな、世界一を目指すからには、遊びじやいけませんー！」

「いや、サッカーは、遊びッスよ。

樂しむ気持ち無くすと、プレーがつまんなくなるから」

なんだかちよつと、可憐ちゃんが大きく見えた。小学生からずつと、厳しい代表で揉まれてきてまだなお、そんなことが言える。

あるいは、厳しいところで揉まれてきたからこそ、そういうことが言える。

ひとつて、全然見かけによらない。

彼女だつてここでブラック飲んでドーナツ食べてたら、フツーの美人系の女の子なのに。それが一度ユニフォームをまとえば、日本中が期待する……かつこいいなあ。

わたしもそんな立場になつてみたいもんだよう。

「……んー……なんかちよつと、ゾワゾワしてきたよ。きょ、きょうからちよつと走つとくかな」

「いーね。走り込みはやつて困るもんじやないからね」「どんぐらい走りやいい？ 三キロぐらい？」

「キロ六分を休みなしで一五本。

それで世界一になれる」

「ム・リ！」

キロ六分はともかくなんだよその一五本つて！」

「あんただつたらキロ四分切れるつしょ。その余裕を持久に回しやいーだけ」

「んな簡単に言うなよ……九〇分も走れつかよ、オレマラソン部に入るんじやねー

んだぞ」

「バカだな、延長になつたら一二〇分だぞ、そのあとPKだ」

「ああGKでよかつた！」

「走るのはみんな走るの！」

「私、たぶん、二本目の途中ぐらいで倒れると思う……」

「あ、ありすはムリしないで。少しづつ、距離や時間、伸ばせばいいーから

「はあい」

「あたしやムリすんのかよ」

「あんたはビシバシ叩いて鍛えた方がいーよ。せつかくのいいセンスが腐つてる

「チクショウ好き勝手いいやがつてー」

なんて言いつつ、ちーちゃん、それなりにキャリアのある選手に何度も讃められて満更でもないご様子。ノせるのがうまいなあ。

——一段落ついたので、お店を出た。また漆原さんが心配そうだつたし。明日葉ちゃんと別れたあと、千里ちゃんが突然、大声を出した。

「そーだ！ もうちょい時間あるから、お近づきの印に、つてことで、みんなでカラオケ行かない!?」

「あー」「んー」

「夕飯ギリギリまで遊ぶ小学生じゃないんだから。微妙な時間だから帰ろーよ」

「あー……ま、そーだな。

いやあたしさ、親両方遅えんだよ。兄貴も大学の実験でロクに帰つてこないし……

⋮

ちーちゃんは頭を搔いた。

「なんだ、寂しーのか？ 添い寝したげよつか、ちーちゃん？」

「アホ言え。そんな趣味ねー！」

「男装してるくせに」

「男装じやねーよ！」

「ちーちゃん、カラオケ好きなの？」

「好きつてほどじやないけど、大声でシャウトすつとスカッとするじやん
わたしもカラオケ大好きなの！
こんどみんなで行こうよ！」

「おーいーねいーね。

じやまた今度な！」

——駅で別れて、電車に乗る。

昨日は二人、今日は四人。

また大きな歯車が、ガシャン、と回った気がした。

「古都う。きょうは『デリシオーサ』のビーフシチューが、食べたくないかい？」
「えー今日も外食ですかー。三連続ですよー。家事サボり過ぎじやないでしょかねー。」

「だつて！ ビーフシチューなんてめんどくさいもの、おうちで作る気になんないもん！」

と言つてレトルトなんか絶対ヤダ、つてわがまま娘がウチの母。まったく、小娘様育ちは……

そのくせパパンが夕食に帰れる時はいいとこ見せたくて頑張っちゃうんだよね。

「じゃあわたしが見様見真似で作るよ
「それだけは止めて」

真顔で止められる。

娘にキッキン使われるのが嫌ならちよつとだけ頑張ればいいのに……なんて贅沢言っちゃいけませんね。

「わかりました行きましょう。

実は今日も『エンド』行っちゃって、あそこのバターシツコイのちよつと、つて気分なのよね。和食のどこかにしない？」

「あら。いいわよ私構わず食べるから、古都珈琲でも」

「どーしてもあれがいいのね……わかつたよ適当にあつさりなの見繕うから」

——クルマで数分の距離にファミレスがあつて、そこはよく休日のモーニングなんかでも使うので、おなじみ。

テーブルについて二人でオーダー。結局、やつぱりこここの看板メニューなんだから、でビーフシチューにしちゃった。それもセットでサラダとバゲット付き！ やつほーい！

……ああまた体重計が怖い……

「……ねね、古都、あの子とつても可愛くない？ 同じ学校の子でしょう？」

「ん？」

「あつ！」

「噂をすれば」。

少し離れたテーブルでいままさに注文しようとする制服姿の女の子は……平野さん。

ただひとりポツン、と居る。

「ああやつぱりブロンドは綺麗ねえ。私も染めようかしら」

「ヤメテ。……あの子、同級生なの。マン、連れてきていい？」

「なにを愚問を。すぐ引つ張つていらっしやい！ 拒否られても無理矢理に！」

「……ひーらのさん！」

「あつ。……あの時の。コンバンワ」

「こんばんわ。

まだ名前言つてなかつたつけ、わたし、住吉古都。こつとんつて呼んでください

い

「あつ、はい。

私は平野エレーナ。私も、エレーナでいいデスよ」

「おひとり？」

「はい。

家族が遠征中なんデス。だから今日は、おひとりさまです」

「だつたら、ご一緒にディナー、しませんか？ ウチのママンが一緒でよければ」「え……いいんデスか？ 親子水入らずの時間を」

「もうママの顔なんか見たくないぐらい見てるから。倦怠期の夫婦みたいなもんだけ。エレーナちゃん居てくれた方がありがたいの」

「フフツ。

じやあ、お邪魔します」

「やつぱりごはんは、みんなで食べた方が、美味しいよね」

「ハイ」

「……お邪魔いたします。はじめまして、平野エレーナです」

「ああ～ウエルカムウエルカム！」
つて、エレちゃんつてどちらの方？ ハーフ？ それとも日系何世？ 留学生と
か？」

「また、不躾だよ」

「あ、母がロシアで父が日本デス。こんな見た目ですけど、日本生まれ日本育ちの
日本人デス」

「あーそれで言葉完璧なのね。

ヨロシク！ 私は古都の姉、観都です」

「ママだつてバラしちやつてるよ！」

「つて妹はよく人を騙すのが好きなの！」

「ふふふ、観都さんは十分お姉さんでイケますね」

「ひょーほほほ、聞いた？ 古都。

これが！ ワールドワイドよ！」

「意味わかんない。

「ごめんね、独りに戻りたかつたら、いつでも戻つて

「とんでもないデス。

楽しいお母さんデスネ」

「それだけが生きがいだからね」

「ママはちょっとムリして楽しみすぎだよ」

「ふふふ……」

軽い世間話をすると、お料理が来た。

エレちゃんはフェアの『お特盛り海鮮丼』。

「うわあ、海鮮丼も美味しそうお～！」

「あ、シアしますデスか？」

「いいの!? やりい！ この季節やっぱウニよね～～～

「ちょっとおかーさーん！」

もエレちゃんもこの人甘やかしちゃダメだから！」

「ふふふ、思つたよりbigなので、助かりマス」

「じやわたしのビーフシチューもちょつと持つてつて。わたしもちょつと最近食べ過ぎで、ダイエットしなきや、つて思つてるの」

「無駄な努力はおやめなさいつて」

「おかーさんが太りやすい体質にさえ産まなければこんな涙ぐましい努力はしなく

て済んだのに……」

「ふふつ、コツトンさんも、太りやすいのデスか？」

「うん、わたし間食とかすると一発。

二、三日で一キロとか増えちゃうんで、甘いものとか大好きなんだけど超我慢」
「わ。

私も、ほんのちよつと油断するとどーんと増えちゃうんデス」

「ああ、そう、ロシアの方つて、スゴイわよねえ、お年召すと！」

「ちよつとマアマア」

「フフ、ハイ。私の母も、若い頃はとてもSlenderだつたんですけど、今はもう…

…とてもDeluxです」

「「あはははは」」

なんかね。

たぶん体重でいうとそういうでもないんだろうけど、とにかく体積が多いっていうか
……お胸なんかもおつきくて、まあもう、ブラウスはち切れんばかり……つてかピ
ッチリのサイズ選びすぎだよ、エレちゃん。

「ああでもホントエレちゃんは可愛いわねえ。水色の瞳がお綺麗で。私もロシア人と結婚すればよかつた！」

「そしたら髪真っ黒瞳真っ黒が出るんだよ。そんなもんです」

「あ、私のところも、妹は黒髪でブラウンアイズデスよ」

「へーつ。そうなの。あでもきつと妹さんも美人なんでしょうねえ」

「ハイ。

「あ、私が言うのもおかしいですが、妹のほうがずっとずっと美人デス」「妹さんは？ ご両親と一緒にその……遠征に？」

「ハイ」

「あら。遠征？ お仕事じゃなくて？」

「ハイ。サーシャが、あ、妹がファイギュアの選手なんです。ジュニアの。それで、

「両親と一緒に、世界を回つてます」「凄いわねえ！」「はー……」

合点がいった。

と同時に、ここから先はあまり踏み込まない方がいいような気も、した。

「エレちゃんはお留守番？寂しいわねえ」

「はい。でも電話もビデオフォンもありマスから」

「エレちゃんはスケートはやらなかつたの？」

しかし小娘様は世間知らずのふりをしてゴリゴリ突き進む。本物の世間知らずをホン先ほど見てきたわたしには可笑しくてしようがない。エレちゃんには迷惑だろうけど。

「やつてました。

でも、引退しました」

「あらあ！残念ねえ！エレちゃんみたいな可愛い子こそ銀盤に映えるつてもんなのに！原因はなに？やつぱり食べ過ぎ!?」

「ちょおつとお！ママア！」

「フフフッ、いえ、体重管理は頑張つてましたけど……才能が、なかつたんだと思いまス」

「ざんねんねえ……フィギュアに可愛い点があれば満点あげるのに！」
「フフフ、ありがとうございます」

「じゃ気を付けないとね！」

リバウンド来ちやうかも」

「……ハイ……じ、実はもうかなり……」

「わ。

だよね、だつてこれ食べちやうつもりだつたんだもんね！」

お特盛海鮮丼はその上に散りばめられた魚介の華やかさとバラエティもさることながら、「ご飯2倍！」とデカデカ書いてある。

これ基本的に食べ盛りの若い男性向けだ。

「ハイ……もう体重気にしなくていいと思うと、最近、なにを見ても美味しそうで……ついつい……」

「わかるわあ！ 私も古都産んだあとストレスから解放されてリバウンドが」「それママのひとつがたりだけど学生の時の写真もいまと変わんないよ」「二〇年同じ体型を維持しててるって、凄いでしょ？」
「幼児体型のまま四〇年来てるだけじゃん」

「あなたもこのまま行くのよ！」

「ギヤーッ！ 死刑宣告ーー！」

「ふふふふふ……

こつとんさん、もつといかがですか」

「エレちゃんこそビーフシチュー、もつと要らない!?」

「……じゃ、じゃあ少し……」

「お母さんロシアの方ならやつぱりボルシチとか作るの？」

「フフツ、母も若い頃からスケート一筋の人だつたので、あまりお料理とかしないのデス。でも、ロシアに帰ると、美味しいお店に連れていつてくれマス」

「エレちゃんは、お料理しないの？」

「私も、お留守番で独りになるのがこの間からなので……なんだか独りでお料理していると、むしろ、寂しい、んデス」
「わっかるわあ!!」

母が大声を出した。

「古都はまだわかんないでしようけど、愛する夫が今日は遅い、晩ご飯食べててくる、とわかつてゐる時のあの食事の用意のドつまらなさつたら！ もうレンジでチンで十

分、つて感じ！」

「そのくせ絶対レトルトとかカツプ麺とか食べないくせに。
てゆーか愛する娘が居るじやない！」

「そんなもんにはどつかでテキトーに食べてきてーつて言えばいいじやない。私だ
つたらそれでオッケー！だし」

「またこれだ……娘はあなたのコピージやないんだから」
「氣兼ねしない仲つて、最高じやない？」

「フフフフフ……」

「あれつ、じやエレちゃん、今晚はお家でお独りなの？」

「ハイ、そうです」

「じやーああウチにおいでなさいな！」

「あつ、それママ賛成！ ママには珍しくナイス・アイデア！」

「はつはー！ たまにや決めるわよ私も必殺のスマッシュを！ ハツ！ ハツ！」

卓球のそれを卓上で連続で決める母。

周りの人は見た目じやなくて精神年齢で姉つて言つてるんじやなかろうか。

「ね！ そうしようよエレちゃん！ 狹い我が家だけど、独りよりはいいでしょ！」

「で、でも」

「遠慮ならしないで。今日もパパたぶん午前様だから、我が家も超ウエルカム！」

「じゃ決まりね」

「え、えーつ……ほ、ほんとにお邪魔……ではない、デスか？」

「そんなことちょっとでも思つてたら来ると言われても断るわよ」「で、では……」

「はい、よろしくおねがい……します」

「ヒヤツツホーーー！」

ブロンドブルーアイの美少女、ゲットだぜ！

古都、帰りコンビニ寄つてビール買つか！」

「呑みませんつて。もーこの不良主婦は」

「あつ、エレちゃんはやつぱりウオツカがいいの？ シベリア育ちにはビールなんか水みたいなもんよね」

「日本育ちだつて言つてるじゃない！ 失礼にもほどがあるよ！」

「じや今呑むかー！」

「帰り誰が運転するのー!?」

「あれマニユアルだからテキトーにガチャガチャやつてりや前に進むわよ。ハンドルグルグル回すと前後左右に回るし。

「へーイウエイトレス！　へーイ！　ワン・ジョッキ・ビアープリーズ！」

「ダあメだつてばあ！」

「無しです、無し！　なんでもないです！　この変な人無視してください！」

「このボタンつて連打してもピポピポピボーンつてならないからつまんないわよね」

「なつたらうるさくてしようがないでしょ！」

「第一これ線も繋がつてないのにどうやつて伝わつてるの？」

「電池で無線に決まつてるでしょ」

「ははーんさては客がこれを押すのを厨房からずっと監視してゐる人がいるわね？」

「人の話たまには聞いてよ」

「フフ、フフフフフ……」

話が弾むとお箸も進む、結局、出てきたものぜんぶ平らげちゃつたわたし達。

……うむ。この線で攻めるしかなさそうだな！

——ほんの冗談の、つもりだつたんだけど。

「……エレちゃん、お風呂沸いたよ。一緒にに入る？」

「ハイ！」

「……」

はい、つて言われたら、ねえ。

……げへへ、美少女好きの血が騒ぐぜ。

我が家のお風呂はマンションにしては広い、というか、広いお風呂が気に入つて当時ちょっと予算オーバーのここを無理して買った、と母は言う。

そのママンは学生時代の友人と長電話中。お客様呼んどいて、まつたくマイペースなんだから……

「じゃ、じゃあ脱衣場狭いのでお先に入つていただけると～」
「はーい」

わたしの持つてる中でいちばんブカブカの着替えを用意して（幅はともかく丈が足りない）脱衣場に……わ、ちゃんと畳んでる。えらいなあ、こういうところに出るよね育ちがね。わたしだつたらクシヤクシヤのまま。どうせまた着るしくとか言つて。

「……おまつとー」
「ハイ、おじやましてマース」

タオルで髪を留めたエレちゃんが洗い場で泡まみれになつてた。あやつぱり外人さんっぽい。

「……お先入りまーす」
「ハーアイ」

かかり湯をして、ざぶーん。

浴槽から改めて見ると……

「……エレちゃんって、グンラマーだんねえ。WOW! ヴィーナス! つて感じ
「フフフ、太りすぎデスー」

いやもう真っ白な肌に凹凸がばよーん・ぼよーん・そしてどよーんと……

「コットンさんだつてグラマーさんじやないです?」

「わたし? わたしは……」

ザバー!

立ち上がる。腰に両拳を当て、胸を張る。

「くびれが、無いの!」

「……」

エレちゃんが見て、目をしばしばさせて、

「……ホントですね……」

「少しは否定して……」

「あつ、ゴ、ゴメンナサイ！」

「事実なんだけどね……要は世の中緩急なのよ。バスト七〇台でもウエストがキツ
チリくびれてると美形なの。ところがBが九〇あつてもね、Wも九〇あると……無
いよ！」

「フフフ、こつとんさんは、おもしろいデスね」

「本人は全くそんな自覚無いけど。あ、洗い終わつた？ 代わろつか」

「ハイ」

「遠慮無く言つてよ♪」

浴槽交代。

わたしでちょうどだつたので、ザ・ザーッと結構な量のお湯が漏れる。やつぱり
彼女、カサがわたしの一・五倍はありそう。

「エレちゃんとこだとやつぱり西洋式のなの？ ホテルみたいにこんなカーテンあつて」

「いいえ、それが。フフツ。

母はこちらに住むようになつて日本のお風呂文化がすっかり大好きになつて、お家建てる時にとつても大きなお風呂を作つたんデス。だから、こんなまーるい、ジヤグジーがありマスよ」

「ウヒヤー、羨ましくなう！」

わたし、お風呂大好きなの！ おかあさん終わつておとうさん遅いのわかつてる日とか、二時間ぐらい入つちやうことあるよ！」

「ええつ？ 長いデスね。なにしてるんです？」

「文庫本とかシワシワにしながら読む」

「どんなの読むんですか？ 私、小説とか疎くて」

「池波正太郎超オススメ。司馬遼太郎もいいけどあの人構成が無いから小説あまり読まない人向けじやないんだよね。あと藤沢周平に吉川英治……定番ばかりで面白くなくてごめん」

「いえ、ぜんぜん知らない作家さんばかりデス。恋愛もの……とかデスか？」

「んー……スリル＆サスペンスかな。ミステリとアクション要素もある」

「今度本屋さんで見てみマス」

「いつしょに行くよ。わたしの貸したげてもいいけどほら、シワシワだから」

「フフフ……」

「コットンさん、髪、たいへんですね。毎日デスか？」

「ああこれー？ 慣れよ慣れー。わたし地肌しか洗わないから、見た目ほど大変じやないよ。むしろ乾かす方が時間がかかるけどー」

「私はずつとショートだから、見てるだけで大変そうだな、つて……ずっと、そんなにロングデスか？」

「うん。

幼稚園ぐらいのちつちやいころ三つ編みおさげにしてもらつて、ものすごく気に入つて、以降そのままー」「わ。

「歴史、ありマスね」

「なんか髪型変える機会を逸したの。高校でガラつと変えようかな、とも思つたんだけど、環境が変わるために髪型も変えるのにビビつちゃつてー。でね、おさげが伸びるに従つてバランス取るためにリボンを大きくしてつたら、

あんなことに……今日なんかちーちゃん酷いんだよ、『おばけ』って言うの！」

「フフフ……でもステキですよ。私のクラスの男の子で、話題になつてました」

「うひょー！」

マジですかー！」

「はいー。

いまのところ、天王寺さんと西九条さんがツートップで、ちょっと離れて住吉きん三番手、つて

「……」

エレちゃんちょい天然？

いや、ま、学年一〇〇人から居る女子でね、三番手なんだからそりやもう寿ぐべきことあります、ええ。よし逆襲。

「それはエレちゃんの前だから照れてそんなこと言つてるんだよ。エレちゃん入れたらエレちゃんが三番手に決まつてるじゃない？」

「そんなことないデスよー」

「そんなことあるある。男の子つてね、そういうところあるから。好きな子の前では興味ないフリすんのよ～」

と、聞いたことがある。

「……さて。エレちゃんよければ一緒に入つていい? ちょっと狭いけど」

ハイどうぞ

ては

さ・つか～～～ん……ふんふんふん……

二人横向きで膝抱え。

「……ちよつと狭かつたかな！」

「フフ、だいじょうぶデスよ。五右衛門風呂みたいデス」
エレちゃんの見た目から『ゴエモンブロ』って単語が飛び出すとびつくりする

「フフ、よく言われマス」

ほらー。お胸浮いてますよー。

緊急用浮き袋ですかこれは。

……ちよ、ちよつとお願ひしてみますか。こんな機会なかなか無いですね。

「あ、あのーエレちゃん。失礼じやなかつたら……胸、触つていい？」「ハイ？ はい、別にいいですけど……」

……ぽいん。

ぽいん、ぽいん、ぽいん、ぽいん、ぽいん……

「ぽよん」じやないのよ。ぶるぶるつて感じじやなくて、弾力の収束がシユツと収
まつて、やつぱり昔スポーツやつてた人だなつて感じが……
しかしデケーなこれ！
よし恥の搔きついで。

「つ、ついでにおしりも、いいですか？」

「フフツ、こつとんはおかしな人デスね。いいですよ？」

……くにつ。

お・おおーこつちはさらに引き締まつてる！ 見た目より全然こう密度が高くて……これひよつとして脂肪じやなくて筋肉じやないの!?

くに、くによ、くにん……ぎゅーつ……ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅつ、ぎゅつ、むぎゅーーーつ……

「……こ、こつとんさんは、痴漢の人……デスか？」

「ハツ！？」

ご、ごめんなさい、つい探究心の赴くままに……エレちゃんこれ実は筋肉の塊な
んじやないの!?」

「……お、お恥ずかしいデス……」

「太りはじめてさすがにマズイと思つて、ランニングはちょっと……」
「サッカー！ やろうよ！」

「……ハ、ハイ？」

「エレちゃんも見てたでしょあの名勝負！」

「わたしたちね、サッカー・チーム『D S C』に入部することにしたの！ 可憐ちゃんも、千里ちゃんも、それから、ありすちゃんも、もちろんわたしも！」

「……」

「それでね、エレちゃんならきっと！ すごい選手になれそうだから！ スカウト！」

「……あの、でも……」

「私、サッカーのこと、全然、知らないので……」

「あ、初心者だから、つていうのは大丈夫！ 可憐ちゃん以外はみんなそうだし！ 勝負の時におさげの先輩居たでしょ、あの人人がナナ先輩って言うんだけど、あの人けつこうスゴイ人で、一から教えてくれる、つて！」

「……ハイ、でも、あの……」

エレちゃんの穏やかな微笑みが、明らかに曇っている。

「……きっと、足手まといに、なりマスから……」

「そーんなこと、ないよ……」

寂しそうな顔、してた。
しまつた、と思つた。

「ま、まあ、あの、もちろん無理強いはしないんだけど！　あの、えー、きつとダ
イエツトにもなると思うから！　ナナさんね、ファイツトネスクラブの代わりにして
もいい、つて言つてたから！　だから、興味が、湧いたら、また声、掛けてね：
……」

「……ハイ。

「ありがとうございます、こつとんさん」

「……ゴメンね、変なお誘いして……」

「いいえ！」

いろいろ気にかけてもらつて、嬉しい、デス」

「じゃ、じゃあわたし先出ます！　エレちゃんはゆつくり浸かつてね！　あ、着
替え、そこに置いてあるから！」

「あ、ハイ……」

ざばーーーー……

——慌てて着替えてドライヤーをリビングに持ちだして、それで頭をコンコン叩いた。

言つてしまえば、クラシック音楽家を目指してたけど挫折した人に、「バンドやろうよ！」とかノーテンキに誘つたようなものじやない。

しかもまるで、そのために一緒に食事しておうちに誘つたみたいな……

ああもお、わたしのバカ！バカ！バカ！

「……あがりました。いいお湯いただきマシた。ありがとうございます」

「あーいえいえ。冷たいものなにか飲む!? お水十六茶ペリエ、オレンジジュースアップルジュース野菜生活、アイスティーアイスコーヒー、ビール白ワイン」

「フフ、こつとんさんのおうちは、なんもあるんデスね。ファミレスみたいです」

「親子揃つて甘いもの大好きだから」

「じゃあ、お水いただけますか」

「はーい。水は?」

「あ、水もあるんデスか?」

「自動製氷機能付きですぜへへへ」

エレちゃんは、ニコニコしてた。

よかつた。

こくこく飲む喉は文字通り。ピンク色。わたしのスエットは、やつぱりちょっと寸足らず。

「……なにかして遊ぶ？　ＤＶＤとか観る？　それとももう寝る？」

「……実は私、朝早いので、なにかしてると途中で眠つてしまいそうデス」

「あーじゃあどうぞおやすみなさい。わたしはちょっとパソコンで調べ物しますです

す

「はい」

「廊下出て右手の部屋がわたしの部屋で、あ、床にお布団敷いてるけど、どうぞベ

「ツドで寝てください」

「そんな、いいデスよ」

「そう言わずにー。お客様なんだからー。無理矢理この部屋に運び込んだ自慢のクイーンサイズ！ ホテル仕様だよ、寝心地いいよー」

「フフッ。

……じゃあ、お先します。

おやすみなさいませ」

「はい、おやすみなさいー」

「……こつとんさん。

ありがとうございます」

「いえいえ。別にわたし、なにか苦労したわけじゃないから」

……というのが、母の教え。

人間は、自分にリスクやコストが無い限り、けつこう親切。

でも自分に損が生じるおそれがあると、とたんにテコでも動かなくなる。
だからこそ、損や不利益を被つて何かしてくれる人がいれば、それこそが本当の

……友達。

逆に言えば、自分が何も支払つてないのに偉そうな顔は、するな。

あの母ああ見えて、いろいろ苦労してきたらしい。言わないんだけどね。
逆かな。苦労したから、ああして一瞬一瞬楽しんでるのかも、しれない。

「……さてと」

ノートパソコンを開くと、web百科事典を引く。

……「大正太陽」と。

わ、大きい画面で見ると、いつそう美形。確かに目元涼しくて眉が細く長くキリッ、
綺麗な卵型の輪郭は可憐ちゃんと兄妹と言われても、うなずくかもしれない。
なになに、目標とする選手は「フイリッポ・インザーギ」と。ではそのフイリッ
ポ君とやらを……わ。これまた美形じやない！ ヤンチャそう。なになに、え
ー「名うてのプレイボーイ」。でしううねえ、こんなのどこの国の女の子だつてほ
つときませんよ・ねー。えーとじやこの人のプレイ動画を……

——すっかりハマっちゃつた。
さすがサッカー、世界一人気のスポーツ、リンク引いてるといつまでも終わらない。

部屋のドアをそーっと開けると、星明りが差し込んでいた。しまつた、カーテン
閉め忘れ。そして案の定、ベッドに人影なし。
もー、気を遣わなくていいのにー……

カーテンを引こうかと思つたけど意外に雰囲気がいいのでそのままにして、もそ
もそとベッドにのし上がつた。
と。

「……こつとんさん」

「あら。起こしちゃつた？ ゴメンね、なんかネット見てたらズルズル動画とか見
ちやつてーーー！」

「いいえ」

彼女は起きだして、お布団の上に正座した。

「……サッカー部、見学に行つても、いいデスか？」

「……」

わたしも身を起こす。

もしもそれが、わたしに気を遣つてのことだつたら……よくない。

星明りでは、表情がよく見えない。

だからつて、自分で誘つて、「どうして？」とは聞けない……

わたしのすこしの沈黙の意味を理解したのか、エレちゃんは言葉を継いだ。

「……楽しそうだから……」

「エレちゃん。

誘つておいてあれなんだけど、無理にそうしてくれる必要、ないよ？ エレちゃんのやりたいことやるのが、いちばんいいと思う」「やりたいこと……は、いま、無いんですね」

また、キツイことを言つたことになつた。

ああもう、何も喋らない方がいい、古都のバカ。

「それに……

独りでおうちに帰つても、することが、無いんですね……」

ああ。

合点がいった。

きつと暗いこの部屋が、独りでお布団が、その時間を、思い出させてしまつたのだろう。

もちろん部活がそれを無くすわけじゃないけど、すごく短くすることは、できる。
疲れ果てて寝ることでさらに短く、できる。

「エレちゃん!!

サッカー、やろう!」

「……ハイ!」

キラツ、とエレちゃんの顔でなにか光った。わたしは彼女の手をとつて、強引に
引き上げた。

「一緒に寝よ！ ね！

このベッド、やわらかいでしょ!?」

「……ハイ……」

「うふふ、わたし誰かと一緒に寝るなんて、中学の修学旅行以来〜〜〜

「……フフツ……わた、し、も、デス……」

知らずにわたしは、彼女の頭を、撫でていた。ホントに細くて柔らかい、猫の毛

のような髪が、指にまとわりついた。

ああ、わたしが男の子だつたなら、きっと強く抱き締めて優しい愛の言葉でも囁いてあげるのに。

いや、まあ女でもそうしてもいいんですけどね、いや……

溜めに溜めた想いを解き放つたからか、エレちゃんはすぐ眠りに落ちた。成り行き上、わたしの腕の中で。

……腕枕をされる前にする羽目になるとは、思わなかつたデス。しかも相手女の子、ハーフの美少女だぜ！

……なんだこれ。

DSCに関わるようになつてから、変なことばっかり起きる。それも雪崩のように次々に。

「……どうなるんでしようかねえ、お星様」

カーテン越しの夜空に問い合わせてみた。

もちろん答えなんか返らない。

でも問いは、問い合わせで意味がある。

そうだ。

DSCも、エンブレム、あつた方がいい。さつきみたイタリアの、ACミランや
ユヴェントスみたいな、カッコイイのが。
それには……

「……お星様がいいなあ☆」

人肌とそのぬくもりは安らぎを誘う。

ストン、と落ちるようにわたしもいつしか、眠つていた。

■ 楽しいぼくらの仲間たち

——翌日。

今日ははじめて、本格的な部活の日。

放課後明日葉ちゃんの様子を見に行くと、相変わらず男女の取り巻きに囲まれて、アルカイックスマイルしてた。まだお許しがいただけでないのかもしれない。そつとしておく。

ありすちゃん、エレちゃん、可憐ちゃん、ちーちゃんと女子更衣室でジャージに着替えて、グラウンドに出た。可憐ちゃんだけはサッカー・ユニフォームらしい服装にバイクと、それからスネにガードみたいなのが入れてて、さすが本格的。

「……さあ、じゃあ先輩たち来るまで柔軟でもやってよっか！」

「「はーい」」

可憐ちゃんが音頭を取つて二人一組になりかけた、その時。

「……ギヤー———ツ!!
ウルトラヘブ———ーン!!」

甲高い絶叫と共に、巨大な獣……犀か河馬の類……が、突進してきた。避けきれなかつたありすちゃんが、その牙に掛かる。

「にやにこれにやにこれにやにこれ、チヨ——ーフイギュア———ツ!!」

そのケダモノはありすちゃんを鰯折りにすると、頭から噛み砕こうとした。
ああ、「とつて喰う」つてそういう……：

つて !? !?

「もう離さない！ 誰にも渡さない！ 『これ』は、私の、もの———ツ!!

ブツ・チュ——————!!!

「ぴきやつ!?」

ああ。

いつちゃつた。

マジチューだわさすがに唇じやないけど、ありすちゃんの顔が三日月型に歪むほど頬に押し付け……

「こちらもも！　いいかげんになさい !!

マキ！　くー！」

「アイヨー！」　「ん」

その獣を背後から取り押さえてくれたのは、二人の長身の女性だった。よく見ればその獣も雌に見えなくもない。

「……ごめんなさいね、あれがももの愛情表現なの」
「……ふあ、ふあい……」

捕物に指示を出したどうやら先輩は、タオルを出してありすちゃんの頬を拭つてあげる。

「離してマキ！ くー！」

「こんなチャンス滅多にないから！」

「アルアル。これからもつとアルから」

「最初から暴れると獲物が逃げるよ」

物騒な事を言う。

「……可憐ちゃん、このみんなが、新入部員の？」

「あ、ハイ！ 八尾先輩！」

八尾先輩は、優しい笑顔で、頭を下げた。

「……びっくりさせてごめんなさい。私はDSCの、八尾由美子です。よろしく

ね
「あ、はい！」

八尾先輩はヘアバンドで髪を後ろに流しておでこを出した髪型で、すごく知的な感じで真面目そう。小柄だけどいかにもしつかり者、生徒会長とかやつてそうな感じ。

「簡単に自己紹介するね。

私達3年生。

あちらのショートカットの子が森之宮胡桃、ネコっぽいけど普通に人間」
「にゃー」

くすくす……

目を細めながらご丁寧に手首を折つて招き猫、で場が和んだ。
猫目に猫毛そして猫口。小顔で手足が長くしなやかそう。確かにネコだ……

「隣の褐色のサンバ・クイーンがマキ・パメラ・キシワダ。日系四世のブラジルか

らきた留学生。でも、お箸の使い方は完璧よ」

「スキヤキ・ダイスキー！」

手を挙げてブンブン振つて、顔中くしゃくしゃにして笑う陽気な人。小麦色の肌と緑の瞳がとつてもキレイ。

「で、こつちでシレツとしてるのが守口忍。怪しい古武術の師範代。日本刀を持ち歩く危険な女」

「首相だつて切り刻んで魅せるわよ。でもコンニヤクだけは勘弁な！」
「だはははははは！」

ちーちゃんがバカ笑いした。あ、きつとなにかのパロディなんだ。でも守口先輩軽口言つてもやつぱり美人。

というか八尾先輩おもしろいなあ。頭の回転すごく早い感じ。

「以上、四人がDSCの3年生です。

みんなのことも聞きたいけど、また2年も揃つてからまとめて自己紹介、しても

らうね

「はーい!!」

「くおらあ～～～！」

古典だなあ。安心感がある。

「ユウミイ～！ 私も紹介してようおうおうおうおうお～」

「はいはい。そこの猛獣が、梅田もも。ああ見えて大飯喰らいなの。座右の銘が『注意一秒・メシ一升』」

「最近五合だよ！ あとパンにしてる！」

「一枚？」

「一斤で我慢してるに決まってるじゃない！」

あ、よろしくう～！ ご紹介にあずかりました、梅田もも、どうえ～～～す！ えつとお、好きなものはあ、炭水化物と、糖分と、脂肪とタンパク質！」

全部じゃないですか。

スゴイの。とにかく立体感が。板に胸とお尻がついてるんじやなくて、ビア樽の真ん中を口クロ回して凹ませたような。

失礼ながらこの体型でホントにサッカーができるんだろうか。偏見的にキーパーっぽいけど、キーパーは守口先輩だし……

声がまたアンバランスに高くて、泣きぼくろとちよつとタレ目氣味、大きめの口元厚めの唇はもうちょい頑張れば和製モンローワーって感じなんだけど……

「ごめんねエンジエル。私、チーズケーキと美少女には目がないの！」

「あ、はい、いえ、だい、じょうぶ、です」

「チナミニ、モモのスキンシップはアタシ達もしょつちゅーやられてんで、気をつけてネ！」

「ハツ、ハイい！」

怯えてる。ありすちゃん生命の危機を感じてる。

「なにこれユーミ見てコレチョー粒ぞろいもいーとこだよタイプの違う美少女選り

取りみどり掴み取り、あかあおみどりふかみどり、どうすればいいの私!!
ら食すればいいの私!!

「さて、それじゃ2年来るまでスロー・ジョグでもやつて身体ほぐそつか」

「ウイー！」
「ん」
「はいな」

セイヨウトヨリシテ

アローリシミクみんなどうする

筋肉には遅筋と速筋があるんだけど、その遅筋だけを使うランニングね。感覚としては『これだつたらどこまでも走れるなー』ってスピード。早足よりも遅いぐらいで構わないよ。じゃさつそく行こつか

—はい!!

「もー、私の愛が若い子に移つたからつて妬いてるの」

「ハイももも先輩らしい機敏なところ見せる！」

「ふつふつふ……『ぽっちゃりは動きが悪い』という迷信を吹き飛ばして見せまし

四〇

ぼつちやり？
迷信？

わたし達は二列で走り……というかちよこちよこちよことまるでペンギンの行列のように足を動かしだした。

もちろんわたしでも全然平気なぐらい。

「隣の人とおしゃべりできたり、歌を歌えたりするぐらいでちょうどいいから！」

「私語オーケーよー！ ポジティブな話題ならねー！」

「♪さーくらのはあ／＼なあ／＼ さ／＼くう ころ／＼」

「PKその歌好きだねー。……スマレの花じやなかつたつけ？」

「サクラの季節だから！」

「筋肉ほぐして呼吸深めて神経起こして新陳代謝活性化させるのが目的だから、焦つてスピード出しちゃダメよー。それはあとでたっぷりやるからー」

「「はーい」」

先頭で振り返りながら指示を出す八尾先輩。指揮にも安心感がある。この人がキヤプテンと言われてもなんの不思議もない。

一〇分少々だろうか、身体もずいぶんあつたまつて汗もしつとり出てきた頃、ク

ラブハウスの方から声が響いた。

「……おーやつてるやつてるー！」

「ふふつ、壯観だねこう見ると」

「あれ、また増えてるじやん。いいねいいね」

「やつたあー！」

2年の皆さんのが小走りに走つてきた。わたし達も足を止めて、対面するように並ぶ。

「……」

ナナさんが、わたし達五人を見回して、腕で目を覆つた。

「……キヤップテン……泣ける」

「ホントだね。いっぱい入つてくれたもんね」

口調と仕草は冗談めかしてたけど、本音だと思つた。応えるキヤープテンも、優しい声だつた。

でもナナさんはすぐ顔を上げて、ニカツ、と笑つた。

「ようし！ ほなまづ……3年は？ 自己紹介終わつた？ ほなまづ1年やつてもらおつか」

「そうだね」

わたし達は顔を見合わせて、ここはやつぱり、縁の深い可憐ちゃんから。

「此花可憐です！」

中学までサッカーやつてました！ 試合に使つてもらえるように、がんばります！」

「ということでユース代表来ちゃいましたー。当然一人スタメン落ち確定ですんで、みんな、殴り合つてくださいね～」

「「わはは」」

「ナナさん、ダメですよ、公平な目で」

「公平な目で見たらそうなんの。

お次の子は、そのユース代表と五角の勝負を繰り広げた運動センスの塊！」

「い、いえ！　は、はいつ！」

吹田、千里です！

えーっと、特に何やつてたつてことないんですけど、とにかく頑張ります！　よ

ろしくお願ひします！」

「いいね元氣で。

お次は、3年でもそうやと思うけど2年の男子大興奮のファイナルロリータ・あ

りすちやーん」

「は、はいつ！」

天王寺ありますです！

あの、私、ほんとうに初心者で、サッカーのこと、よく知りませんので、ご指導
よろしく、おねがいします！」

「まウチらも超初心者やから心配せんとええで。そしてパツキンの助つ人外人き
たでこれ！　バースやバース！」

「あつ、ナナさん、エレちゃん実は純日本人なんです」

「おおつ、これは失礼をば。堪忍してな。じやどくぞ」

「ハイ！」

平野エレーナデス！

私も、ありすさんと同じで、右も左もわかりません。みなさんの足を引っ張らないよう、氣をつけマス。よろしくおねがいしマス」「むしろ引っ張つて引っ張つて。新人一人引っ張りまわせんようやつたらあかんから。

ほな、最後に待望のマネージャーさん

「はい！」

住吉古都です！

よろしければ、こつとんと呼んでください！ みなさんがサッカーに集中できるよう、縁の下の力持ちになりたいと思います！ よろしくお願ひします！」

ぱちぱちぱち……

みなさんから拍手をいただいた。

「ええねえこれ。ええ子ばつかりやねこれ」

「ホントだね。なんだか、私達もワクワクするね」

「そうそう、ウチらはなんちゅーても『どきどき・サッカー・クラブ』やからね！」

「じゃあ、2年も自己紹介、させてもらいましょうか。なんといつても、ナナから

「ほいさ。

難波鳴海です！ナルミですけど子供の頃から姓名縮めてナナって呼ばれてます！一応サッカーのキャリア一番長いんで、なんか聞きたいことあつたらなんでも聞いてください！あ、ポジションは攻撃的ミッドフィルダー。ヨロシクウ！」

次、るー！」

ナナ先輩はおさげと整えた前髪に丸い童顔つぶらな瞳がすごく愛らしい。

「和泉流乃。ポジション……は左のウイング？かな？ん、ま、肩肘張らずに、
気楽にやりましょ。ね？」

「つぎ、ハナ」

流乃先輩はちょっと斜に構えた感じが小粋。赤毛とツリ目もカッコイイ。

「美原はなこです。みなさんと知りあえて、嬉しいです。私、思つたこと言う方なのでキツイこと言うかも知れませんけど、聞き流してください。あ、ロールはディフェンスライン一般。

じや次は蘭」

はなこ先輩は今日もショートの髪とキリツとした表情がキマつてゐる。見てて清々しい。

「天満蘭です!!　えーっと、ディフェンダーです!　えー……とりあえず!　みんなでいつしょに!　がんばりましよう!　ガッツです!!
はい、愛ちゃん!」

蘭先輩は迷彩服みたいなズボンと春先なのにモスグリーンのタンクトップ、それに髪のバンダナがホントに「ファイター」つて感じ。

「……堺愛です。

……フォワードです。

……よろしくおねがいします

ぺこり。

今日も小声の愛先輩は2年生を示す紺の学校ジャージ。それでも美形つぶりは陰るどころかむしろ強調されてる。

「……さいごに、主将」

「はい。

長居美緒です。キヤブテンやらせてもらつてます。中盤……というか、どこでもやります」

この歳にしてすでに「すてきなおかあさん」臭ぶんぶんの美緒先輩は、一呼吸、おいて。

「……本日はみなさん、ようこそDSCにおいてくださいました。私達は、楽しくサッカーをやりたい、と思つていますので、なにか困つたことや辛いこと、疑問に

思つたことがあつたら、遠慮無く何でも、私に言つてください」

ひとりひとりの、目を見ながら。

「お聞き及びかと思いますが、私達は幸運に恵まれて、昨年度の『クイーンズカップ』で全国大会に出場することができました。

その過程で味わつたドキドキとワクワク、身震いするような感動は、たぶん私達、一生忘れないと思います。

チームの名前のように、そのドキドキを、みなさんにも味わつていただけたら、先輩としてこんなに嬉しいことはありません。

でも、そのためには、みなさんの努力や熱い気持ちが必要になると思います。ぜひ力を貸してください。このチームを、自分達の家族、姉妹だと思つて、よりよくしていく方法を考え、それを実行していきましょう。

Never GiveUp, Go Ahead.
決して諦めるな、前へ進め。

私達のシンプルなチーム・スローガンです。難しいことは後回しにして、どんなことにも、体当たりでチャレンジしていきましょう！

そうすればきっと、どんな道でも、拓けていくと思います。
みなさん。

これからどうぞよろしく、お願ひします！」

パチパチパチパチパチパチ……

また思わず拍手が起きた。わたし達も返事も忘れて、手を叩いた。

「……さつすがキヤプテンやあ……どうこの滔々と嘘くさい名演説！　ゴムひもとか売りつけられそうやろ？」

「きのうの夜、寝ずに考えたんだよ。おかげで寝不足」

「あはははははは……」

「ほな、面通しも済んだ所で！」

さつそく身体動かし始めますか！」

「「はい！」

「あ、言い忘れてたけど練習着は見ての通り、好きなん着てなー。学校ジャージばっかりやとすぐ痛んで買い換える羽目になるんで！」

そういうナナさんは水色と白の縦縞に黒いパンツのユニフォーム。あれどこのいかで見たことがあるなあ。

見渡すと、みなさんそれぞれに似合つてゐる、個性的なスタイルだつた。ジャージー

……でもおかげで、なんのクラブかわからないといえばわからない。

ホンマは練習エニも配つてあげたいんやけど、貧乏所帯なんですんません……」

「せやねえ……ま、それはまた今度考えましょう。

さあ、春先ですんでまず基礎体力鍛えましょか、ストレッチしつかりやつてから、今日はインターバル！」

一
は
い
」

いざ、始動、と身体が動き始めたその瞬間、その鼻先を弾くように、妙にのびやかな声が響いて、ズッコケかけた。

これをサツカーではカウンター・アタックって言うんだつけ。

声がする方を振り返るとそこには……

「……やあやあやあ、遠からんものは音に聞け、近くば寄つて目にも見よ、わらわこそは西九条明日葉と申す者なりー！」

『どきどき・サッカー・クラブ』への入部を、ぜがひでもお願いたしたいー！」

明日葉ちゃんが、あれは……日本代表のユニフォームだ、フルセット、で、右手を高々と挙げて、立つてた。

左胸に八咫鳥のエンブレム、右胸には『17』の番号。日本海ブルーに差し色の情熱の日の丸の赤が、眩しい。

一瞬固まつた私達、を次の瞬間、

爆笑が襲つた。一六人が笑うと、迫力がある。周りが笑うと、自分も笑いの渦に巻き込まれる。遠慮が消えて、笑顔が増幅する。

明日葉ちゃんは「キヨトン」を絵に描いたような表情で、手を挙げたまま突っ立つて。慌てて駆け寄つて、手をとつた。

「明日葉ちゃん、明日葉ちゃん、そんなかしこまらなくていいから、いいから」「そうなんですか？」

お祖父様が、失礼なきようにと……」

「わつ、これレプリカじやなくてホンモンじやん！　なにこれどつから手に入れたの!?」

現役代表可憐ちゃんが服を触つて、驚く。

「ていうか昨日の今日で……」

背中に回るとちゃんと「NISHIKUJO」とネームも入つてる……

「サッカー・ショップに無理矢理頬んだの?」

「まさかショップごと買つたんじや……」

「西九条家ならメーカーごと買えるんじやないだろうか」

「よくわかりませんが、爺が用意してくれましたー」

「「爺」」

でたキーワード。

「あーひよつとしてあれが噂の西九条の姫君? えつ、待つて、そんな人うち来ていいの!?」

「ていうかこつとん! なんやこれは! ウチは確かにオモシロそうなの連れてこい言うたけど! こんなお嬢様!!」

「はつ、はい、すいません!」

「……オモロイやないかい。」

「……あんた、やるなあ。」

「こんな、いつぱい……」

ナナさんはまた、腕で目を覆つた。今度はちょっと、顔をあげない。

情の厚い人なんだな、と思つた。

キヤブテンがその頭をごしごし撫でて、

「よろしく、西九条さん。

ようこそ、DSCへ。

さつきやつちやつたんだけど……

も一回みんな、自己紹介、しよつか！」

「……ハイ!!」

■ インターバル

「……はーいインターバルやりますよ。」

うつとこはダッシュがショートです。一〇〇m走ればピッチ端から端まで行っちゃいますからねー。一〇秒フルパワー、あとジョグで心拍数九〇回ぐらいまで落として、また一〇秒フルパワー、これを一〇分続けまーす。

まじめにやるとめっちゃ負荷高い運動なんで、1年の子はくれぐれもムリしないようにー！ 自分のペース守つてー！」

「「はいつ！」」

「九〇回は二秒でドキ・ドキ・ドキ三回、だいたいでええよーー！」

「じやあ行こう！」

「「はいつ！！」」

キヤプテンを先頭に走り出す。

「ナナ先輩！ わたしは、何か準備できることありますか！」

「……あ、いや」

足踏みをしながら、ナナ先輩はニタ、と笑つて、

「こつとんはみんなをよー見てて。

これから先発争いとか起きますからね、ケガとか隠す人出てくるかもしね。よく見て、いつもと違う様子とかウチかキヤップテンに教えて欲しい

「はいっ！ やつてみます！」

「みんなの特徴も覚えてくれると嬉しい。特に今日は1年をよー見ててな」「はいっ」

「ほんと……しもたストップウォッチ部室や」

「あつ、ケータイあります！」

「よしよし。九分経つたら『残り一分』出して。一〇分で『一〇分』。だいたいでえーんで

「わかりました！」

「頼んだで！」

トラックを走る列に加わるナナさん。

……見る間に、列は前後にバラけてくる。それぞれのダッショウのスピード、ジョグのスピード、ダッショウとジョグの間隔、インターバル、がバラバラだから。

速い方といえば流乃先輩がバカみたいに速い。特にダッショウは異様なスピードで、まさに光のよう。目にしたことのないスピードだ。

でも、インターバルは長い。

そこで詰めてくるのが、我らが可憐ちゃん。キレのいいダッショウをショートインターバルで次々に重ねるので、いつの間にか流乃先輩の背後に迫つて来る。さすが。あとは蘭先輩が平均速が速いみたい。それに続くのはなんとエレちゃんかも。やっぱり鍛えてるとちょっとブランクあつても違うなあ……：

遅い方ではとびきり、をつけていいのが予想通りもも先輩。ダッショウとジョグの区別があんまりつかない……とまで言うと失礼かな。ただ、ぽつちやりさんによくある「走ることがそもそも苦手」という表情ではない。

愛先輩も、スピードの切り替えに「よいしょ」と予備動作が入つて、イメージと違つて動きが重々しくて効率が悪そう。ただ加速が付けば遅くはない。

まつたく人それぞれで、ダッシュがいいけどインターバル長くて結果的に距離があんまり出ないはなこ先輩みたいなタイプも居れば、ダッシュとジョグの速度差はあまりないけど、ジョグがそもそも速くてかなり走れる胡桃先輩みたいなタイプも居る。マキ先輩はムラがあつて、由美子先輩は逆に同じペースで淡々と……

観察してると、あつという間に九分が経つた。

「……あと一分です！」

大声を出す。それぞれがそれを聞いて、仕上げとばかりにダッシュに切り替えた。

「……一〇分です！」
「あと一〇分!!」

わたしの報告に即・ナナさんが被せた。文句も言わずに続けるみなさん。当のナナさんはトラックを外れてジョグのままこちらに来る。

「ナナー！ サボるナー！」

「作戦会議ですわー！」

マキ先輩が笑いながらツッコんだ。

「……どうして最初から二〇分じゃないんですか？」

「サッカーはいつも平常心やないとあかん。1点奪られて落ち込んでたらほん一〇秒でまた1点奪られてまう。『次なにが起ころかわからへん』という風にしてるんですけど」

「なるほど〜」

「でやつた？ なんか感じたこと、ある？」

「あ、やつぱり、可憐ちゃん速いなあ、つて……」

「せやね。あれはもう別格つちゅーか、全く問題なしやね。もともとストイックな方なんで、ほつといても大丈夫やな」

「……1年生の講評？」

キヤブテンもタツタツとやつてきた。一人共止まらず足踏み。

「ん。可憐やつぱエエな、つて」

「そうだね。文句なし。」

「それより私、エレーナちゃんがかなり走れてるのに驚いた」

「おーそやね、スピードもあるし心肺もなかなかや」

「あ、エレちゃんは少し前まで、フィギュアの選手だつたんですよ」

「なにー！ そーゆーことははよ言えーー！」

「は、はいすいません！」

「いや怒つてないけど。道理での脚ふつといなー思てたんや。それでかいな」

「あの脚力だとちよつとボール扱いに慣れたら、夏前にでもレギュラー十分狙える

ね」

「性格も真面目そうやしなあ。

逆にちーが全然あかん。わはは

「圧倒的に瞬発力型だね。ダッシュの最初だけ抜群だけど、すぐタれるしインター

バル長すぎる」

「も典型的なセンスに頼つて基礎できてないタイプですよ。あれは鍛え甲斐あんでも

「ふふつ、

「そうだね。

あとありすちゃんや明日葉ちゃんも、悪くないよね」

「そう！ いけてるいけてる！ ありすはダッシュへの移行が軽やかやしジョグも速い。身体軽いのが効いてるなあ。スタミナなさそうで平均速どんどん落ちてるけど、まあそれは付けてきやええから」

「明日葉ちゃんは姿勢がいいのよ。腰が上下動しないからあの子サイドバックとか、走り屋に向いてそう」

「手足のフリがやたらスマーズやんね」

「あの、また怒られるかもしれません、ありすちゃんは子供の頃体操のコーチに誉められたセンスの持ち主で」

「へーっ、そうなん？」

「明日葉ちゃんは日舞のお稽古してるそうです」

「日本舞踊！ なるほどね！」

「……ていうか、こつとんあんた……」

「あつ、はい！」

ナナさんは胡散臭げな目で、わたしを見ている。

「みんなとは中学か塾でも一緒やつたん？ ちやうやろ？ 入学式ではじめて知りおうたんやんね、つい何日か前の」

「はい、そうです」

「こないな短時間でチームに引きずり込んで、ほんでそれぞれの過去も暴き出して

「いえ、暴こうとして暴いたわけでは」
「……キヤプテン」

「彼女が一番の補強だつたかもしれないね、ふふつ」

お二人は、笑つてわたしを見る。

「マネージャーはなにより観察が大事。

これやこれ、この客観的な目、第三者の目こそが欲しかつたんやウチらに！」

「そうだね。外から冷静に見ると、現場の目とは全然違うもんね」「うん。

これからもその目でよくみんなを見てください。よろしゅう頼ります」

「はつ、はい！」

「……こらオモロなつてきやがつた。

「メニュー変えよか」

「紅白戦？　いいね」

「人選おまかせ。ハンデで4—5にする？」

「それはつけすぎ。可憐ちゃん居るし五人だとGKがモノを言うし。そうね、遠いポジションやつてもらおつか。足元自慢じゃない方から選んで、フットサルコート、ゴールもポールで狭く」

「高さはウチが審判しよか」

「オフ無し、あとはサッカー」

「せやね、走る距離長なると差がつくしな。
よしそれでいこ。」

「……さて、DSCゴールデンコンビの脚も見せつけときましよかー」「はいな」

二人が走列に戻つていった。

ナナさんはあまり速くない、けど、どこまでも走れる、いや走つてみせる、という貫禄があつた。美緒さんはスピード・回復・スタミナどれもA～EでB+を並べるような感じ。それを涼しい顔で続けてる。ひよつとすると……総合力では一番なのかも？

ハツ。そういうえば一人、わたしと話してゐ間息切らせてなかつた。

……やるう。

と、こういうのを書き留めるメモ・ボードみたいのが要るね。また買いに行かなきや……あ、それからマイ・ストップウォッチも！

——休憩を挟んで、二人組でパス練習、四人サークルでパス回し、個人でドリブル練習……さらに休憩を挟んで、

「ほいでは！　今日は予定を変えて、新入部員歓迎紅白戦を行いたいと思いまーす！」

「わくわくい！」

「えーつ!?」

「先輩方は格の違いを見せつけてボッコボコにしてやつてください。

新入生のみんなは何が何でも喰らいつく、諦めない気持ちを養つてください」

「ウヒヒヒヒ、イツチヨウ、モンデヤルカ」

マキさんがサタンのような笑顔をするけど、キャプテンが笑つて、

「残念マキちゃんはベンチー」

「エーーーッ!?」

「もちろん5対5です。

メンバーは、1年生は五人そのままね。ポジションはみんなで決めてください。

古株のメンバーは、

前衛、蘭ちゃん、ユミ姉さん、
後衛、はなちゃん、胡桃さん、

GK、愛ちゃん」

「ハンデで足元不如意つてこと?」

「フニヨイはひどいわ……事実だけど」

「あはははは……」

流乃さんの容赦無いツッコミにユミ姉さんが苦笑いした。

「個人技あると無理矢理抜けちやうからね。

コートはフットサルサイズ、二〇×四〇です。ゴールも三m幅。高さ一mでナナ
が審判します。オフサイドなしの、スラ禁止ハードタックル禁止。
一五分ハーフか

な。その他サッカールールで。

さ、準備しましようー

「「はーい……」」

「……ど、どうしましよう、い、いきなり実戦だなんて……」

「エレーナ、落ち着いて。負けたつて死ぬつてわけじやないから。
よーし、円陣！」

可憐ちゃん中心に肩を組んで丸くなる。顔を寄せ合って、作戦会議。

「GKもちろんちーな。あたしがその前でボール奪つて展開する。
でまずエレーナは、真ん中敵ゴール前」

「エーッ!?」

「よく聞いて。なにもゴールしろつて意味じやないよ。フットサルで『ピヴォ』つ
て言つて、後ろから来たボールを捌く役。
真ん中構えて、ボールが来たら、別の空いてる誰か探して、パスを出す。それだ
け。もちろん振り向いてシュート撃てればいいけど、たぶんマークされてるから」

「……ハ、ハイ……やつてみます」

「カレ、あんたがそこの方がいーじやんよ」

「まずボール取らないと始まんないから。第一誰も守備しなきゃあんた蜂の巣になつちやう」

「三mだつたら守れそーな氣いすつけどなー」

「ナメちゃダメ。相手D Fばつかだつて言つても、全国レベルだよ?」

「あーい」

「で、ありすと明日葉は、左右に分かれて、ボール運ぶ役。

あたし見て、敵見て、ボールが受けれる位置に動いていく。当然邪魔されるけど、めげずに動く。OK?」

「う、うん!」「はいつ!」

「ここでボールの取り方!」

とにかくボールをしつかり見て。相手見たり脚見たりするとフェイントにひつかかるから。バスの邪魔してるだけで相手の意図は挫けるから、慌てない

「「はいつ」」

「そしてボールを持てたら、空いてる誰かを見つけて、出す。もちろんゴールが見えてたら、バンバンシュート撃つて。外れても気にしない。取られても気にしな

「いい。シューート撃たなきや、点入らないからね！」

「「はい!!」」

「舞い上がつちやうと思うけど、ひとつのみスにガツクリせずに次、次、次と切り替えて」

「了解！」「わかりマシた！」

「負けてあたりまえなんだ、胸借りるつもりで、思いつきりズチ当たろう！」

「「はいっ!!」」

「よおおおおおし止めるぞおおお！」

「そうさ！　あの狭いゴールならGK次第でそう点獲られないから、十分勝負になる。あんたの腕の、見せ所だよ！」
「やつてやるぜ！」

さすがヴェテラン。気持ちの鼓舞がうまい。

そうだ、

「可憐ちゃん！　わたし、なにかできることある!?」

「あー……まずしつかり応援！　声援はいつでも力になるから！」

「うん！」

「それから、よく見てて。なんとなくバランス悪いところとか指摘して」

「わたしにわかるかな！」

「素人目の方がいーんだよ。あいつ動けてないとか、マッチアップ相手が苦手そ
うだとか、直感でいーんだ」

一
ほ
い
!

一
よし
一

じやあ、
気合い入れるよ！

『勝つぞ』のあとに『オウ！』を三回。腹の底から声を弾き出す！音頭はちー！」

「おっしゃあああー

勝つぞ！

「おう！」

「勝つぞ!!」

「おお!!」

「勞あつぞおおお!!

「……見てみい、あの模範的な少女達を。あんたらも円陣組まんでえーんかー」「バッカにしないでよいくらなんでも素人四人に負けますか」

「可憐ちゃんは怖いわよー？」

「D F二人とも、本職」

「というより手加減しなくていいの？ 初日からボロ負けしちやつたらサツカーテー嫌いにならない？」

「ボク、フオワードなかなかできないから楽しみ！」

「……私も、キーパー、おもしろそう……」

「みんなちょっと余裕たっぷりすぎじゃない？ 贠けたらカツコ悪いよ～？」

「負けないって。負けたら土下座でもなんでもしたげるわ」

はなこの啖呵に、美緒とナナが顔を見合させてちょっと噴いた。みんな可憐だけ要注意、と思いこんでる。

まあ確かに、負けるのはありえないけど。でも1点でも獲られたら寝覚め悪いと思ふけどなあ……

イエローのビブス、慣れ親しんだ自分の番号を身にまとう上級生チーム。新入生はピンクのビブスを「どうやつて着るのかな」的に裏表してて、初々しい。
そうね、背番号も決めてあげないとね。

さて若者たち、先輩方に冷や汗をどれぐらい搔かせられるか。

——。ピーッ！

ナナ審判の笛で、試合が始まった。

「あ

と声を出す暇もない。

ユミ姉さんがはなこ先輩にバック・パス、それを取りに行つた明日葉ちゃんを小馬鹿にするかのようにふわり、その頭を超えるロビング・バス。蘭先輩が拾つて豪快に走つて、可憐ちゃんがマークに走る。ついた、と思つたら即・真横に出した。そこへ駆け込むユミ姉さん。

蘭先輩のシュートを警戒して左に詰めてた千里ちゃんの左脇を、ユミ姉さんのシートが悠々と抜く。

わずか数秒か十数秒かで、1点。

「へーイ！」 「ナイツシュー！」

涼しい顔でハイタッチを繰り返して位置に戻る先輩方。
……やっぱ凄い。なんだろ、キレというか動きの質が、さつきまでと比べても
全然違う。

まるでコートや試合や敵チームの存在が、本能を呼び覚ましたかのよう。

「……すまんッ!!」

「ドンマイドンマイ。チータ、あたしの切つてないコース守つて」
「わかつた！」

「明日葉！ 間合い感じて、邪魔できる間合い」

「はいっ！」

「あります！ いまの下がつてユミ姉さんの邪魔にくる！」

「はいっ！」

「エレもハナさんに入つた時に追つかけたらモアベターだつた」

「はいっ！」

「よし！ 取り返すぞ！」

「はいっ !!」

今度はこつちのキックオフ、エレちゃんがまず可憐ちゃんに返す。殺到する蘭先輩とユミ姉さん。

可憐ちゃんはキュツ、とボールを止めると、つい、と背を伸ばす。二人が突つ込み速度を落と……した瞬間、キュキュツ、とステップを踏んだ。置き去りにした。

「スゲエッ !!」

マキさんが叫んだ。

一人で二人抜いたつてことは、こつち三人に向こうは二人！

はなこ先輩が中央のエレちゃんに付く、のを見た瞬間、空いた明日葉ちゃんにパス。明日葉ちゃんはぎこちないながら前ヘドリブル。なんといつても眼前に誰もない。

「へイ！」

可憐ちゃんが瞬く間に駆け上がり、中央エレちゃんの前はなこ先輩の前で手を挙げる。明日葉ちゃんはなんとかかんとか、バスを出した。

ザクッ！

と音がするかのようないンターセプト。

可憐ちゃんの目前で、どこから湧いてきたのか胡桃さんが奪つた。
ぼーん……

対角・コート右奥、ユミ姉さんめがけ蹴つ飛ばす。

「Get Back————!!」

耳を切るような大声で叫んで自分も自陣へダッシュする可憐ちゃん。

が、受けたユミ姉さんはすぐに中央に折り返す。蘭さんが取る。千里ちゃんと、
1対1。

「ダ———ツ !!」

そのまま撃つた！

力任せのシュートが千里ちゃんを襲う。両腕ブロック、眼前で跳ね返す千里ちゃん。しかしそれを拾つたのは、駆け上がつた……はなこ先輩。

衝撃で身動き取れない千里ちゃんの左脚のほんのすぐ横を、グラウンドー・シュ

ートが綺麗に抜けていった。

2点目。

抜けていつたあと、思い出したようにペタン、と座り込む千里ちゃん。泉が湧き出るような連続攻撃。ありすちゃんも明日葉ちゃんもエレちゃんも、悔しいとか残念とかよりただ、呆然としてる。

……わたし達は、とんでもないところに紛れ込んだんじゃないだろうか。

「……タイムアウトタイムアウト！」

「えー？ まええか、タイムー！」

可憐ちゃんが両手で「T」を作つて、ナナさんにアピールした。もちろん、サッカーにはない。

「……みんな、あたしが悪かつた。こりや無理だ。マンツーやろう」「マンツー？ つてなんですか？」

「マン・ツー・マン。一人が一人に付くの。

ありす、胡桃。エレ、はなこ。明日葉、蘭。あたしがユミ姉。

OK?』

「うん!」「はいっ!」「了解!』

「とにかく相手の行動を邪魔しよう。基本それで。で、イーブンボール出たらできるだけあたしに。あとはあたしが独りで何とかする。』

先輩達初心者相手に罠とか掛けてくんだもん、ひどいよ』

「罠……つて、やっぱり明日葉ちゃんに持たせたこと?』

「そそ。あれはなこさん行つても取れるんだよ。でもその状況だつたらあたし上がつてないでしょ?』

「なるほど……』

「まつたく容赦無いんだから……こつちもガツガツ行くよ! とにかく相手にへばりついて、自由奪つて!』

「うん!!』

「あとちー、GKはすぐ動けすぐ動け! 今のあんたなら捕れてたぞ!』

「悪いッ!』

「よし! 行こう!!』

「はいっ!!』

再開。

さつそく各自が目標に飛んでいく。可憐ちゃんがボールを持つて、ユミ姉さんを引き付けながら空きを探す。

これは効いた。

やることがハッキリしたので、みんなの動きに躍動感がでてきた。素人でも「邪魔する」と割り切ればそう簡単に置き去りにできるものじやない。で、バスを出すと、そこにもまた誰か付いてる。

ボールが行つたり来たり、しだした。

マッチアップも悪くない。ありすちゃんのちよこちよこした動きにコンパスの大きい胡桃さんは多少窮屈そうだし、直線的な動きの蘭先輩には明日葉ちゃんが柳腰でまとわりつく。エレちゃんは自慢の脚力で、すばしつこいはなこ先輩に十分対応できてる。

「……おいおいおい、この程度で膠着してたらあかんのんちやうかー!?」

ナナさんが煽る。

ムキになつたのか、蘭さんがちよつと無理目にユミ姉さん宛のバスを出した。
チャンス！

可憐ちゃんが飛び込んで、それをインターセプト。持ち上がる……
と見せかけて最前線にバス！

可憐ちゃんがドリブると思つて前に出かかつたはなこ先輩、エレちゃんのマーク
が外れてる。

「ヘッドオ！」

可憐ちゃんの指示に、エレちゃん、精一杯ジャンプ、そのボールをヘディングで、
なんとかかんとかはたき落とす。そこへ。

シュンッ！

いつのまにか左サイドからゴール前へ入ってきてた、ありすちゃん。

ダイレクト、左足を右から左へ払うように蹴る。その足首にボールを載せて。
ぴゅんっ、

と音がして、キーパー愛先輩の頭上を、抜けていった。反応はない。できない。

「「……」」

「……ナナア！　いまの！」

「あ、えー……ノーゴール！　ちよい高い！」

「つしやあ！　ゴールキックゴールキック！」

「……今見たキャプテン？」

「あれ……え、あれ……なに？」

「いやあれウチでもできんで。走りながら脚を横に振る？　胴の前で？　へ？」

「それもだけどアウトサイドのヴァオレーでのスピードのシユートにできる？　よ
くてふわっとループじゃない？」

「なにいまの」

「ありーす！ エレー！」
可憐ちゃんはガツツボーズを作つて、その調子、と讃える。二人も真剣な表情で頷く。且元に力が入つてきた。

そのワンプレーで、試合が落ち着いてきた。

「足元不如意」は言い過ぎだけど、先輩チームの前二人は確かに、一対一でバンバン抜いていくタイプじゃない。

ということは、状況を打破するのにもう一人、後ろから出していく必要がある。

そうすればそこが空く。

残つて待ち構えてもいいし、上がる先輩についていつて、誰かのために「すきま」を開けておくのもいい。

そこを可憐ちゃんが正確に突く。

もちろん押されてるしボール持たれてるし回されてるし、絶対的に向こうが強いんだけど、なんとかギリギリ試合にはなつてる。

……あつ、また獲つた！

可憐ちゃんが対面のユミ姉さんからボールを奪うと、わずかなタメを作る。

その瞬間、エレちゃん、ありすちゃん、明日葉ちゃんがマーク相手を離してフリーになろうと試みる。

可憐ちゃんの選択は、前へ出てユミ姉さんと挟み込んでボールを奪おうとするはなこ先輩、の後ろを走る、エレちゃん。に、パス……

が、通らない。そのボールをカッ攫つたのは、前へ出た愛先輩の足。そうか、G Kも足を使えば前へ出ても……
まずい、また罠だ！

愛先輩は即座にフリーのはなこ先輩にバス、可憐ちゃんは一転、攻める立場から守る立場に。その背後を、ユミ姉さんが左サイドに抜けて、バスを貰おうとする。重心をそちらに移し、はなこ先輩の突進にもユミ姉さんへのバスにも対応できる姿勢を取つた瞬間、

右サイドから突つ込んでくる蘭先輩、にバス、明日葉ちゃん振り切られて、フリー。

「うおおおおお！」

咆哮一発、またあの強烈なストレートが千里ちゃんを襲う！

バンッ !!

だけど今度は弾き方が違つた。両手のグーを突き上げるようにして、その砲弾を真上に弾いた。高く高く舞い上がるボール。

そして誰よりも早く落下点に入つて誰よりも高く跳んでそのボールを手にしたのは、もちろん、千里ちゃん。

両腕で大切に抱え込む。

「チータ！ ナイキー（NiceKeeper）～」

「……」

可憐ちゃんの指差しに、あたりまえだろ？と言わんばかりの真剣な表情で、ボールを抱えたままそれぞれが持ち場に戻るのを待つ千里ちゃん。あれが本物の「ドヤ

「顔」つてヤツだね。

「……やっぱあの子はありますなあ」

「いいねいいね」

「あれ蘭の悪い癖じやん、シユートでGK狙つちやうの」

「いや、それで一度成功したのだから責められない。むしろ千里の学習能力を褒めるべきだ」

「はなちゃんあんまりああいう引っ掛けやらない方がいいと思うんだけどなあ……しつペ返し食らつちやうよう……」

「なんかデモイイヨー、イイカンジー！」

やんややんや。ベンチは大盛り上がり。

ということはつまり、先輩方から見てもそこそこ戦いになつてる、つてことだろう。

将棋で言えば、可憐ちゃんが飛車角一緒になつたような駒で、あとは歩が三枚。向こうは金が四枚。だからやりようによつては……わたしはケータイを見た。残り二分。

……あつ！ そうだ！

「見てろ」と言われたけど、わたしは駆け出した。マネージャーたるために。

——。ピ――――ーッ……

「……前半終了ーッ！ ハーフタイム五分！」

ナナの声に、2、3年連合が渋い顔で引き上げる。

「ホラホラどしたどしたあ？」

「インターバルで張り切り過ぎた！」

「条件一緒だつつーの。向こうのが辛いわ
るーうつさい！」

流乃の逆撫でヤジに、はなこが半ギレ半笑いで返す。確かに五分ではカツコ悪い。
ユミ姉を中心に打開策を話し合う。

美緒、主将、「距離感悪いよ、相手に合わせて開きすぎ」とでも口を出したかつた、が、我慢した。それもハンディ。ナナが身を摺り寄せて、小声。

「……サッカーツて、ホンマ心理スポーツやなあ」

「そうだね。完全に受け身になつてる」

「まともにやつてりや負けるはずないのに……現にリードしてるやんか」

「自分を保つ、とか取り戻す、つて、難しいんだよね……ほら、私達も一回戦で」「あー……トラウマや……あんときや浮き足が最後まで地に着きませんでしたなあ

……
「うん。

……でもそれを経験してるわけだから。自分たちで乗り切らないと

「主将は厳しいです」

「みんなだよ。ほら、みんなニヤニヤして黙つてるじゃない」

「ホンマ人が悪いわ。みんな

「ナナもね」

「……おまたせ——!!」

「こつとんどこ行つてたの！ ちゃんと観てて、つて」

「これ！ 水分補給！」

「うわおありがてえー！」 「あつ、いただきます！」 「ありがとうございますー！」

「スペースイーバ!!」

「前言撤回！ さつすが頼れるマネージャー！」

「えつへん！ それはいいけど、ちょっとみんな耳貸して。わたし思うんだけど、

……

「ふんふん、ふん……」

……

「……あれつ？ こつちにはペットボトル無いの？ キンキンに冷えたス。ポーツドリンクは無いの？」

「いやあ、あの子もマネージャーの才能あるねえ」

「……ハンデ……」

「くーちゃん、このぐらい我慢しないと。上級生なんだから。あつ、私の人肌ネクターならあるよ

「いらない。」

「……両方無いと氣にもならないのに向こうにあるとすつごい欲しい」

「ハナそんなこと言つてる暇あつたらウオーターケーラーへ走りやいーじやん」「流乃やつてないから言えんのよ。きやつら結構走んのよ。エレアタシより走るかも」

「明日葉もしつこいし……くそ、次はぶち破つてやる！」

それ悪い癖よ、という指摘を呑み込む流乃。あまり動いてないGK愛さえ、胸元をパタパタやつて舌を出している。緊張感があるのでだろう。

それを見ると、春先のポワポワ加減が覚めていく気がした。

私達は、なんだかんだ言つても、たかがこの程度じゃない。経験者一人入りの超素人四人に引つ搔き回されて汗搔いちゃうような。

もし本気で今年も全国とか言うのなら、もつと「やるときはやる」って感じで、取り組まないとね……

向こうでは1年が元気に円陣組んでる。こつちの五人は幾分疲れた顔で、俯き加減に黙つて笛を待つてゐる。これじやどつちが勝つてるか、わかんない。美緒とナナはコソコソ呟きあつてる。たぶんどつちかがあそこに居れば、みんな

を鼓舞し気合を入れ、勢いを付けただろう。

「……メンタルつて、だいじよね」

「というようなことが、外からだとよく見えるな」

「やつぱり人数居ると違うよねー。これだけでもありがたいよねー」「アタシ、自分がやってないのでスンゲー楽しーよ！」

『……きあもつと追い詰めろ』

流乃は本質的に小イジワルである。ニヤニヤしそうになるので、噛み殺す。

——。ピーッ……

後半開始を告げる笛が鳴った。

「……おつ、撻破り」

「おとなげないなあ。ナナちゃん？」

「……まあルールで決められてるわけやないんで……」

先輩チームは後衛・胡桃さんとはなこさんの前にユミ姉さんを置いて、その前に蘭さんを配置してきた。真ん中に運動量のあるユミ姉さんで、攻守で主導権を握るつもりかな。

人選と配置もハンデの一部だったので、グレーといえばグレー、本気といえば本気。

「むしろ守備三枚がおとなげないかなあ」

「それは守備の人ばかりだからしようがないよ。誰しも得意なことがしたいはず」

「攻撃せな点入りませんよ、サッカーは」

「ふふふ」

でも逆にチャンスだ、とわたしは思った。

こちらの作戦はこう、つまり「残りの三人で隙間と時間とを作つて、可憐ちゃんにシューートを撃たせる」。

可憐ちゃんは向こうコートならどこからでも撃てるし、撃てば枠に飛ぶし、飛べば愛さんはGKとしては素人なので、なにが起ころかわからない。

この作戦には、むしろ向こう側に三人集まってくれた方が、やりやすい……かも？

「姉貴！ 明日葉！ 明日葉左！ くー！ ここ見てて！」

……あ、ちがう、ダメかも。

はなこさんが指示を飛ばして、全員がそれに従う。こつちの選手がマンツーマンから外れて隙を狙うと、すぐ別の誰かが飛んできてカバーされる。これつて……

「しかもゾーンですな
おとなげないなあ……」

鉄壁、というのはこのことを言うのだろう。さつきまでなら「なんとか勝負になる」と思えたのに、いまはもう、ベルリンの壁に生卵をぶつけてるみたい。

「どうすればいいの？」つて感じ。

……ボールが横に左右する。
ベッタリと淀む空気。

チラ、とナナさんが時計を見たのでわたしも見る。

わ、もう五分経つてる!?

これ続けられたら間違いなく負ける。しかも先輩方「これなら」的自信たっぷり。

……考えろ、考えるんだこつとん。

Don't feel, THINK!!

相手の強みはいい、弱みは……

そういうえば、攻撃の力はぐつと減った。とにかくユミ姉さんはボール奪るのは抜群に上手いんだけど運ぶのはイマイチで、特に可憐ちゃんが付くと嫌がるようになに誰かに渡す。でも前には運ばせないようにしてるので、後ろのどちらかに渡つて……と、右往左往するだけ。
ということは……

可憐ちゃんがボールを持てた。
一か八かだ！

「……明日葉ちゃん！ 前へっ！」

蘭さんを捨ててゴール前へ上がり。

わたしの指示に明日葉ちゃんは弾かれたようにダッシュした。

可憐ちゃんがその走る脚直前へていねいに真っ直ぐなパスを送つた。なにもしな

くてもそのままドリブルになるような。

もちろんフリー。

「……シユ——ートオオオ——！」

わたしが叫ぶと同時に、明日葉ちゃんが長い脚を振り抜いた。

ズザアツ！

バインツ！

ゴール前はなこさんのスライディングが飛んだ。右足にボールを当ててクリア。

「反則だつて！」

「アドバンテージ！」

さすがナナさん審判、コート全体がよく見えた。

そのこぼれ球に真っ先に辿り着いたのは、我らがエースストライカー。

ボールを止めて、大きく足を振りかぶつて、あ、目前に胡桃さんが、でも撃つ！

シュンツ！

何度見ても見えない可憐ちゃんの振り脚。ボールはいつの間にか、ゴールラインの真ん中を割っていた。

間に二人人間が居るにもかかわらず、つまり、胡桃さんの出した脚の開いた股の間と、キーパー愛さんの股の間、ふたつ抜いた、らしい。

「……いいいやつたああああああああ！！」

「よし！」

拳を握る可憐ちゃんに、千里ちゃんが絶叫と共に飛びついて抱きついた。笑顔でみんな集まる。わたしも飛んで行きたいぐらい。
1点返した。1点返した。

「……ヒヤーーッ……」

コリヤアタシ、クビだネ

「なにあれ。もうサッカーヒヤないじやない、じやない？」

「すごいねえ。すごいねえ」

「あれこそ反則じやん……」

「あ、そや。

「はなー！ イエロー！ 危ないから滑んなー！」

「反射で脚出たのよ。DFの本能」

「わかつてるけどやつたあきません」

「ようしももう1点行くぞー！」

「おおーっ !!」

わたしも声と拳を挙げる。

「……こつとん！ いまの指示最高！」

可憐ちゃんからウインクとサムアップが飛んできた。

舞い上がるほど嬉しい。

その向こうで、明日葉ちゃんが両手を膝に、深々とお辞儀した。
場に似つかわしくなかつたけどなんとなくおかしくて、お辞儀で返す。
頬が真っ赤に紅潮してる。きっとわたしもそなんだろう。

——だけどその一発が、先輩たちの闘志に火を点けた。

「スイッチが入った」としか言いようがない。もう表情から出足からまるで違うし、

ガズンツ!!

「ああっ!!」

大柄なエレちゃんが、小柄なユミ姉さんに弾き飛ばされた。

「骨と骨とがぶつかり合う」という言葉が大袈裟じやないような、重い鈍い音を響かせて。

ボールを足先でコチヨコチヨ取りに行くのではなく、ボールと相手の間に身体を腰からネジ込んで、強奪する、つて感じ。

もちろんそんな訓練を受けてない可憐ちゃん以外の三人は、いつも簡単に奪われ

る。可憐ちゃんでさえ、寄せられると自由が効かない。それも彼女には一人目、三人目がすぐ飛んでくる。

ガフツ！

「あはつ！？」

今度は明日葉ちゃんが犠牲になつた。蘭さんが真正面からボールごと明日葉ちゃんの身体にぶち当たつていくと、彼女は3／4回転して尻餅をついた。もはや格闘技だつた。

「……ちょっとやりすぎだよ……きやぷてえん」

「……」

「いや、これも勉強、です」

そもそも先輩は根が優しい人なのだろう。主将は眉を寄せて唇真一文字腕組み、代わつてナナさんが呟いた。

確かに、本番はこのぐらい厳しいのだろう。相手が新入生だからって手加減してくれるわけじゃない。

ズザツ……ドサツ！

またエレちゃんが今度は胡桃さんに倒された。並行してのボール争いから、腕を胸の前に入れられて、それを思い切り後ろに引く。

胡桃さんの細腕が、エレちゃんの分厚い胸をいとも簡単に御した。なんて上半身の力なんだろう。

「……ほとんど反則だよ」

「……」「……」

「……でも、わたし達も負けてない。

こちら陣内奥に斬り込んだ胡桃さんが、見渡してパス先を探した、その瞬間その足元に飛び込んでボールを奪つたのは……エレちゃんだった。
すぐ立つてすぐ追う。

泣き言も泣き顔も見せずに。

さすがアスリーテス！

「……がんばれーつ !!」

自然に声が出た。

ここは頑張るしかない。

「がんばれ」 つてわたしあまり好きじやないけど、ここは、「がんばる」しかない。

おとなしくて控えめな工レちゃんでさえ頑張る姿をして、こつちのハートにも火が点いた。

競り負けて当たり前、つて姿勢が無くなつて、負けても追う、またチャレンジする、すこしでも遅らせる、自由を奪う。

四人に呼応するかのよう、千里ちゃんもシユートの雨を転げ回つて止めまくる。

またも蘭さんがシユート態勢、そこへ飛び込む明日葉ちゃん。身体を当てるも無理矢理シユートに行く。でもそのぶんだけ、力が弱かつた。千里ちゃん難なくキヤ

ツチ。

「……かれーん!!」

あつ、トリックプレー！

顔と叫びは左に展開した可憐ちゃんを日指して いたけど、投げたボールはまっすぐ、フリーのありすちゃんに向かつた。

PK勝負の時、可憐ちゃんにやられたアレだ。

ボールを受ける、真正面を突き進む。

立ちはだかるのは、胡桃さん。

ポン、と左斜め前にパスを出すと、胡桃さんの右を回るありすちゃん。左右に別れたターゲットに胡桃さんが一瞬、迷つた。

と、ボールはそこで、まるで魔法のようにきゅつ

と右後ろへバウンドを変える。

左足でそれを迎え入れるありすちゃん、さらに突進を続……

ズジャアツーッ……

ビ———ツ!!

「ペナルティ!!」

「アアヽヽツ……」「……やつちやつた……」「ほらヽヽヽ！」「ヤバイな、とは思つてたのよ……」

抜かれた胡桃さんが思わず背後からビブスを掴んで、ありすちゃんが「すつ転ぶ」という表現そのままに倒れた。ありすちゃんはまるで子猫みたいで、空気のよう体が無いかのように、ちょっととした衝撃で舞い上がる。

まさか胡桃さんもそのプレーでこんな派手なりアクションが来るとは思つてなかつたのだろう、一瞬呆然としたあと、慌てたように倒れたありすちゃんに両手を差し伸べた。

「くーちゃん黄色ー！　ホンマは決定機阻害やからレッドやで！」

目の前でレモンを絞られた猫のような顔をして、胡桃さんが片手を擧げる。引き上げられたありすちゃんは、につこり笑つた。

ペナルティスポットに向かう、可憐ちゃん。

あらためて一対一で対峙すると幅三mつてホントに狭いんだけど……

ピ——ーッ……

——シュンツ！
パン！

読み通り左、けどその愛さんのグローブをまるでそこに何も無いかのように弾いて、可憐ちゃんのPKはゴールに吸い込まれた。

同点。同点だ。

「……な？ 勉強になつたやろ？」

「熱い三人じやなくてくーちゃんが引つ掛かつたのが風向き、だね」「これはもう一発ありますよ」

ナナさん美緒さんの言葉に、わたしは時計を見た。あと一分。

「……あと一ふーーーん！」

わたしの声に、笑顔満開で手に手を取つてた五人の表情が、変わつた。こうなつたら、もう！

「もう1点、行くよ!!」

「「オオーーーーッ!!」」

なんでもそうだと思うけど、守ろうとしたら、なかなか守れない。
「負けない」つて戦い方は人間なかなか、できない。「勝つ」と思うからこそ、力
が出る。

「負けると洒落にならないわ。あと一分守り切るよ！」
「オウ！」　「はい」　「了解！」　「ん！」

だからユミ姉さん、それはダメだと思います……
なんて偉そうなことを思つてしまいまし・た！　ごめんなさい！

「……ありすちゃんの今のバックスピン、狙つてやつたのかな」
「狙つてたら経験詐称や。まぐれやろ。それよりコケ方が芸術的すぎる」
「FKPK取り放題つて感じだつたね」

わたしはお二人とは違う感想だつた。
たぶんありすちゃんは狙つてやつた。

ただ、こうバックスピンを掛けるとこんな風にボールが動くから……という理屈
はたぶんついてない。コケ方の方も派手に見せようとしたわけじやなく、それこそ
逆さまに落とされた猫のように、衝撃を吸収するために自然に出た彼女なりのやり
方なのだろう。つまり小難しい専門用語を使うと……

天才。

これを利用しない手はない。
でも、どうやつて？

蘭先輩のバックパスで試合が再開した。もう前へ出てこない。三人が並んでガツチリゴール前、蘭先輩だけがちょっと前。ボールを左右に回して、時間を稼ぐ。もちろん果敢にボールを奪りに行くみんな。

……が、それがまたも罠。

前に突つかかつていったエレちゃんを外したはなこさんが、高速ドリブルで前へ掛ける。同時に胡桃さん、ユミ姉さんも守りを捨ててダッシュ開始。

一発で切り替わった攻守に、エレちゃん、ありすちゃん、明日葉ちゃんがもう対応できない。インターバルで使つた足腰が今頃効いてきて、ターンもままならない。

衝撃波のように押し寄せる四人。可憐ちゃん一人ではとても捌ききれない。

ユミ先輩のあの言葉は、この罠を仕掛ける、という合図だつたのかも！
きやーわたしアサハカー！！

左サイドのはなこさんから、中央のユミ姉さんへ。可憐ちゃん、他に致し方なく
間合いを詰める。もちろん右サイドの蘭さんへパス、蘭さんフリー。

宿敵・蘭さんのマツハシュートに身構える千里ちゃん。

でも撃たない、持つて千里ちゃんへと突っ込む蘭さん、突っ込む、突
っ込……

パスだ！！

手練のキー。パーなら動きの自由度を確保してて、前へ出て取れたかもしれない。
でも千里ちゃんは、全力で防御体制だったので、一瞬、動けない。

左からはなこ先輩が突っ込んで来て、右脚振りかぶつてシュートを無人のゴール
左手へ。

ああ、終わつ……

「……んなら———ツ !!」

らなかつた。

ちーちゃん必殺の背面跳び、頭、というより顔面を、そのシューートに差し出した。
ごいん！……

変な音がして、ボールは高く舞い上がつた。ちょうどたまたま、いや、千里ちゃんの狙いどおり、はなこさんの後ろでフリーの、エレちゃん。

「ハイツ！」

華麗なジャンプ一発、空中で身体をひねつて、ヘッドで落とす方向に、可憐ちゃん。

わたしは慌てて、その先を見た。叫んだ。

「ひだり———つ !!!」

ありすちゃんが早くも敵陣左奥に帰っていた。明日葉ちゃんはまだ自陣。だから。可憐ちゃんはわたしを信じてくれた。そちらを見もせずに、パスを出す。

ふわり……

優しい浮き球パスが、フリーのありすちゃんに渡った。胸でそれを受ける。ふわ
り、ボールが舞う。それを……

ダイレクト!!

シュートが愛さんを襲つた。まさかゼロ角度から撃つてくるとは思わない愛さんは、斜め上空から巻き込んでくるそれを、懸命に身体を伸ばし、左手を伸ばして……

掻き出した。

こぼれ球。

そこに殺到する、可憐ちゃん。大きく振りかぶつて倒れた愛さんのわざか上空めがけ……

もらつた!!

ボフンツ!!

蘭さんだ。

身体をシューート真正面大の字に張つて、鳩尾にモロ。

くの字に折れてスローモーションで倒れる蘭さん、ボールはコロコロ転がつてゆく、態勢を崩したシユーターが立ち直ると、キーパーが立ち上がりつてボールに向かうのと、競争……

に、割つて入つたのが、

17
番。

「……ど――――ん!」

幼子のような掛け声ひとつ、明日葉ちゃんの右脚が振り抜かれた。
ボールに向かつて前掛かつてた愛さんの、顔のすぐ左横を、通過した。

愛さんの長い髪が、ばさつ、と吹き上げられた。
それが誰にでも一目瞭然、高さの、証拠になる。

「ピ―――――ツ……
ゴー――ル・インツ!!」

ナナさんがなんだか、スーパーヒーローみたいに腕を回したり伸ばしたりして、
叫んだ。

わたし達は呆然と、先輩方も同じように、ゴールの遙か後方に転がつていったボ
ールを、見つめていた。

ピツ・ピツ・ピ――――――ツ……

「そして試合つ・終――了――――!!

3 対 2!

ウォン・バイ・ルウウキイイイズ!!

審判の大音声に、目をパチクリさせてたわたし達が、正氣に戻った。

いやあああああああああああああああああああああああああああああああ!!

ちーちゃんが可憐ちゃんに駆け寄つた。可憐ちゃんは殊勲の明日葉ちゃんに駆け寄り、明日葉ちゃんは待ち伏せを成功させたありすちゃんに駆け寄り、ありすちゃんはボールを奪つたエレちゃんに駆け寄り、なんだかみんなでぐるぐる回つて……わたしの方へ。

わたしもその中に入つて、いつか六人で肩を組んで、ぐるぐる回つて、ぎやーとかわーとかやーとかあーとか、叫んでいた。

エレちゃんが途中からビヨビヨ泣き出した。彼女は泣き虫だつた。でもそれに釣られてわたし達も涙目に、なつた。

カアツコ悪うう

「流乃。我々も同じ目に遭つてたかもしけんぞ」「これマズイよ。何人リストラされるかわからんネー」「…………最近の子は、発育がいいねえ…………」

「どうしますキャプテン？」

「まさかこんなことになるとは、さすがに思つてなかつたよ……」

「任せよつか。みんなに」

「相変わらずズルおまんなあ」

「ナナもね」

なんかもう顔ぐしやぐしやにしてみんなで肩抱き合つてると、ユミ姉さんが來た。あつ、そうだ、勝者も敗者も、礼を失してはいけない。

でも振り向いたわたし達に差し伸べられたのは、握手の手ではなかつた。

「……いまみんなで話したんだけど」

ユミ姉さんの顔は、ものすごく怖かつた。ユミ姉さんの後ろに並ぶ四人の先輩も、眉間に皺を寄せ唇をキッと結んで、こちらを睨む。

な、なにか怒られるような非紳士的なプレーがあつたのだろうか……

「……もう一五分、やつてくれませんか、いえ、やつてください！」

「「おねがいします！」」

「「えつ、ええーーつ!?」」

わたし達がオロオロしていると、五人の先輩たちは一齊に地面に手をついて、
「「……おねがいします !!」」

泣きの土下座と来たもんだ。

……つて!!

「せ、先輩止めてくださいそんなの！」

「そ、そうですあたしらたまたまで！」

可憐ちゃんとちーちゃんが狼狽えてユミ姉さんの腕を取つて引き起こそうとする。
わたしは、キヤプテンとナナさんを見た。

……×、出してる。

キヤプテンは指で小さく、ナナさんは頭の上両腕で大きく。ニッコリ笑つて。あ、

六人とも……

「……あつ、あの先輩方、おき、お気持ちは嬉しいですしお応えしたいのですが、わたし達超初心者で」

キツ、と見上げる眼力あるユミ姉さん。

初心者なのに勝つたって言いたいの!?

違います!

「あの、もうヘトヘトで、一步も動けませんから、勝負になりません」「ああーもうダメだあー！ 動けねーーー！」

ち一ちゃんが意を汲んで、へたり込んで這いつくばつた。それを見て慌てて座り込む、明日葉ちゃんありすちゃんエレちゃん。

「……また、こんど、ぜひ、お願ひします」「でも！」

「……先輩。

きょうはあたし達に、想い出、ください」

可憐ちゃんの表現が、詩的だつた。

そう言われば、さしものユミ姉さんも、突つ張り切れない。お顔を苦笑いと泣きの混ざったようなのにして、

子供の駄々つ子のように両拳を上下させた。その後ろで四人が、緊張の糸が切れたように倒れこんだり、へしやげたり、寝転がつたり。

それを見て可憐ちゃんが、ぺたん、座った。

たぶんこの一〇人の中でも一番消耗したのは、彼女。

「……おつかれさま、可憐ちゃん」

「……ナイスコーチ、こつとん。

……あたし、人生でいちばん、つかれた

「ふふふ……おつかれさま。

カツコよかつたよ」

「なんか妙な自信が湧いてきたよ。

……やつてける、つて

「もちろん、だよ」

なにがもちろんかわからないんだけど、とにかく、可憐ちゃんの思つてることを、
肯定してあげたかった。

ナナさんが、皆さんがあつてきた。

笑つてた。

流乃さんがはなこさんにイヤミを言つて、忍様が愛さんの肩を叩いて、もも先輩
が蘭先輩のおなかをさすつて、マキさんが胡桃さんの頭をゴシゴシ撫でて、キヤブ
テンがユミ姉さんの両手を引いて、起こした。

「両チームともナイス・ゲームでした！」

ほなこれからこの記念すべきシーズン初練習の仕上げに……全員グラウンド二〇
周!!』

「ええ———つ！？」

「ジョーダンです」

面白く、なあーーーーーーーーーーーい !!

はなこさんのヤケクソ絶叫に、思わず噴きだした。みんなそつだつた。

わたし達は、笑つた。

笑い出すと、なぜか止まらなかつた。

汗と涙と笑いとで、なんだか全身が、沸き返つてゐみたいだつた。

「生きてる」って感じ。

こんな感覚、はじめて。

やつてける、つていうか……

やつてこう、と、思つた。

「夢」なんて、そこら中に転がってる。
ただわたしはそれを、見つけられなかつた、
だけ。

「……じゃあね、新入生歓迎ぱーちーつてことで、これから『エスパワーラー』！」

「あいや、ちょい待つて」

ももさんの雄叫びはどこかのお店の名前だろうか。ナナさんが止めた。

「いや、ホンマはウチもこの工工流れのまま、新歓コンパと行きたいとこやねんけど

「実は次の週の日曜、シーズン初練習試合を組んでるの。新入生歓迎会はそのあとやろうかな、つて計画してて……」

「ペーティなんか何度やつてもいいじゃーん」

「ふふふ、まあそうなんだけど、今日いまこれから一七人押しかけたら、たぶん『エスپ』潰れちやうよ」

「……あたし今五〇イケる気がする」

はなこさんが猫背敷睨みで呻いた。

「五〇つて、なんですか？」

「ケーキバイキング。『エス・ポ』のケーキすつごく美味しいの！　おはなちゃん止めるまで食べ続けるんだよ～？」

「お～、いいですねー」

「てか五〇つて人間じやない」

「また連れて行つてあげるよ～。

じや今日は3年でいこつか。ユーミちゃんクルミちゃん慰め隊！」

「いらないわよそんなお情け！！」

「私、ちよつと要る。」

「あはははは……」

「芝生の上でピクニック気分でお弁当もつていきますので、楽しみにしてください

い
「「はーい」」

「じゃあ、いいかな。

本日これにて解散！

きょうも一日、ありがとうございました!!」

「ありがとうございました〜〜〜!!!」

みんなで礼をした。

ほとんどこういう大勢でひとつのことをする経験の無かつたわたしには、新鮮だ
つた。

「ほな2年は『山嵐』！」

「えー、いつつもあそこじやん……」

「あつ、せやな、今日は三人の行きたいところがええかな。はい、おはな」

「新しくオープンしたフレンチ・カフェがあるのよ。『オランジエリ』つてつたか
な？」モールの手前、道路側

〔蘭吉〕

「『山嵐』ー！」

〔愛姫〕

「『山嵐』……」

「はいラーメンに決定ー！」

「どうせそんなことだろうと思つたわ……はいはい行くわよ嫌いじやないし」

「……みなさん定宿があるんだな」

「いいなあ。わたし達も欲しいよね」

「あそこでいいんじゃない？『エンゼル・ドーナツ』」

「あたしもあそこでいいと思うけど、なんか今はドーナツでお茶つてよりもつと、
ケーキばくばくとか、ラーメンがつづりとか、テンション上がる感じがいいなあ」
「おう、そしたらあれ行こうぜ、懸案の、カ・ラ・オ・ケ！」

「あーそだね、それもいいかも」

「カラオケ……」

「行つてみたい！ ですー！」

「あつ、明日葉ちゃんいかにも初めてつぱい！」

「もちろんですー！」

「高校生になつたら、ぜひ一度行つてみたいと思つていましたー！」
「じゃあまた漆原さんをオロオロさせますか！」

「あんまり歌える歌ないんだけど、いい?」

「またありますそんなこと言うー。こーゆーヤツに限つて童謡とか古いアニメとか歌つて注目持つてくんだよな!」

「アニメはあたしに任せろ」

「可憐目が怖いよ。あんまマニアックなのは勘弁してくれよな」

「大丈夫。初心者向けにミッチ縛り」

「もうわからんねーよ。

エレはどう?」

「ハイ、好きデスよ。家族でよく行きマス」

「おつ、やっぱロシアの歌とか?」

「母はそうですけど、私達は時代劇とか、演歌デス」

「マジで!?」

「なんかクラシックとか聴いてそうなのに」

「そういうのは練習でさんざん聴いたので……『甘えん坊将軍』とか、いいデス

ね

「ケンさんか……渋いな……」

——わいわい言いながら着替えて、みんなで並んでステーションへの道を歩く。夕暮れが迫つて、身体中に心地よい疲れがあつて、解放感や達成感があつて、これからのお抜きへの期待がちょっとぴりあつて。

部活つて、いいなあ。

——前から目をつけてた大型店舗についた。

我が家はなぜかカラオケに行きたがらない一家で、といつてわたしも独りカラオケをやるほど熱心でも無いので、こういう機会は素直に嬉しい。

夕方だからか混みかけてて、ちょっとだけ待つ。

「……こつとんさん、こつとんさん」

「なに、明日葉ちゃん」

「フリードリンク、つてなんですか？」

「飲み放題つて意味です」

「おおーっ、アメリカみたいですねー」

「アメリカみたいですよー」

「でも、飲み放題で、カラオケまで使って、貸切スペースですと、結構お高くなり

ませんか。私、今日はあまり手持ちのお金が

「一時間五〇〇万円です！」

「五〇〇万ですか……カードは使えますか？」

「払えるのか」

「てかなんだその打出の小槌」

「こつとん、明日葉ちゃん弄つて遊ばないの」

「へへへ、ウソウソ、五〇〇円だよ」

「五〇〇円!!

……アメリカみたいですね

「アメリカみたいですよ。

あつ、そうだアメリカみたいで思い出したんだけど、みんな背番号決めといてくれって

「なんでそれで思い出すんだよ。こつとんもおかしなヤツだな」

「アメリカが背番号の本場じやない。

空きは6、8、12、13、15、17、18、20以降

「うーん……」

「あ、可憐ちゃんは9あげるつて。流乃さんの許可も取つてるつて、ナナさんが」

「あ、それ悪いなあ。あたし18とかでいいんだけど。代表でもずっと着けてるからまあ愛着無いわけじやないし」

「ただ、ユニフォーム二枚買い換えるのもつたいないから、もう少し待ってくれつて。だからそれまで暫定で。ちなみに流乃さんは5番にするつて。こだわりないから気にしないで、つて言つてた」

「あそゆことね。申し訳無いけどうれしいからもらつちゃおつかな。やつぱ9番はエース・ストライカーダカラね！ それまでは18で」

「はい」

「じゃあたしや20いこつかな」

「なにか由来があるの？」

「GKで誰か憧れる人つてパツと思いついたのが、（川口）能活さんさ。特に日本代表を初めてのワールドカップに導いたジョホールバルの歓喜！」

「ああ、あんときや死闘だつたな！」

「へー」

「あつ、これはサッカーやるなら観ておくべき観ておくべき。こんどビデオ持つてくる」

「そう。あのいま観ても胃が痛い最終予選を守りきつた能活さんの背番号が20だつ

たんだ。日本の初めてのワールドカップでも同じ番号着けて……あたし、キーパーで誰になりたいって聞かれたら、能活さんになりたい！」

「なれるなれる。あんたならなれるよ」

「またテキトー言うだろ。

そいや明日葉、今日着てたレプリカの17はなんかあんの？」

「あ、はい。平安時代、西九条家が宮中に参内致します時の席次が一七番目だつたそうで、以来八〇〇年当家のいわばラッキーナンバーとして」

「も、もういいもういい、17決定、決定で。

じやエレ、8番とかもらっちゃえよ」

「エ、でもなんだかいい番号っぽいデスよ？」

「あんた必要以上に謙虚だからさ、番号ぐらいレギュラーミたいなの着けて気持ちを大きく持て」

「いいかも！ キヤプテン讃めてたよ、すごく走れるから、ちょっと頑張つたらすぐレギュラー取れるつて！」

「ホ、ホントですか？」

「……やー、でも……」

「ダメだダメだ、そうやつてちいちゃくなるのがスポーツじゃ一番よくない。はい

エレ8でけつてーい！」

「エー……」

「いいよいよ、きつと似合つてる！ 働き者のハニービーつて感じ！」

「はにーびー？」

「はち」

「あー……いや？ あー……こつとんつて、変なヤツだな」

「こつとんは、どうしマスか？」

「えつ、わたし？ わたしは選手じやないし……」

「まサポ番号つてことで12番でももらつときなよ」

「あ、ユニ作つとくのもいーよ！ ジャージの下にでも着てるとね、やっぱチーム
と一体感あるから」

「なるほど！ 確かにそうだね！ じゃあ、サポーターの皆さんを代表するつてこと
で、12番を！」

「ありすちゃんはどうする？」

「んー……私特に思い入れのある番号とか無いから……じゃあ、一番端つこの21に
します」

「あつ、でもなんとなく21つて似合いそう」

「なんか最後の切り札つて感じだな！　いま21世紀だし！」

「いや……あのさ、これマジメな話なんだけど」

可憐ちゃんがありすちゃんの方に身を乗り出した。ありすちゃん、のけぞる。

「ありす、センスあるよ。あの0角度シユートはなかなか思い切れない」

「ああそだそだ！　あれあたしも撃つとは思わなかつた！　むしろ愛さんよく
搔きだしたよあれ！」

「あつ、あれは、なんだか先輩達が結構思い切りよくシユート撃つてたから、あー
撃つていいのかなー、と思つて……可憐ちゃんがゴール前に居るし」

「だからそれがセンスだ、つて。

もちろん最後に決めた明日葉もお見事だつたけど、あのシユートから連続攻撃が
始まつたんで。

あたし、楽しみにしてるよ」

「うひー、ユースのエース様のお墨付き出ましたぜー！」

「いや、今日はホントみんな、がんばつた！」

あたしさか勝てるどころか、1点も無理だ、つて思つてたもん。前半でボロボ

口にされて後半手抜いてもらつてカッコだけ五分みたいな形にする接待サッカーかな、と思つてたもん。まさかマジにさせて、まして勝つなんて……ありえない

「あつ、それ聞こうと思つてたんだけど」

わたしは、一応、確認した。プレイヤージやないから、肌感覚がわからない。

「……やっぱり手加減、してくれてない？」

「いや、前半は流してたところもあるけど、後半特に1点こっち取つてからはかなりマジだよ。ま、紅白戦と公式戦はまた違うんだけど、自信持つていい」

「そうなんだ……」

「だからみんな。

マジでやつたらホントに今年も、全国のピッチいけるよ。そしてそこに立てる」

可憐ちゃんの目は、真剣で澄んでいた。
わたしも、こういう瞳ができたら。

「……がんばろう」

「「うん」」

低く言う彼女が出した拳に、千里ちゃんが拳を乗せた。同じように、ありすちゃん、エレちゃん、明日葉ちゃん、そしてわたし。六個の拳タワー。

「「……」」

「……でこれ、どうすんの？」

「こつとんが」

「わたしが？」

「やつてくれる」

「え、ええーつ！？」

可憐ちゃんサツカー以外わりと何も考えてないな……

「……れ、れでい———……」

「……」

「『ゴー！』って言つ」

「『ゴーーー!!』」

ああ……

「……ふつ」

「あははははははは……」

そのへんの息もきつとこれから、合うのだろう。

「『青春！ プレイボール！』って感じですー！」

「キックオフだよ」

「あははは……」

明日葉ちゃんの言葉に、真顔でツッコむ可憐ちゃんとちーちゃんが、可笑しかつた。ありすちゃんとエレちゃんと三人で、おなかを抱えた。

「……六名様でお待ちの住吉様、ご案内いたします」

「はい」

店員さんに案内されて、部屋に入つた。

「……ス、ステキです、!!

「ナウな茶室みたいですよー!!」

「ナウな」

「茶室」

「あ、明日葉ちゃん、一緒にドリンクコーナー行こうか、ジャパニーズ・フリー・スタイルを見せてあげる」

「ホントですか!? 行きます、行きますー」

「みんなお先にどうぞ」

お嬢様は一杯落とし珈琲サーバーに大変な興味を持つておられた。

「……これは便利ですね……うちではいつも爺が手で豆を挽いて……爺に買つてあげます！」

「たぶん爺は泣くと思う」

「こんなにもフリーで、お店は潰れないのですか？」

「これ一番高い珈琲でも多分一杯二〇円とかだから、絶対潰れない」

「そうなんですかー！」

こつとんさんは物知りですねー」

「わたしそういう『世の中こうなつてる』系雑学本好きなのー」

たぶん明日葉ちゃんの方がわたしの知らない世界たくさん知つてますけどね。

えーと可憐ちゃんがブラックの珈琲と、ありすちゃんがミルクティと、ちーちゃんのメロンソーダと、わたしは喉が渴いたので烏龍茶氷抜きで……つて明日葉さん？

彼女のトレイには、二〇杯ほどの色とりどりのジュースが……

「……あの、初めて見るお飲み物ばかりで……ダメ、ですか？」

「飲めば、飲めば文句出ない」

「がんばりますー！」

「手伝うよ」

ブレンド、という上級技はまたこんど教えよう。

……部屋に返ると、まだ音楽は鳴つてなくて。

「……あれ、藤原の遠慮のかまたり？」

「ありつとー！」

いやあ、やつぱ今日のトップはやつぱこつとんつしょ

「そうそう。今日のマン・オブ・ザ・マッチはこつとんだと思うよ。ハーフタイム
のドリンク、助かつた！」

「うん、あれで勝ったようなものだよ」

「生き返った気分デシた！」

「あはは、あんなのなんでもないのに。みんなのガンバリに比べれば千分の一ぐ
らいだよ」

「いやあ、時々出してた指示も適切だつたし、ベンチワークの重要性を思い知つた
一戦だつたなー」

「ほらほら、可憐がそう言つてんだから。

なんでも好きなの入れてシャウトの口火を切つてくれ！」

「そう？」
「じやあ遠慮なく。

「……よし、みんなで来るの初めてだからね、流行りのアイドル・ソングを」
「おつ、いいねいいね」

「現代美術風にHIPHOPします」

「は？」

「えーと……ぱちぱちぱち、と……

「まなんでもいいや、はい明日葉、これ持つて
「あーっ、マスカラですね！？」一度演奏してみたかつたんですねー」
「バンタリンもあるぞー！　スカタネットも！
「……つて、知らない曲だなー」

「わたしも知らないの！」

「は？　えと、まあ、とりあえず待つてました！」

「いよつ、日本ーーつ！」

「きやーこつとんちやーん!!」

——そして流れ出す、軽快なイントロ。

古都は歌つた。

こころのままに、かんじるままに。

「♪あーあー　ああおお　おおーあー!
えーえーボウボウ　デベデベーーー!」

つい一週間前のわたしと、今のわたしは、まるで別人。
なんて偶然。なんて運命。なんて……奇跡。

「♪ラツヴラヴァラヴァラーヴ!
ラツヴクラフトキユトウルギヤツシユギイヤツシユ!」

でもそれは、あの瞬間、ナナさんの声に耳を傾けたから。
あのわずかな一步が、ほんの少しの勇気が、

わたしを、こんな素敵な友だちに、仲間に、
あんな燃える時間に、
導いてくれた。

「♪あなたは…もうう、神田川。

アイムローリン・サンダー！ アーーーオ！

イエヤアアアアアアアアアアアアアアアオ！」

これからどんな日々が、待つて いるんだろう。

生成りのコットンのシャツに、どんな色を染めるのだろう。

「♪マイヨ・ネイズ！ マヨ、ケイチヤップ！ ケイツ、ケケケケケケイお好みソ
ース！ おたふくソオオオオオオス！」

どんなときでもわたしはたぶん、忘れない。

この「勇気こそが奇跡を起こす」 っていう、シンプルな真実を。

「♪イエス！ イエス！ ハウ……イエス！ イエズス！ ジーザス！ オウ・すう
ぱあスタアーーアアアアあああああああああああああああああ！」
……デケデン、と。

「ご清聴ありがとうございました」
「……あれ？」

「……みんな、寝てる。」

ありすちゃんとエレちゃんがお互いをかばうように折り重なつてソファに横たわ
り、可憐ちゃんが飛行機の緊急時のように膝に顔を埋めてうずくまり、ちーちゃん
が天井向いて泡吹いて痙攣しててる。おもしろいのは明日葉ちんで、マラカスの太
い方を耳に当ててタンバリンを被つてる。
さすがお嬢様、不思議な寝方。

そつか……みんなホントに今日は疲れたんだよね……ごめん、わたしだけはしや
いじやつて。こういう時もやっぱり、マネージャーが一番、みんなを盛り立てるべ

きなのに……

じやあ、子守唄に、もう一〇曲☆

わたしはなんにも、できないの。
だつてわたしはマネージャー。

パスもシユートもできません。

でもだからこそ、よく見ます。
気持ちを勇気を力をからだを、
みんなのことを、誰よりも。

でもだからこそ、祈ります。
勝利を希望を無事をいのちを、
みんなの喜び、誰よりも。

あとはまかせて、わたし가 やるから。

みんなはあそこで、楽しんで。

力いっぱい、 目いっぱい。

悔いなきように、

笑えるように！

そうよわたしはマネージャー。

みんなを笑顔に導く仕事、

ことことこつとん住吉古都、

いまが青春、 キックオフ !!

Never GiveUp, Go Ahead!

Miracles! Episode 12

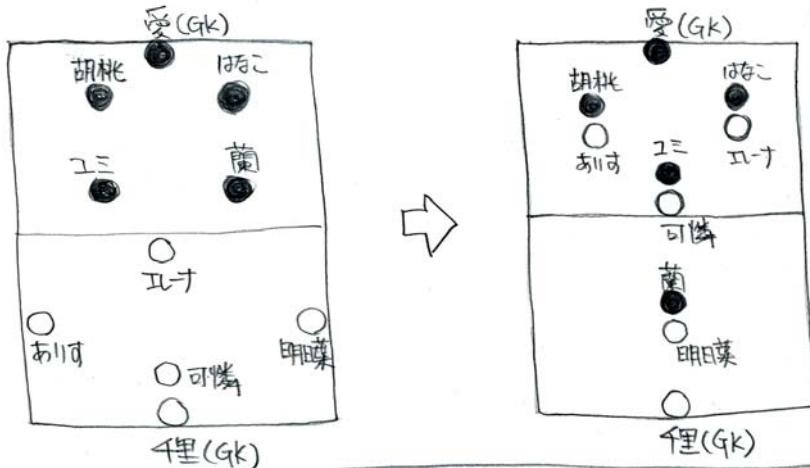
Cotton Hearts

○若衆
●年寄

DSC 新入生歓迎紅白戦

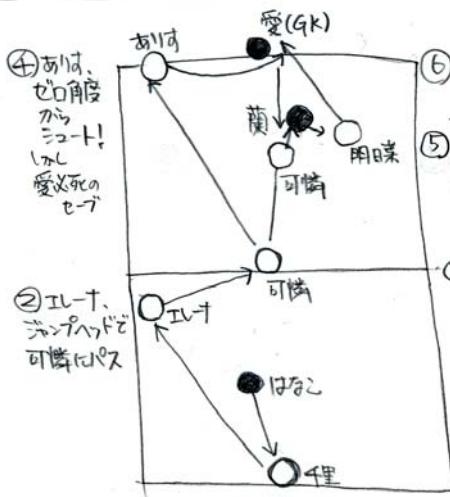
古都
見物人
美術
ササ

忍
モモ
マキ
森内



0

決勝点の
もう



・胡桃はあります
+振り回され気味
(横たわるごときヨコヨコ
重くタイヤに弱いのは
以前から弱点了)

・エニシは死んで
帰還中
(サンバ日本を亡命した)

■あとがき

ありがとうございます、ながたかずひさです。
お楽しみいただけましたでしょうか。

今回はこつとんのリメイクに挑戦しました。
旧作は 00 年 4 月発行ですのでなんとひとまわりぶりです。
といっても、旧作とは全く違うお話ですので新作みたいなものですが。
1 年生が「DSC」のちの「ミラクルズ」に入った経緯などを。
時系列的には #0 「その名はミラクルズ」の 2 週間ほど前になりますね。

古都はマネージャーというポジション上、毎回セリフや出番はわりとあるんですが、
本人の個性を發揮することは薄かったので、今回は思い切り暴れ……
いや、まだ暴れ足りないかな？
またカオスソング（本人は全くそう思ってないのですが）
をどこかで歌わせてあげたいです。

ホント運命なんていつどう動いていくかわからないもので、
僕も学生時代は文藝部にいましたが、積極的に入った覚えはないです（笑）
なんとなく入ってズルズル居て、気がつけばこんな仕事についてました。
初めからそういう運命だったのか、それともどこかでカチツとこういう運命への分岐を
選んでしまったのか……まあ、そのへんわからないからこそ、おもしろいんですけどね。

お読みいただきましてありがとうございました。
あなたにしあわせが訪れますように。

■おくづけ

書名 Miracles! Episode 12 Cotton Hearts
作者 ながたかずひさ
発行 サークル PowerNetwork!!
発行日 2012 年 8 月 12 日
Web <http://rakken.net/>
twitterID KazuhisaNagata
Mail nagata@mti.biglobe.ne.jp



Miracles! Episode 12 (#1) - Cotton Hearts -
Powered by Kazuhisa Nagata